驢馬皮（ポー・ダーヌ）と鉢かづき
――身を窶（やつ）す流浪の姫君たち――

鈴木　滿

〔初めに〕

何不足ない、あるいは、やんごとない身分に生まれついた少女が、ある事情で親許から世の荒波の真っ只中に放り出され、人から爪弾きされるむさくるしい姿に身を窶して、侮りを受けながら底辺の暮らしに辛酸を嘗める。けれども――やがてその天性の美質（家事をこなすにも少女は優秀。日本ではこれに重きがおかれないが）のお蔭でどん底の境涯から本来そうあるべき位置に一瞬にしてみごとに返り咲く……。日本でも愛読者が多い、あるいは、かつては多かった、また近年人気あるＴＶアニメの原作ともなった小説『小公女』[1]（アニメ「小公女セーラ」）も『家なき娘』[2]（アニメ「ペリーヌ物語」）も、もとより細部は異なるが、大雑把に申せばこうした筋に沿っている。ちなみに少年が主人公なら、『オリヴァー・トゥイスト』[3]や『家なき子』[4]がこの範疇に入ろう。虚構（フィクション）とは百も承

知の上で民衆の間において口から口へと伝えられた物語、すなわち民話（フォークテイル）folktale／昔話（フォルクスメルヒェン）Volksmärchen――この小論ではおおむね「民話」なる語を用いているが、「昔話」となっている箇所もある。いずれも同義。なお用例は少ないが「メルヒェン」とした場合には、本来の民間伝承である民話（昔話）ばかりではなく、「創作昔話」Kunstmärchen、「本になった昔話」Buchmärchenをも含む広い表現である――にも当然のことながらこの類がある。

そうした口承文芸の代表としては、イングランドで「蘭草頭巾（キャップ・オー・ラッシェズ）」Cap o' Rushes[5]、ドイツで「千びき皮（アラライラオ）」Allerleirauh、フランスで「驢馬皮（ポー・ダーヌ）」Peau d'Asne（現代の綴りではÂne）、日本で「鉢かづき」（訛って「鉢かつぎ」とも）と呼ばれ、洋の東西で人口に膾炙している話[6]が挙げられよう。フランスの「驢馬皮（ポー・ダーヌ）」は、ペローが再話しているためヨーロッパではとりわけ有名なので、民話の話型索引であるATUの五一〇B「驢馬皮（ポー・ダーヌ）」――ATUの前身であるATでは「金の衣、銀の衣、星星の衣（蘭草頭巾）」――にその名が付けられている。なおATU五一〇Aは「シンデレラ。（チェネレントラ、サンドリヨン、アッシェンプッテル）」。二つの話「シンデレラ」[7]（および「チェネレントラ」「サンドリヨン」「アッシェンプッテル」）」と「驢馬皮（ポー・ダーヌ）」（および冒頭にタイトルを並べたくさぐさの類話）は姉妹関係にあるのでATUでは五一〇「シンデレラと驢馬皮（ポー・ダーヌ）」として一括りにされている。

なお、以下本文および注における〔　〕内の記述は論者の補足である旨、ここでお断りしておく。

ATU五一〇Bに記されたこの話型の粗筋（英語からの邦訳）は以下の通り。

［全訳］

ある王がその妃の臨終の際彼女に約束する。〔再婚するとすれば、〕彼女と同じように美しい（〔あるいは〕ある特別な指環がぴったり嵌まる）女性としか結婚しない、と。王はやがて成長した実の娘と結婚しよう、とする。なぜなら娘が唯一この条件に叶う女性なので。婚礼を引き延ばすためにこのうら若い女性は、太陽のような（黄金の）衣装〔＝ドレス〕、月のような（白銀の）衣装、星星のような（ダイヤモンドの）衣装、それから多種多様な毛皮でこしらえた外套（〔あるいは〕木でできた外被）が欲しい、と王に頼む。王がこれら全てを提供すると、娘は父親の許から逃亡し、例の皮（〔あるいは木の外被〕）を着て変装、厨房の下女（〔あるいは〕鵞鳥番の小娘）として別の城で働く。

彼女が働く城で一連の饗宴が催されると、乙女はこっそり〔携えて来た〕その豪奢な衣装を纏う。王子が彼女に惚れ込むが、厨房の下女だとは気づかない。続く何日か王子は厨房の下女を虐待する。饗宴の間王子はくだんの美女に、どこのお生まれか、と訊ねると、相手は意味の隠された答えを返すが、これは王子が厨房の下女に加えた虐待を仄めかすものである。王子は美女に指環を一つ渡す。次いで王子は恋患いに陥る。厨房の下女としての役柄で、女主人公は王子からもらった指環を王子に供するスープ（〔あるいは〕パン）の中に忍ばせる。王子は彼女を見つけ、これと結婚する。

乙女が、証拠品によって確認される代わりに、〔みっともない皮や木の外被を脱いで〕沐浴する、あるいは〔豪奢な〕衣装を身に着けることによって発見されることもある。

ＡＴＵ五一〇Ｂの粗筋はこう記されてはいるものの、以下に紹介する民話、あるいはそれを素材として文人が仕上げた物語においては、導入部は必ずしも「父親が実の娘に結婚を迫る」ではない。

分明なことだ、と思うが、念のため確認しておくと、身を窶す流浪の姫君の伝承は二つの話の緩やかな結合体である。すなわち、女主人公が寄る辺なきさすらいの身となるまでが導入部あるいは前史 Vorgeschichte で、下働きの仕事に辛酸を嘗め、遂に元のしかるべき身分に戻るまでが本論 Kerngeschichte である。導入部は民話の語り手の工夫、思いつきにより、たやすく他のモティーフと置き換え得る。導入部に限らず、話の細部あるいはモティーフの交換は、フィンランドの人にして比較口承文芸研究の草分けの一人であるアンティ・アールネ[8]が夙に指摘している（A・アールネ著／関敬吾訳『昔話の比較研究』、岩崎美術社、一九六九）ように、民話においてしばしば見られる現象である。そういうしだいで、父親を「塩よりも好き」あるいは「塩のように好き」と言って追い出されるモティーフが父娘相姦モティーフとともに導入部に用いられることが多い。また、父親の後妻、すなわち継母の讒言ないし奸計、あるいは父親の単なる愛想尽かしによって流離の旅に出ることもある。更に、小論では扱わなかったが、日本では娘が父親のした約束のためしょうことなしに動物の嫁になろうとする「蛇婿譚」「猿婿譚」から始まるものもある〔この場合、娘の知恵で結婚の前に動物婿は死んでしまい、娘は自由の身になるが、結婚を承諾しなかった上の二人の姉たちが父親の手前さぞ気まずいだろうから、自分は生家へは帰れない、と当て処もなく歩いて行く、というかなり説得力に欠ける導入となる〕。

しかしながら、おそらく整理・統合上已むを得なかったのであろうし、それはそれでよろしいのかも知れないが、ＡＴでもＡＴＵでも「塩のように好き」Love Like Salt がプレヒストリイである流浪の姫君譚は九二三として五一〇Ｂとは全く別項目に立てられている[9]。このように峻別すると、小論冒頭に記したような筋書きの物語を纏め

て考える上にかなりの支障が生ずるので、論者はＡＴＵ（旧ＡＴ）五一〇Ｂ型とＡＴＵ（旧ＡＴ）九二三型とを分けることにあえて意を用いなかったし、継母の介在による流離の旅が導入部である場合も同様に扱ったことをお断りしておく。

ＡＴＵ九二三「塩のように好き」に記されたこの話型の粗筋（英語からの邦訳）を参考までに記しておく

［全訳］

ある王（〔あるいは〕金持ちの男）が自分の三人の娘に向かって、彼女らが自分をどれほど愛しているか、と訊ねる。二人の姉たちはそれぞれ〔父親に対する〕自分たちの愛を貴重な（〔あるいは〕甘い）物（黄金、宝石、砂糖、蜂蜜、豪華な衣装）と比較する。しかし末の娘は言う。私はお父様のことがお塩のように好きです、と。父親は末の娘の返答に腹を立て、彼女を放り出す（〔あるいは〕殺せ、と命じる）。一方、上の娘たちには彼女らのおもねりの価値に応じて報酬を与えるのである。

末の娘はそれから余所（よそ）の国で下女として働く。後にこの国の王が彼女と結婚する。彼女は父親を婚礼の食事に招き、塩の全く入っていない料理を供する。かくして父親は塩が必要欠くべからざるものであることを認識するに至る。娘は自分の素性を明かす。

＊さて、世界のさまざまな人人によって語られ、聴かれ、書かれ、読まれてきた、むさくるしい恰好をして辛い仕

事に明け暮れる境涯に落とされたかわいそうなお嬢さんが、幸いにも一挙にして元の地位を回復する嬉しくも愉しいお話を、粗筋で、また、場合により全訳で、できるだけご披露し、更にこうしたお話を構成するさまざまなモティーフをいくらか考えてみよう、というのが本論のごくごく素朴な、他愛ない目的である。

従って、美女が奇っ怪な衣にくるまるのは、「曙」Aurola, Morgenröte の「宵」Abend への移行を示している、とか、春が冬へ変わる象徴だ、とか主張する類の、とりわけ十九世紀末にヨーロッパで流行した小難しい神話学的解釈の是非には立ち入らないし、また、二十世紀前半も早くにこれまたヨーロッパで好まれた社会学的解釈の評価もその分野の専門家にお任せしたい。ただし、そうした社会学的解釈の一つとそれに対する反駁はちょっと紹介しておこう。

「千びき皮は灰かぶり〔すなわち「シンデレラ」〕や黄金の髪を持つ男[10]とともに下層の向上をあつかった大きな昔話の一つであり、本当の夢物語 Traummärchen、たとえばハウプトマンのハンネレ[11]のように、社会的失権者の幸せの夢 Glückstraum である、とはテゲトフ[12]がしばしば唱える社会学的説明であるが、これはこの場合当たっていない。なにしろ千びき皮は、ほんのかりそめに、しかも見掛けだけ婢女（はしため）になっているに過ぎず、実際は王女だからである。一番手取り早いのは、この昔話を、主人公を非道悲運の憂き目に遭わせておいて最後に元の地位に戻してやる、あの中世の運命譚 Schicksalsroman の構想と比較することだ」。

右の所論[13]はまずまず妥当であろう。もっとも、「千びき皮（アラライラオ）」なる外套そのものの解説はここの前後でもなされていない。この外套は女主人公を取るに足らぬ賤しい人物に見せ掛ける、との見解に留まっているようだ。本小論で

はこうした褒しの道具（アイテム）その他のモティーフについても考えてみた。最終項目〔十九〕をごらん戴きたい。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

以下〔二〕〔三〕〔四〕では、グリム兄弟によって採録されたこの種の物語を時間順に整理し、ある場合は全訳、ある場合は粗筋で紹介、いくらか詳しく分析してみる。この分析によっていわゆる「グリム童話」の編輯経緯、ひいてはいわゆる「グリム童話」の本質に少しでも迫れれば、と思う。

〔二〕いわゆる「グリム童話」〔以下KHM（カーハーエム）――正式名称（グリム兄弟によって集められた）『子どもと家庭のための昔話集』*Kinder- und Hausmärchen*（gesammelt durch die Brüder Grimm）の略称を用いる〕**初版[14]以前のグリム兄弟のノート「エーレンベルク手稿[15]」**

①　第Ⅰ部（一一番目）「鼠っ皮の王女様」Prinzeßin Mäusehaut

〔全訳〕

昔むかし王様がおりました。王様はお姫様を三人お持ちでした。王様はそのうちだれがご自分を一番愛しているのか知りたくなりました。すると一番上の姫君は、王国全体より愛している、と申しました。二番目の姫君は、世

界中の宝石と真珠全部よりも大事、と申しました。三番目の姫君はこう答えたのです。私は父上が塩よりも好きでございます、と。すると王様は、姫が自分への愛情をそんなつまらない物と較べたので、かんかんになり、姫を一人の召使いに引き渡し、森の中へ連れて行って、死なせてしまえ、と言いつけました。けれども召使いはこんな綺麗な王女を殺すのは厭でしたし、王女は、鼠の皮でこしらえた衣装〔突然話に登場〕だけ手に入れて欲しい、そうすればきっと自分でなんとか逃げます、と相手に頼みました。さて召使いがこれを持って来ます〔王宮にあったのであろうか。よく分からない〕と、王女はこれにくるまって男のひとに変装したのです。こうしてお隣の王様のところへ行き、そこで召使いとして仕えました〔そして「鼠っ皮（モイゼハウト）」と綽名されてこき使われる〕。お姫様は毎晩王様の長靴を脱がせなくちゃなりません。[16] すると王様はそれを鼠っ皮（モイゼハウト）の頭に投げつけるのでした。ある時王様が、おまえ、どこの生まれだ、とお訊きになりますと、鼠っ皮（モイゼハウト）は「長靴を頭に投げつけたりしない国の者でございます」と答えました〔ここから欠落がある。おそらくこの部分はこうであろう。――やがて舞踏会が催される。鼠っ皮（モイゼハウト）は鼠っ皮を脱ぎ、絶世の美女に戻ってその舞踏会に出て、王に見初められる。王に、どこからいらっしゃった、と訊かれ、「長靴を頭に投げつけたりしない国の者でございます」と答える。舞踏会最後の晩、王は相手の指に指環を嵌（は）める。その後王は恋患いに陥るのかも。鼠っ皮（モイゼハウト）がこしらえたスープを王が食べる。鼠っ皮（モイゼハウト）はあらかじめスープの鉢の底に貰った指環を入れておく。スープを食べ終わった王はあの美女に贈った指環を見つける――〕。――そこで王様が、この指環がどうして入っているのか、と訊ねますと、鼠っ皮（モイゼハウト）が王様の御前（ごぜん）に連れて来られます。そして鼠っ皮（モイゼハウト）が衣装を脱ぎ捨てますと、黄金の髪の毛がさっと溢れ出し、姫君のすばらしい美しさに王様は目もくらむばかりでした。王様は姫君に歩み寄り、冠をその頭に載せます。そこで姫君はお妃様になりました。ご婚礼の日には姫君の父親の王様も招待されました。でも、ご自分のご息女だとは気づきません。食卓で王様の前に置かれるお料

理はどれもこれも塩気がありません。そこで王様は不機嫌になり、このような料理を食べるくらいなら、死んだ方が増しだ、と申します。その時〔婚礼を済ませたばかりのこの国の若い〕王妃様がお出ましになって、正体を明かし、ご自分の言葉を父君に思い出させたのです。

② 第Ⅱ部（二番目）「千びき皮（アラライ・ラオホ）」（あらゆる種類の生皮）Allerlei Rauch

［全訳］

千びき皮（アラライ・ラオホ）は継母によって家から追い出される。身分のあるよその男性〔後に出る公爵〕が、継母の実の娘の方はそっちのけにあしらい、愛の徴（しるし）として継娘〔＝後の千びき皮（アラライ・ラオホ）〕に指環を捧げたため。千びき皮（アラライ・ラオホ）は〔あらゆる獣の皮でこしらえた外套で身を窶して〕逃れ、公爵の宮廷に行って靴磨き女となり、こっそり、正体を知られることなく、舞踏会に出る。最後に〔もらった〕指環を白パンの下に置いたスープをこしらえる。これによって発見され、公爵の奥方となる。

〔三〕KHM初版第一部

① 六五「千びき皮（アラライ・ラオ）」（あらゆる種類の生皮）Allerlei-Rauh

ドロテーア（愛称ドルトヒェン）・ヴィルト[17]によって一八一二年十月九日に語られた。

［全訳］

昔むかし王様がおりました。王様にはお妃がおありでしたが、この方はこの世で一番の美女で、その髪の毛は混じりけなしの黄金でした。二人の間にはご息女も一人いましたが、このご息女の髪も全く同じで黄金でした。そのうち王妃様がご病気になりました。そして、死ぬに違いない、という気がした時、王様を呼んで、こう頼みました。私が亡くなりましたら、私と全く同じに美しく、全く同じ黄金の髪を持つお人とでなければ結婚なさらないで、と。そして王様がそう約束すると、亡くなりました。王様は長いこと悲しみ続け、二度目のお妃のことはこれっぽかりも考えませんでした。でもとうとう王様の顧問官たちが、再婚なさるようにお勧めしました。そこで何人もの使者がありとあらゆる王女様方のところに遣わされましたが、亡くなった王妃様のように美しく、そうした黄金の髪をした方なんぞもうもうこの世に一人も見つかりはしませんでした。けれどある時のこと、王様がふとご息女をご覧になると、この方がお母様そっくりの上、やっぱり同じ黄金の髪を持っていることが分かったのです。で、王様はこう考えました。この世でこれほど綺麗なのは他にありはせぬ。なんとしても余は余の娘と結婚しなくては、と。そう思ったとたん、姫君がかわいくてかわいくてたまらなくなったものですから、すぐさま顧問官たちと姫君に自分の心積もりを知らせました。顧問官たちは思い留まらせようとしましたが、無駄でした。王女様はこうした神様をないがしろにしたもくろみに心底びっくりしました。さてこの方はお利口でしたから、王様にこうお願いしたものです。まず私に衣装を三着作ってくださいまし。一着は太陽のような黄金色のを、一着は月のように

白いのを、一着は星星のように輝いているのを。それからまた何千種類もの毛皮でできた外套も。これには王国中のありとあらゆる獣がそれぞれの皮を少しずつ差し出さなくては、と。王様はひどくやきもきしていましたので、王国中を仕事に掛からせました。王様に仕えている猟師たちはありとあらゆる獣を捕まえてその皮を剥がなければなりませんでした。その皮で外套がこしらえられ、まもなく王様は姫君の許に望みの品を持って来たのです。そこで王女様は、明日お父様と結婚いたします、と言いました。けれども夜になると、以前婚約者からもらった贈り物[18]をかき集めました。これは黄金の指環、黄金の小さな糸車、黄金の小さな糸巻き枠[19]でした。例の三重ねの衣装はというと胡桃の殻にしまい込み[20]、顔と両手を煤で黒くし、あらゆる種類の毛皮で作った外套にくるまって逃げ出しました。一晩中歩いて、とうとう大きな森に入りました。ここまで来ればもう安全。そして疲れ切ってしまったので、空洞（うつろ）になった樹の中に入って眠ってしまいました。

お日様が高く昇ってもまだ眠っていますと、折も折、婚約者の王様がその森で狩をしました。ところが猟犬どもがその樹の周りを駆け回り、くんくんふんふん嗅ぎ回りました。この樹にはどんな獣が隠れているのか見届けてまいれ、と王様に言い付けられた猟師たちは、戻って来て、こうお答えしました。樹の中にはなんとも奇妙奇天烈（きてれつ）な獣がおります。かような代物（しろもの）はてまえども、これまでの生涯で見たことがございません。肌に着けておりますのはあらゆる種類の生皮でございます。そして横になって眠っております、と。王様は、それを捕まえて縛って〔狩りの獲物を運ぶための〕荷車の後に乗せるように、と指図しました。猟師たちが言われた通り捕まえて、引っ張り出してみますと、娘っこであることが分かりました。で、縛って荷車の後ろに乗せ、連れて帰ったのです。「千びき皮（アラライ・ラオ）」と猟師たちは言いました。「おまえはお城の調理場に持って来いだ。薪や水を運んだり、灰をかき集めたりするがよかろう」と。そうして階段の下のちっぽけな家畜小屋みたいなところをあてがいました。ここには日

も差し込まないのです。「おまえ、ここに住んで寝るがいいや」。さて、そういうしだいでこの娘は調理場に入って、料理番の手伝いをし、鶏の羽をむしり、火を掻き起こし、野菜を選り分け、それから他のありとあらゆる賤しい仕事をいたしました。娘は何もかもきちんとやってのけましたから、料理番は優しく扱い、宵になるとよく千びき皮（アラライ・ラオ）を呼んで、残り物をなにくれとなく食べさせてくれました。でも娘は王様がお床につく前に、お部屋へ上がって行って、長靴を脱がさなければなりませんでした。片っぽ脱がせ終わると、王様はいつもそれを娘っこの頭に投げつけるのでした。(21)

こうして千びき皮（アラライ・ラオ）は長いこととても惨めな暮らしをしておりました。ああ、麗しの乙女よ、そなたはいったいどうなるのでしょうねえ。ある時、お城で舞踏会が催されることになりました。千びき皮（アラライ・ラオ）は考えました。私、もう一度私の愛（いと）しい許婚とちゃんとした形で会えればなあ、ってね。そこで料理番のところへ行って頼みました。ほんのちょっと上にまいって、お部屋の扉の外から大層なご盛儀を拝見いたしたいのですが、どうかお許しのほどを、と。「行くがええさ」と料理番は言いました。「だがな、半時間以上おっちゃあならん。今晩はおまえ、これからまだ灰を掃き集めにゃならねえからの」。そこで千びき皮（アラライ・ラオ）は小さい洋燈（ランプ）を提（さ）げて、あてがわれている家畜小屋に戻り、体から煤を洗い落としました。すると咲き乱れる春の花花そのものといった美しさが立ち現れたのです。それから毛皮の外套を脱ぎ捨て、胡桃の殻を開き、太陽のように輝く衣装を取り出しました。乙女がこれを着飾り、上へ上がって行きますと、だれもが行く手を譲り、広間に入っていらしたのは、どこぞの高貴な王女様に違いない、と考えました。王様はすぐに姫君を舞踏に誘いました。踊りながら王様は考えました。このどこのだれか分からない美しい王女は余の愛しい許嫁（いいなずけ）になんて似ているのだろう、と。見れば見るほどそっくりなので、ほとんどそうだ、と確信し、舞踏が終わったら、相手に訊いてみよう、と思いました。けれども姫君は踊り終わると深深とお辞儀を

して、王様が我に返る前に姿を消してしまいました。王様は衛兵たちに問い質しましたが、そうした王女様が外へ出るのを見掛けた者は一人もおりませんでした。姫君は自分の家畜小屋に素早く走り入り、衣装を脱ぎ捨て、顔と両手を黒くし、あの毛皮の外套をまた纏っていたのです。それから調理場に行き、灰を掃き集めようとしました。でも料理番はこう申しました。「そいつは明日までそのままにしとけばええ。おれもちっとばかし上へ行って、舞踏会を覗いてみたいでな。その間に王様が召し上がるスープをこしらえておきな。だが、髪の毛一本中に落としちゃならん。そんなことしたら、おまえ、今後一切食い物にゃありつけねえぞ」。千びき皮（アラライ・ラオ）は王様のためにパン入りスープ[22]を作りました。そして最後に以前王様から贈られた黄金の指環を入れました。舞踏会がお開きになると、王様はご自分用のパン入りスープを持って来させました。その味がとても良かったので王様は、これまでこんなに旨いのは食べたことがない、と思いました。ところが食べ終わると、皿の底に指環が見つかりました。その指環をよくよく検分しますと、ご自分の結婚指環[23]だったのです。王様はなんとも不思議でたまらず、指環がどうしてここに入ったのか合点が行かず、料理番を呼びつけました。料理番は千びき皮（アラライ・ラオ）に腹を立てました。「おまえ、きっと髪の毛を落としたんだろう。もしそうだったら、幾つも拳骨を喰らわしてやっからな」。でも料理番が上にまいりますと、王様は、このスープをこしらえたのはだれだな、いつもよりずっと旨い、と訊いたもの。で、料理番は、千びき皮（アラライ・ラオ）がこしらえました、と白状しなければなりませんでした。すると王様は、その者をここへ遣わすように、と料理番に言い付けました。千びき皮（アラライ・ラオ）がやって来ますと、王様は言いました。「そちは何者だ。余の城で何をしている。スープの中にあったこの指環はどこから手に入れた」。千びき皮（アラライ・ラオ）は答えました。「あたしは父親にも母親にも死なれました哀れな子どもに過ぎません。持ち物なんぞ何一つございません。長靴を頭に投げつけられるのがせいぜいの者でございます。その指環にいたしましても、あたし、何一つ存じません」。そう言って走って逃げ出した

のです。

その後また舞踏会が催されました。すると千びき皮（アラライ・ラオ）は今度も料理番に、上へ行かせてください、と頼みました。料理人は許してくれましたが、やっぱりただの半時間だけ。それが過ぎたら調理場に来て、王様のためにパン入りスープをこしらえろ、と申します。千びき皮（アラライ・ラオ）はあてがわれた家畜小屋へ行き、体を綺麗に洗い、月の衣装を取り出して、積もった雪より清らかで輝かしい姿となりました。上へ上がりますと、丁度舞踏が始まったところでした。王様は千びき皮（アラライ・ラオ）に手を差し出し、一緒に踊りました。そしてもう疑いもなく、これが自分の許嫁だ、と思いました。なぜって、こうした黄金髪の持ち主は彼女以外にこの世にありっこなかったからです。でも、踊りが終わると、またしても王女様は広間から出て行ってしまい、どう骨を折っても無駄で、王様は姫君を見つけることはできず、姫君とただの一言も言葉を交わすことはできませんでした。王女様はまたしても千びき皮（アラライ・ラオ）に戻り、顔と両手を黒くして、調理場に立ち、王様のためにパン入りスープをこしらえました。料理番はその間上に上がって、見物をしていたのです。そしてスープができあがると、姫君は黄金の糸車を中に入れました。王様がスープを召し上がると、前よりずっとずっと美味しく思えました。それから最後に黄金の糸車を見つけた時には、前にも増して驚きました。なぜってこれはいつかご自分の許嫁に贈ったものでしたから。料理人が呼びつけられ、その後千びき皮（アラライ・ラオ）が呼ばれました。でも王女様はまたもや、あたしはこの糸車のことなんて何も存じません、こちらにおりますのは、ただもう長靴を頭に投げつけられるためでございます、とお答えしただけでした。

これで三回目ですが、王様は舞踏会を開き、許嫁がまたもや来てくれればいいなあ、と思いました。そうしたら、捉まえて放さないつもりでした。千びき皮（アラライ・ラオ）は今度も、上へまいらせて戴けませんでしょうか、と料理番に頼みました。でも料理番はこう小言を言ったものです。「おまえはまるで魔女みてえなやつだ。おまえはいつも何か

スープに入れよるし、わしより料理が達者ときとるわい」。けれども、千びき皮（アラライ・ラオ）が頼みに頼み、ちゃんといたしますから、と約束をしましたので、またしても、半時間だけだぞ、と言って行かせました。そこで千びき皮（アラライ・ラオ）は夜の星星のようにきらきら輝く星星の衣装を身に纏い、上に上がって王様と踊りました。王様はこんな麗人にはこれまで会ったためしがない、と思ったものです。ところで踊っている最中、王様は相手の指にある指環を嵌めました。それからあらかじめ、舞踏がとっても長く続くように言い付けておいたのです。でもやっぱり相手を捉まえておくことはできませんでしたし、一言も言葉を交わせませんでした。なぜって、踊りが終わると、相手はぱっと人人の間に跳び込み、王様が振り向く前に姿を消してしまったからです。千びき皮（アラライ・ラオ）は自分の家畜小屋に駆け込みました。半時間以上経ってしまっていたので、着ているものをさっと脱ぎ捨てはしましたが、急いでも体をすっかり黒くは汚せず、指が一本白いままでした。そうして調理場に入りますと、料理番はもういなくなっていました。そこで千びき皮（アラライ・ラオ）は急いでパン入りスープをこしらえ、黄金の糸巻き枠を中に入れました。王様は指環や黄金の糸車同様これも見つけたものです。そこでこのたびこそ、ご自分の許嫁が近くにいる、とはっきり分かりました。だってこうした贈り物をいろいろ持っているひとは他にありっこありませんものね。千びき皮（アラライ・ラオ）が呼ばれました。またしてもうまく言い抜けて、ぴょこんと逃げ出そうとしたのですが、逃げ出すはずみに、王様はその手の指が一本白いのを見つけ、それをぎゅっと握って相手を捉まえました。それからご自分が嵌めてやったあの指環を発見、毛皮の外套を剥ぎ取りますと、黄金の髪の毛がさっと溢れ出しました。これこそこよなく愛しい許嫁だったのです。料理番はたっぷりご褒美をちょうだいし、それからご婚礼が行われ、二人は死ぬまで楽しく暮らしました。

＊女主人公のいわば直属上司である料理番が、結びで「たっぷりご褒美をちょうだいし」たことになっているの

は、逆境時代にまあまあ優しくふるまった（そうかなあ）お蔭である。しかし、本来この物語の料理番には人情味などまるきりなくってよいのだ。また、現実の大家の厨房においても、料理番は下働きのこぞう風情にこっぴどく辛く当たったはずである。『小公女』でミンチン女史経営の女子学校に働く女の料理番が万雑用承りの女中に転落したセーラに対してそうだったように。

② 七一「鼠っ皮の王女様」Nr.71 Prinzessin Mäusehaut

ボルテ／ポリーフカ著『KHM注釈』[24]（以下BPと略す）によればこの物語の採録と削除は以下の通り。ヨハンナ（愛称ジャネット）・ハッセンプフルーク（カッセル）[25]によって一八一二年に語られた。しかし、第二版（一八一九）以降削除された。欠落があまりにも多いからか。

［全訳］

ある王様にご息女が三人ありました。王様は、だれがご自分を一番愛しているか知りたくなり、三人を御前に召し寄せて、お訊きになりました。一番上の姫君は、王国全体よりも愛しく存じております、と答えました。二番目の姫君は、世界中の宝石や真珠全部よりも大切です、と言いました。でも三番目は、お父様のことはお塩より好きでございます、と申しました。王様は、末の王女様がご自分のことをこんなつまらない代物と較べたのにひどく腹を立て、姫君を一人のご家来に引き渡し、森の中へ連れて行って、殺してしまえ、と命令しました。二人が森に

やって来ますと、王女様はご家来に命乞いをしました。ご家来の方は王女様に忠義でしたから、どうしたって殺しっこなかったことでしょう。そして、お伴をいたしまして、何もかも仰せの通りにつかまつります、とさえ言いました。でも王女様が欲しがったのは鼠の皮で作った衣装[26]だけでした。でご家来がそれを持ってまいりますと、王女様はそれにくるまって〔見苦しい姿に身を窶し〕とっとと歩き出しました。そして真っ直ぐにお隣の国の王様の宮廷を目指して行き、男だという触れ込みで、王様にお雇いくださいまし、と頼みました。王様は承知して、余の身の回りの世話をするがよい、と言いました。つまり、王女様は毎晩王様の長靴を脱がせてあげなければならなかったのです。すると王様は毎度その長靴を王女様の頭に投げつけるのでした〔王は粗野。なぜそうした設定か、これだけでは不明[27]〕。ある時王様は、おまえ、どこの国の生まれだ、とお訊きになりました。――「長靴を頭に投げつけたりしない国の生まれでございます」。それから王様は優しくなりました[28]。やがて他のご家来たちが王様のところに指環を一つ持って来て、こう申しました。鼠っ皮〔宮廷でこう綽名されて蔑まれていたはずだが、そうしたことは前に出ない〕がこれを落としました。これはあまりにも高価な品ですので、やつはこれを盗んだに相違ございません、と。王様は鼠っ皮を御前に召し寄せて、この指環〔指環の出所の説明はない[29]〕はどこから手に入れた、とお訊きになりました。そこで鼠っ皮はもう隠してはいられなくなって〔つまり、自分から素性を仄めかす努力はしない〕、鼠っ皮の衣装を脱ぎ捨てました。すると黄金のような金髪が溢れ出しました。こうして立ち現れた姿はなんともかとも美しく〔鼠っ皮の下に美しい衣装を纏っている、という記述は無い〕、いやもうそのあまりの美しさに、王様はすぐさまご自分の頭から王冠を外し、それを王女様に被せ、このひとこそ我が妃だ、と宣言しました。

ご婚礼には鼠っ皮のお父様も招待されました。お父様は、ご息女がとっくに死んでしまった、と思っていたの

で、王妃様がご自分の娘だとは見分けがつきませんでした。さて、食卓の上の、お父様の王様に出されたお料理はどれもこれも塩っ気なしでした。そこで王様は腹を立てて「かような料理をちょうだいいたすくらいなら、死んだ方が増しでござる」と言いました。お父様の王様がこう言い放ちますと、王妃様はこう申しました。「塩無しでは生きていたくはない、とおっしゃいますが、いつか私を殺させようとなさいましたね。私がお父様のことを、お塩より好き、と申し上げたからという理由で」。そこでお父様の王様はお相手がご息女だと分かり、許しを乞いました。こうしてご息女をまた見つけ出したのは、王様にとって、ご自分の王国よりも、この世のありとあらゆる宝石よりもすばらしいことでした。

＊結局のところ、「お塩のように好き」Lieb wie das Salz、あるいは「お塩より好き」Lieber als das Salz なるモティーフを持つ貴種流離譚（冒頭近くで述べたように、ＡＴＵ五一〇ではなくＡＴＵ九二三に分類されている）は、ＫＨＭにおいてはようやくその第五版（一八四三）に収録され、これが決定版まで残る。すなわち次に示すＫＨＭ一七九である。

③　ＫＨＭ第五版（一八四三）／決定版＝第七版（一八五七）[30] ＫＨＭ一七九「泉の傍の鵞鳥番の女」Die Gänsehirtin am Brunnen

ＢＰによれば、ウィーンのアンドレアス・シューマッハー Andreas Schuhmacher の口承採録話（一八三三）に基づく、ヘルマン・クレートケ編『ドイツ民話年鑑』Hermann Kletkes *Almanach deutscher Volksmärchen*（1840）

所収の物語である。ただし、素朴で拙いのが通り相場である民衆の語り口とは大いに異なるロマン派的な文飾・言辞が随所に観察され、一読しただけで、当時のメルヒェン作家がものした、民間伝承を素材とした再話ならばかくもあらん、といった印象を禁じ得ない。

構成も右のごとき推測を裏付けよう。読者の前に初めて現れる時点での女主人公は、魔力を持っている、しかし極めて親切な老女[31]に養われて鵞鳥の番をしている。年取った、また醜い姿をしているが、実は美しい乙女であることが分かる。もっとも、分かるのは次いで物語が中盤に差し掛かってからである。しかも、ここで、はてな、なぜこのように美しい乙女が、とこちらの関心を惹いておいて突っ放し、種明かしが行われるのはまたまたずっと後の方でなのだ。すなわち、この乙女は実はある王の三女で、父王が所領の分配を行う時、「最上のお料理でもお塩が入っておりませんと私には美味しくございませぬ。ですから私はお父様のことをお塩のように愛しております[32]」と答えたため、塩一袋を与えられて王宮から追い出されたのであって、やがて前述の老女に保護され、〔男どもの好き心をそそらないように老女に与えられた〕「婆っ皮」die alte Haut を顔に被って、身を窶しているのである、と。本来民話の語りは時系列的に展開するもの。現在から過去に遡及し、過去からまた現在に戻る、以上のごとき技巧的叙述は創作文芸でこそありふれているが、民話にはあり得ない。

自らへの愛情の程度に応じて分与財産を決める、という趣旨の父王の発言から始まり、三女が最初は「そして私の愛は何とも較べられませぬ[33]」と言う点、この物語は『リア王』の導入部に似ている（右に記したように、この物語では導入部ではなく、ずっと後におかれているが）。文人の思いつきそうな科白である。『リア王』とは異なり、そのお妃、つまり王女たちの母后は存命だし、王国を折半して受け継いだ姉二人もどうやら母と一緒に父の怒りをなだめようとしたらしい、など、穏やかな筋立ても、黒白をはっきり分け、登場人物は能う限り少なくする民話に

はそぐわない。

ところで、この物語の女主人公は全くの受け身型であり、後に（どうやら）結婚することになるお相手の若い伯爵が老女に強引に連れて来られても、これに媚態を示したり、自分の身元をそれとなく仄めかしたり、といった作為はまるで心懸けない。また、親切な老女の全面的保護の下にあるので、下女奉公といった苦役から免れている（なるほど、老女の許で鵞鳥番をしているが、これは辛い仕事として描かれてはいない）。この娘の流す涙は極めて高価な真珠だし、老女は最後に立派な宮殿とそこで働く人人を贈り物にして去る。けだし至れり尽くせりである。それだけに迫力が大層弱い。醜い姿に身を窶し、侮られながら賤しい端（はした）仕事に追い使われ、ここ一番という機会に美しさ、輝かしさを示して、積極的にいわば回生の端緒を摑む類話の、さよう、申さば民間伝承本来の女主人公の行動がいかに昔話の聴き手の興趣をそそったか――反面、こちらの方はいかに共感を得られないか――比較するには持って来いであろう。

また、自らへの愛を塩にたとえられた父王が、皆目塩気のない料理をふるまわれて、つくづく塩の大事さを思い知る、といった、単純だが、説得力のある結びも、この物語ではすっかり閑却されていて、父王は娘を追い出してからやがて自分の無情を後悔し、森中娘を捜索させた、となっている。さてさて、これまたいかがなものであろうか。

とにかく最初から最後まで語り手――この場合は文人（A・シューマッハーか）――の独り舞台で、（民話では当然そうあってしかるべきなのだが）聴き手も語りの主人公になれるための「語りの主題・状況の一般化」（語り手と聴き手たちが構成している物語共同体 Erzählgemeinschaft の原初的共通認識にきちんと従うこと）がほとんどない。一般化は語り手によって故意に破られている。従って粗筋を示しても甲斐無いことなので、これは省く。

KHMが、版を重ね、書籍、つまり既存の民話集から物語を多く採録するようになって以降、グリム兄弟の初心

から随分と乖離してしまったことが、「塩のように好き」をモティーフとする民話として、初版には存在した「鼠っ皮の王女様」（確かに随分と欠落などの瑕瑾はあるが）は第二版以降削り、「泉の傍の鵞鳥番の女」（確かに文芸作品としてはおもしろくできているが）を第五版以降入れた、そうした行為一つからも説き起こせよう。けれども、そちらへ逸れてしまうとどうしようもなくとっちらかってしまい、小論の収拾がつかなくなるので、これまでとしよう。

〔四〕ＫＨＭ第二版（一八一九）／決定版ＫＨＭ六五「千びき皮」KHM65 Allerleirauh（あらゆる種類の毛皮）

結局これは「エーレンベルク手稿」の「千びき皮（アラライ・ラオホ）」Allerlei Rauch とＫＨＭ初版の千びき皮（アラライ・ラオ）」Allerlei-Rauh による書き直しである。しかし、初版ＫＨＭ六五の「婚約者」云云がなぜか盛り込まれておらず、三つの黄金の小道具に関する（「婚約者からの結納の贈り物」といった）適切な説明も欠けている。

［粗筋］

臨終の妻と、妻同様の美女とでなければ再婚しない、と約束した王。娘が年頃になると、妻同様の美女なのに気づき、これと結婚しようとする。

王女はこれを拒もうと、二つの難題を父王に出す。第一の難題：太陽のように黄金（こがね）色に輝く衣装、月のように白銀（しろがね）色に輝く衣装、星星のように輝く衣装。第二の難題：王国のあらゆる種類の動物から取った毛皮でこしらえた

外套。

父王がこれらの難題を叶えたので、王女は城から逃げる。黄金の指環、黄金の糸繰り車、黄金の糸巻き、三種の衣装を胡桃の殻にしまって身につけ、あらゆる種類の毛皮の外套を纏い、顔と両手を煤で黒く汚して〔見苦しい姿に身を窶したわけ〕。

王のためにスープを作る千びき皮（アラライラオ）
オットー・ウッベローデ Otto Ubbelohde（1867–1922）描く

ある大きな森の木の空洞で眠る。その国の王が猟に来て発見、城へ連れ帰る。「千びき皮（アラライラオ）」と綽名され、城の厨房で辛い仕事をする。〔乙女ではなく、汚らしいこぞうだ、と見なされて、最下級の雑用にこき使われたわけ。ただし王とは没交渉であって、KHM初版第一部六五「千びき皮」および七一「鼠っ皮の王女様」のように、王の長靴を脱がせるたびに、それを頭に投げつけられる、という情景はない〕。

城で祝宴。千びき皮（アラライラオ）は変装を解き、太陽の衣装を着て祝宴に。王はこの美女と踊る。美女はすぐにいなくなって、台所仕事に戻る。料理番に王様用のスープを作るよう命じられる。スープに黄金の指環を入れる〔これは自分から素性を仄めかす行為に他

ならない」。王はこれを喜んで食べ、指環を発見、千びき皮（アラライラオ）が作った、と聞き、呼び寄せて、以下のような問答を始め、最後に指環のことを問い質すが無駄に終る。

千びき皮（アラライラオ）がまいりますと、王様はこう訊ねました。「そちは何者だ」。「わたしは哀れな子どもでございます。父も母ももうございません」。それから王様が重ねて「そちは何のために余の城におるのか」と訊ねますと、その返答は「わたしは何のお役にも立ちません。長靴を頭に投げつけられるのがせいぜいのところでございます」でした。

城で祝宴。千びき皮（アラライラオ）は変装を解き、月の衣装を着て祝宴に。王はこの美女と踊る。美女はすぐにいなくなって、台所仕事に戻る。料理番に王様用のスープを作るよう命じられる。スープに黄金の糸繰り車を入れる。王はこれを喜んで食べ、糸繰り車を発見、千びき皮（アラライラオ）が作った、と聞き、呼び寄せて糸繰り車のことを問い質すが無駄。

城で祝宴。千びき皮（アラライラオ）は変装を解き、星星の衣装を着て祝宴に。王はこの美女と踊る。そして相手に気づかれないように〔そんなことは無理だ、と思われるが〕黄金の指環を嵌（は）める。美女はすぐにいなくなって、台所仕事に戻る。しかし、今度は長く舞踏をし過ぎたので、星星の衣装を脱ぐ暇は無く、上に外套を羽織っただけ。煤も完全には塗れず、指一本は白いまま。料理番に王様用のスープを作るよう命じられる。スープに黄金の糸巻きを入れる。王はこれを喜んで食べ、糸巻きを発見、千びき皮（アラライラオ）が作った、と聞き、呼び寄せて糸巻きのことを問い質す。そして白い指、自分が嵌めた指環に気づく。また、毛皮の下から星星の衣装も覗き見える。王は千びき皮（アラライラオ）があの美女であることが分かって、これと結婚する。

＊グリム兄弟が、初版第一部では温存しておいた、王の長靴を女主人公が脱がせ、それを王が女主人公の頭に投げつける、というモティーフをどうしてここでは削っているのか分からない。このモティーフがあるために、女主人公の城での生活の惨めさが端的に強調されるにも関わらず。――もちろん現代に生きるわれわれとしては、女主人公が後に結婚して、民話のお約束通り「幸せになる」、そのお相手が、知らぬこととは申しながら、こうも野蛮なふるまいにおよぶ、という設定ではまずいなあ、と感じるのだけれども。しかしながら、近代の叙情小説を洗練されたあえかな容姿の末妹にたとえれば、その土性骨の太い自然児たる長姉ともいうべき民話においては、粗野、猥雑さなど鼻であしらわれるのであって、まだまだこの程度では問題にするには当たらないのである。ある類話では結びで、なおも白(しら)を切り続ける女主人公を王が乗馬用の鞭でひっぱたき、そのため毛皮に裂け目ができて、その隙間から黄金の衣装がきらきら輝いて見え、ようやく正体が分かる、という始末なのだから。丈夫な毛皮が裂けるくらいの力で顔など露出している部分を鞭で打ったら、傷は骨にまで達したことだろう。そして笞(むち)打ち刑はヨーロッパの陸海軍においてさえ二〇〇年ほど前まではありふれていて、庶民も笞打ちというものがどんなものか見聞きしていた、場合によっては体験していたはず。

　王の城における厨房の下働きとしての女主人公の扱いかただが、この物語ではどうにもなまぬるい。ただし、KHMの内容・表現にまで手を入れたヴィルヘルム・グリムのごとき温良な詩人肌の人間だと、ついそう編輯してしまうのかも知れない。いや、民話の語り手自体の人柄が優しければ、グリム兄弟に提供される時点で話は無用に穏やかな色合いとなっている。なにしろBPに挙げられたパーダーボルン地方（現ノルトライン＝ヴェストファーレン州）の類話によれば、女主人公が異様な外套を纏い、惨めで汚らしい役柄を演じていることが、（一時的にせよ）つい忘れられてしまうこともあるのだ。いわく。

少女がスープを上手にこしらえますと、王様は少女をお呼びになって、こうおっしゃいました。「おまえはほんとに綺麗な子だね。[34] さ、余の椅子にお掛け」。そうしておつむりを少女の膝に載せ、「ちょいと虱(しらみ)を取っておくれ」[35]とお頼みになりました。

いやはや、どうも。これでは女主人公に対する聴き手の同情が薄れてしまい、やがて女主人公がすばらしい衣装を纏って舞踏会の第一人者となる時の聴き手の感動に水が差されてしまうではないか。だが、こうした余計な修正は、現代、H・C・アンデルセンの緊張度の高い、それだけに与える感動の大きい作品、たとえば「マッチ売りの少女」にもなされて、少女が壁の向こうのお屋敷に招じ入れられて、煖炉の火とご馳走で幸せになる、という（おそらく幼児向けに改変された）再話もある。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

次の〔五〕〔六〕〔七〕〔八〕〔九〕〔十〕はイングランド、イタリア、ノルウェー、デンマークおよびトルコの民話の紹介。寵しの道具(アイテム)として動物の皮だけではなく、草や木の外被も登場する。

〔五〕イングランド民話「蘭草頭巾(キャップ・オー・ラッシェズ)」Cap o' Rushes[36]

ジョゼフ・ジェイコブズ編著『イングランド昔話集』[37]（一八九〇）収録の再話「蘭草頭巾(キャップ・オー・ラッシェズ)」は、注に記した

資料原典のサフォーク方言[38]を若干直しただけで、あとは全く同一。

超自然的援助者の介在が無いのが、実証的な好みのイングランド人の民話らしくてなにやらおもしろい。もっとも、ブリテン諸島でもスコットランド、アイルランド、ウェールズの民間伝承では事情はいささか、あるいは大いに異なる。

イングランドにも動物の皮を纏う類話がある。[39]

［全訳］

キャサリン・ブリッグズ／ルート・ミヒャエリス＝イエナ編『イングランドの民話』（「世界の民話」シリーズ）[40]をも参考として、英文原典から。

あのねえ、昔むかし、ずいぶんとお金持ちの紳士がおりましてね、嬢ちゃん[41]を三人持っていました。そして紳士は、娘たちが自分をどれくらい大事に思っているか、どうしても知りたい、と考えました。そこで一番上の娘に向かって申しました。「嬢や、おまえ、わしのこと、どれくらい好きかな」とね。――「ええと」と長女。「わたしの命が好きなくらい、それくらいに」。――「ふむ、けっこう」と父親。

それから二番目の娘に向かって申しました。「おまえ、わしのこと、どれくらい好きかな、嬢や」。――「ええと」と次女。「世界中のありったけのものよりもっと」。――「ふむ、けっこう」と父親。

それから三番目の娘に向かって申しました。「それでおまえ、おまえは、わしのこと、どれくらい好きかな、嬢や」。――「ええと」と三女。「わたし、新しいお肉がお塩を好きなくらい、それくらいお父様が好き[42]」。ねえ、こ

れを聞いて紳士はかあっとなっちまいました。

「おまえはわしをまるきり愛しとらんのだな」と紳士。「それではもうこれから先この家におまえを置いとくつもりはない」。こうして紳士はその場で三女を追い出して、娘の鼻先で扉をぴしゃりと閉めたのです。

さあてと、娘は歩いて行きました。どんどんどんどんね。やがてとある沼の畔(ほとり)に出ました。娘は沼の畔でどっさり藺草(いぐさ)(43)を集め、それを編んで頭巾(フード)の付いた外套(44)みたいなもんをこしらえ、これを頭から足先まですっぽり被(かぶ)って、着ている美しい衣装も隠しました。

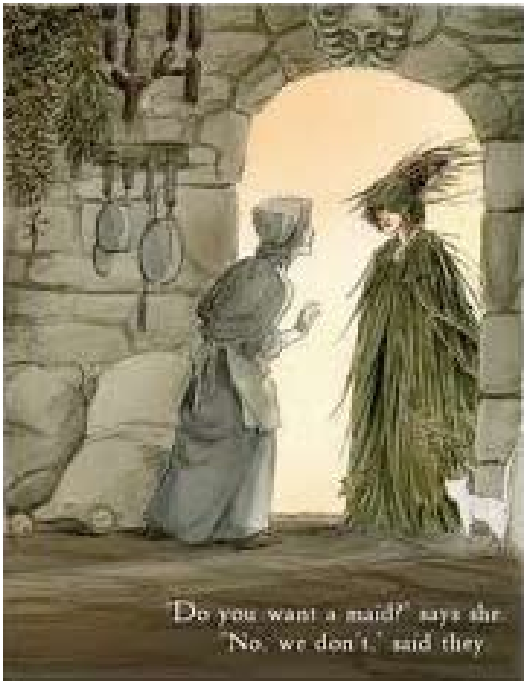
藺草を編んで、それをすっぽり全身に纏った令嬢
ジョン・D・バッテン John D. Batten（1860–1932）描く

それからどんどんどんどん歩いて行きますと、やがてとある大きなお邸の傍にやって来ました。

「下女(げじょ)はご入用じゃありませんか」と娘は言いました。

「いいや、うちでは要らないね」というのがお邸の衆の答え。

「あたくし、どこへ行ったらいいか、途方に暮れておりますの」と娘。「それにあたくし、お給金をいただきたいなんて申しませんし、どんなお仕事でもいたします」。



"Do you want a maid?" says she.
"No, we don't," said〔資料原典では says〕they.

「じゃあいいよ」とお邸の衆。「深鍋をいくつもいくつも洗ったり、浅鍋をいくつもいくつも擦ったりするのなら、住み込みになるがいい」。

そこで娘はそこに住み込んで、深鍋をいくつもいくつも洗ったり、浅鍋をいくつもいくつも擦ったり、汚れ仕事はなんでもやりました。それからね、なんて名前か名乗らなかったものですから、お邸の衆はこの娘を「藺草頭巾」と呼びました。

ところで、ある日のことです。近くのお邸で大きな舞踏会が開かれました。奉公人たちはだれでもそこへ出掛けて、良い身分の方を見物してもいいことになりました。藺草頭巾は、とっても疲れているから一緒に行けない、と言って、うちに残ったのです。

でもね、奉公人たちがいなくなると、藺草頭巾は被っていた藺草の頭巾を脱ぎ、体を洗い清めて踊りに行きました。舞踏会ではこれほどすばらしい身なりのひとなんて他におりませんでしたよ。

ところで、そこにいあわせたのはほかでもない、娘が仕えているご主人のとこの若様でしてね、この若様が娘に

とことん惚れ込んでしまったのです。一目見たその瞬間からね。若様はこのご婦人としか踊ろうとしませんでした。

でも、舞踏会が終わりにならないうちに娘はそこから外へ出て、逃げて帰って来たのです。そうして他の下女たちが戻った時には、いつもの藺草の頭巾を被って、眠ったふりをしていました。

さあて、翌朝になると他の下女たちは藺草頭巾に言いました。

「あんたったら、たいしたものを見損ねたわよ、藺草頭巾」。

「へえ、それってなあに」。

「ええっとさあ、あんたがこれまで目にしたうちでこれ以上はないっていう綺麗な女のひとよ。着ている物もほんとにすっごくてすんばらしかったわあ。うちの若旦那様ったらこのひとから金輪際（こんりんざい）目を離さなかったんだ」。

「あら、あたくし、そのひと、見たかったなあ」と藺草頭巾は言いました。

「あのね、今晩もう一度踊りがあるんですって。だからもしかしてそのひと来るかもよ」。

けれど晩になると、藺草頭巾は、とっても疲れているから、皆と一緒には行けない、と申しました。

でもそれからね、皆がいなくなると、娘は藺草の頭巾をかなぐり捨てて、体を洗い清め、踊りに出掛けました。

ご主人の若様はとおからあの女のひとに逢えるものと当てにしてたんです。そこで他のだれとも踊らず、相手から目を離しませんでした。

でもまだ踊りが済まないのに、娘はするりと抜け出して、とっとと帰ってしまいました。そうして下女たちが戻った時には、いつもの藺草の頭巾を被って、眠ったふりをしていました。

次の日になると下女たちはまたこう申しました。

「あのね、藺草頭巾、あんたも来てあの女のひとを見ればよかったのにさ。あのひと、また現れたのよ。すっごくてすんばらしかったわあ。若旦那様はあのひとから目を離さなかったわ」。

「あら」と藺草頭巾は言いました。「あたくし、そのひと、見たかったなあ」。

「あのね」と下女たち。「もう一度踊りがあるの、今晩ね。あんた、どうしたってあたしたちと一緒に行かなくっちゃ。だって、あのひと、きっと来るでしょうよ」。

さて晩になると、藺草頭巾は、とっても疲れているから一緒には行けない、皆さん好きなようにしてちょうだい、と言って、うちに残りました。でも皆がいなくなると、娘は藺草の頭巾をかなぐり捨てて、体を洗い清め、踊りに出掛けました。

ご主人の若様は女のひとの姿を見ると、とっても喜びました。このひと以外のだれとも踊らず、金輪際目を離しませんでした。相手がなんという名か、家はどこか、言おうとしないので、若様は女のひとに指環を一つ渡し、これっきりもう逢えないなら、自分は死んでしまうだろう、と告げたのです。

さあて、踊りが済まないのに、娘はするりと抜け出して、とっとと帰ってしまいました。そうして下女たちが戻った時には、いつもの藺草の頭巾を被って、眠ったふりをしていました。

さあて、次の日になると下女たちはこう申しました。「ほおら、ごらんな、藺草頭巾たらさあ。あんた昨日の晩来なかったでしょ。だからもうあの女のひとを見られやしないわ。だってもう踊りはないもの」。

「そうお、あたくし、そのひと、とっても見たかったなあ」と藺草頭巾は言ったものです。

ご主人の若様は、例の女のひとがどこへ立ち去ったのか捜し出そうと、とことん手を尽くしましたが、どこへ行っても、だれに訊いても、何一つ消息が摑めませんでした。

そこで女のひとが恋しくて恋しくてたまらず、だんだん体の具合がおかしくなって、とうとう床に就いてしまいました。

「若旦那様にちょいと薄粥(グルーアル)(45)を作っておくれ」。お邸の衆は料理番に申しました。「あの方は例の女のひとが恋しいばっかりにそのうちお亡くなりになっちゃうだろうよ」。料理番がこしらえに掛かると、そこへ藺草頭巾が入って来ました。

「何をしてるんですか」と藺草頭巾。

「あたしゃあね、ちょいと薄粥(グルーアル)をこしらえるところさ。若旦那様にさしあげるんだよ」と料理番が返辞。「あの方は例の女のひとが恋しいばっかりにそのうちお亡くなりになっちゃうだろうよ」。

「その薄粥(グルーアル)、あたくしに作らせてください」と藺草頭巾が申します。

さて、料理番は初めは承知しませんでしたが、結局、じゃあやってごらん、ということになって、藺草頭巾が薄粥(グルーアル)の仕度をしました。そして煮上がると、料理番がそれを上のお部屋に持ってゆく前に、中にそおっと指環を滑り込ませたのです。

若者がこれを飲んでしまうと、鉢の底にあの指環が見えました。

「料理番を呼びなさい」と若者。そこで料理番がお部屋に上がってまいります。

「この薄粥(グルーアル)をこしらえたのはだれだ」と若様。

「あたしでございますよう」と料理番。なにせまあ後(うし)ろめたくってねえ。すると、若様はじいっと料理番を見据えました。

「いいや、おまえではない」と若様。「だれがこしらえたのか言いなさい。そうすれば悪いようにはしない」。

「じゃあ申し上げますが、作ったのは蘭草頭巾でございます」。
「蘭草頭巾をここへ来させなさい」。
そこで蘭草頭巾がやって来ました。
「この薄粥（グルーアル）をこしらえたのはおまえか」と若様。
「はい。わたくしでございます」と娘。
「この指環はどこで手に入れた」と若様。
「これをわたくしにくださった方からでございます」と娘。
「いったいそなたはどこのだれ」と若者は申しました。
「ごらんに入れましょうね」と娘。そして蘭草の頭巾をかなぐり捨てると、もともと着ていたすばらしい衣装を纏った姿で立ち現れたのです。
さて、若様はとんとん拍子に元気になり、二人はまもなく結婚することになりました。盛大なご婚礼が挙げられることになり、あっちこっちからだれもかれもがこれに招待されました。蘭草頭巾の父親も招待された一人だったのです。でも、蘭草頭巾はだあれにも自分の素性を告げたりしませんでした。
でもね、ご婚礼の前に娘は料理番のところに行って、こう言いつけたんですよ。「どのお料理もお塩は一粒だって入れないでこしらえてちょうだいね」ってね。
「そうしますと、てんからひどいものになっちまいますよ」と料理番。
娘「別にどうってことありませんよ」。――料理番「さよでございますかあ」。
さて、婚礼当日になりましてね、二人は結婚いたしました。結婚式が済みますと、お客様方はご一同お祝いの宴

席にお就きになりました。

皆さんが肉を食べ始めた時です。なにしろ味も何もありませんでしょう。どなたも召し上がることなんぞできやしません。でも、藺草頭巾の父親は、この料理、あの料理、と口を付けてみて、それからおいおい泣きだしたのです。

「どうなさいました」と若様が訊ねました。

「おお」とこちらは答えました。「わしには以前一人の娘がありましてな。わしはこの子に、どれくらいわしのことが好きか、と訊いたものです。すると娘は申しました。『新しいお肉がお塩を好きなくらい、それくらいに』とな。そこでわしは娘を邸から追い出したのです。この子はわしを愛しとらん、そう考えたものですから。そうして今の今、わしにはよっく分かりました。娘は他のだれよりも一番わしを好いてくれたんだ、と。もしかしたらあの子はもう亡くなっているかも知れませんのう」。

「いいえ、お父様、その子はここにおります」と藺草頭巾は言いました。そうして父親に近づいて、両腕で頸っ玉に縋(すが)りつきました。

さてそれからというものは、皆みんないつまでも幸せに暮らしましたよ。

〔六〕イタリア民話「塩みたいに好き」Bene come il sale

『イータロ・カルヴィーノによって記録され、再話されたイタリア昔話』(46)収録。

［粗筋］

ある王に三人の娘がいる。王は末の美しく気立ての良い姫が自分への愛情を塩にたとえたので、森へ連れて行って殺してしまえ、と命じる。

姫の母親である王妃は娘を救う方法を考える。王宮にあったとても大きい銀の燭台に娘を隠し、いくらかの保存食料も持たせる。それから信頼している召使いを呼び、燭台を売るように言い付ける。値を訊く者が貧乏人なら法外な高値を答え、金持ちならごく安くするように、と。召使いはさる王子に売ることに成功する。

王子は燭台を食堂に置かせる。姫は二晩に亘って王子に用意されていた夕食を平らげてしまう。三晩目、王子は食卓の下に身を潜めて様子を窺うことにする。かくして、燭台の中から出て来て王子のためのご馳走を食べた姫は、王子に捉まってしまう。

姫から一部始終を聴いた王子は、燭台を自分の部屋に移し、二人前の食事を運ばせて、姫と一緒にしばらく楽しく暮らす。

やがて母后に、燭台と結婚したい、と告げる。母后は、息子は気が狂った、と思うが、その意志通り、王子と燭台が並んで馬車に乗り、教会へ向かうことになる。教会では最後の瞬間に燭台の中からすばらしく装いを凝らした姫が跳び出し、めでたく婚礼が執り行われる。ここまでの経緯を息子の王子から聞かされた母后も満足する。

結婚披露宴が開かれることになり、姫の父親も招待される。分別に富んだ母后は、姫の父親に供する全ての料理から塩味を抜かせておき、王子の新妻は気分がすぐれないので宴会に出席できない、と客たちに告げる。味気ない料理の数数を仕方なく口に運んでいた父親は、やがて娘のあの返辞を思い出し、自分の愚かさを泣いて後悔する。

そして母后に理由を語る。すると母后は花嫁を呼び寄せ、父親に会わせる。花嫁の母親の王妃も招待され、改めて盛大な宴会が催される。

＊この物語で女主人公は姿を窶したわけではない。後述〔十二〕の「ドラリーチェ」のように道具（アイテム）に身を潜めるのであって、その点ＡＴＵ五一〇Ｂ＊「櫃の中の姫君」に分類される。

〔七〕イタリア民話「木造りのマリーア」（「マリーア・ディ・レニョ」）Maria di Legno

『イータロ・カルヴィーノによって記録され、再話されたイタリア昔話』収録。

［粗筋］

娘の指に亡き母の指環が偶然ぴたりと嵌（は）まってしまったので、これこそ運命である、として、その母、つまり死んだ妻の遺言に従い、実の娘を二度目の妃にしようとする父王の意図を避け、女主人公である王女は三通りの豪奢な衣装〔乳母の忠告に従い、父親に難題として作らせた物〕を着、その上に乳母が作ってくれた頭から足の先まで覆う木の服を纏って逃亡〔乳母＝老女の援助〕。この服を着ていると水に浮くので、海を歩いて渡り、漁夫たちと魚釣りをしていたよその国の王子に捉まえられ、王子の宮殿で鵞鳥番になる。「木造りのマリーア」と綽名される。ただ日曜日だけは木の服を脱いで髪を梳（す）くのが常。

やがて舞踏会が開かれる。彼女は王子が舞踏会に出かけるたびにからかいかけ、自分も連れて行って欲しい、とねだる。そのお返しとして、長靴を投げられたり、火掻き棒で打たれたり、背中を手綱で打たれたりする。〔この物語の場合、王子がとりわけ粗暴なのではなく、王女が挑発するという設定。王女の積極的な媚態と言えようか〕。からかった後、豪奢な衣装を身につけ元の美女になって舞踏会に出掛けた王女は王子と踊り、名を訊かれると、最初の晩は、「長靴投げ国」の伯爵夫人〔＝女伯〕、翌晩は、「火掻き棒打ち国」の侯爵夫人〔＝女侯〕、三度目の晩には、「手綱打ち国」の王女、と名乗る。王子は三回とも相手に贈り物をする。黄金の髪飾り針、ダイヤモンドの指環、自分の肖像画の入った黄金のメダルの順。舞踏会から逃げ去る謎の美女を家来たちに追わせもするが、いつも行方は分からぬまま。

王子は恋患いに陥る。重態になって飲みも食べもしない。ある日母后に、ピッツァを作ってくれ、と頼む。代わりに木造りのマリーアが作るが、中に黄金の髪飾り針を入れて置く。次には指環、三度目にはメダル。そこでピッツァを焼いた木造りのマリーアに激しい好奇心を抱いた王子は、寝床を抜け出し、鶏鳥小屋に行き、〔木の服を脱ぎ本来の姿をしている〕彼女を見つけ出して結婚する。

〔八〕ノルウェー民話「木のスカートのカーリ」（「カーリ・トレスタック」Kari Trestakk）

クララ・シュトレーベ／ライダル・クリスチャンセン編訳『ノルウェーの民話』（「世界の民話」シリーズ）[47]による。

［全訳］

昔むかし王様がおりました。お妃様は亡くなっていました。お妃様との間にはご息女が一人ありました。これ以上にはなれないっていうほど気立ての良い綺麗なご息女でした。王様は長いこと王妃様を悼んで喪に服していました。なにぶんとっても愛していましたのでね。でもとうとう鰥夫暮らしにうんざりして、これも夫を亡くしたどこかの王妃と再婚しました。この女も娘を一人持っていました。でもそちらの娘ときたら、こちらの姫君が美しくて気立てが良いのと同じくらいみっともなくって根性悪でした。継母とその娘は王女がねたましくてたまりませんでした。なぜってね、王女はとっても美人だったんですもの。でも王様がおうちにいる間は二人ともお姫様に何か手出しをする勇気はありませんでした。なにしろ王様は姫君をとっても愛していましたので。しかししばらくして王様はよその国の王様といくさを始め、軍勢を率いて戦場に出掛けました。すると妃は考えました。しめしめ、これであたしの好きなようにできる、ってね。そうして王女にろくすっぽ物も食べさせず、ところきらわずぶったり小突き廻したりしたもの。あげくの果て、何をやらせたってあれにはもったいない、と、牛の群れの番をさせるしまつ。そこでお姫様は牛の群れを連れてお城から出て行き、森の中や山の上で草を食ませるのでした。もらえる食べ物ときたらほんのぽっちりか、さもなければまるっきり無し。そこでこの子は青白く痩せ細り、なにかというとしょんぼり滅入って、しくしく泣いておりました。ところで牛の群れには体の大きな青い牡牛[18]が一頭いて、いつも身綺麗にしており毛艶もぴかぴかでした。これが娘の傍に来て、どうしてそんなに悲しそうにしているのか、と訊いたものです。娘は返辞もしないでしくしく泣き続けました。「わしはそなたがなぜ不幸せなのかよく知っている」と牡牛。「そなたがわしにわけを言わなくてもな。そなたが泣いているのは、王妃がそなたに辛く当たって、そな

たを飢え死にさせたがっているからだ。したが、食べ物の心配をする必要はない。わしの左の耳の中に卓子掛けが一枚入っている。そなたがこれを引っ張り出して拡げると、欲しいだけの食べ物が手に入る」。言われた通り姫君が卓子掛けを引っ張り出して、草の上にそれを拡げると、望める限り最高の珍味美味がずらりとそこに並びました。葡萄酒とか蜂蜜酒[49]とか蜂蜜菓子とかがね。さあ王女はどんどん元気を取り戻し、体はふっくら、頬っぺは赤く、肌は真っ白になりました。そこで王妃とそのひょろひょろ娘はねたましくてたまらずむしゃくしゃして青くなったり黄色くなったり。王妃は、あんなにお粗末な食べ物しかあてがってないのに継娘があんなに元気に見えるのが、なんとも分かりません。そこで下女の一人に、森の中まで継娘の跡をつけて行って、どうしてこういうことになるのか見張るよう言い付けました。奉公人のうちのだれかがこっそりあれに食べ物を差し入れしているのだろう、と思ったので。下女は森の中まで継娘の跡をつけて行き、よくよく注意していました。そうすると継娘が卓子掛けを青い牡牛の左の耳の中から引っ張り出して拡げるのを見ました。そしてとびきりすばらしいご馳走の数数がその上に並ぶのを見ました。それから王女がそれを美味しがって食べるところを見たのです。下女は戻って王妃にこのことをしゃべりました。

　この時王様がお帰りになりました。王様は戦争相手のよその国の王様を打ち破って凱旋したのです。そこでお城中が大喜びになりましたが、王女ほど嬉しがった方はありませんでした。でもね、王妃は病気になったふりをして、お医者にどっさりお金をやり、こんなことを言わせました。王妃様は二度と再びお健やかにはなれますまい、あの青い牡牛の肉を召し上がらない限りは、とね。王女はもちろん、他のひとたちもお医者に、別の手立てはないものか、と問い質し、牡牛を庇いました。だれもが牡牛が大好きでしたし、王国中探してもこんな牛はまたといない、と言っていましたしね。でも、いやはや、なんてこと、牡牛はどうしても殺されなくてはならないのでした。

そうして、殺せ、という命令が出ますと、これを打ち消す道はありませんでした。これを耳にした王女は悲しくてしかたがなく、上のお部屋から家畜小屋の牡牛のところへ下りて行きました。牡牛は小屋の中に佇んで、首を垂れ、しょんぼり滅入った様子でしたので、娘はしくしく泣き始めてしまいました。「そなたはなぜ泣く」と牡牛が訊ねました。そこで娘は、王様がお帰りになり、王妃が病気になったふりをし、お医者に、王妃様は二度と再びお健やかにはなれますまい、あの青い牡牛の肉を召し上がらない限りは、と言わせたので、これから牡牛は殺されることになった、と告げました。「まずわしが殺されると、次にはまもなくそなたも殺されるだろう」と牡牛は申しました。「そなたさえかまわなければだが、わしたちは今宵逃げ出すことにしよう」。王女はなるほど、お父様の王様を置き去りにするのはよくないことだ、とは考えましたが、でも、あの王妃と一つ屋根の下に暮らし続けるのはなんといってもずうっとよくない、と思い返しました。そこで、一緒に行きます、と牡牛に約束いたしました。

日が暮れて、お城の者たちが寝静まると、王女は上のお部屋から家畜小屋の牡牛のところへ忍び足で下りて行きました。すると牡牛は娘を背中に乗せ、できるったけの早さで走って逃げ出しました。お城の者たちが翌朝起きて、牡牛を殺そうとしたところ、牡牛はいなくなっておりました。王様が起きてご息女のことを訊ねたところ、ご息女もやっぱりいなくなっておりました。王様はお使者を四方八方へ遣わし、国中の教会の鐘を鳴らして姫君の行方を捜させましたが、どこかで何かを見掛けたという者は一人もいませんでした。

さてこちら、牡牛の方ですが、王女を乗せてたくさんの国国をどんどんどんどん走り抜け、とうとう大きな赤銅の森の縁に辿り着きました。赤銅の森っていうのはね、森の木木も木の葉っぱもそこいらへんの花花も全部赤銅でできていたからなのです。でもこの森に足を踏み入れる前に、牡牛は王女にこう申しました。「これから森に入るわけだが、よくよく気をつけなくてはいけないよ。小さな葉っぱ一枚にも触らないように。さもないと、わしもそ

なたもおしまいだ。なにしろこの森には三つ頭のトロルが一匹棲んでいて、この森はこやつのものなのだから」。ええ、触りゃしません、ちゃんと気をつけて何にも触りません、と王女。王女はとっても用心して、右に左に体をかわし、両手で枝を押しのけたりしましたよ。でもねえ、森はひどくびっしり繁っていて、通り抜けるのが難しかったので、王女は注意に注意を重ねていたのに、ああそれなのに、葉っぱを一枚もぎとって、それを手に摑んでしまったのでした。

「おお、大変だ、大変だ」と牡牛は叫びました。「そなた、まあなんということをする。こうなってはわしは生死を賭けて闘わねばならん。しかしその葉っぱはしっかり持っているのだぞ」。それからすぐふたりは森の向こう側に着きました。するとそこに三つ頭のトロルが早くも駆けつけて来ました。「おれさまの森にちょっかいをだしたやつはどこのどいつだ」とトロルは叫びました。「この森はおまえと同様わしのものでもあるのだぞ」と牡牛は叫び返しました。「まずはそいつに決まりをつけよう」とトロルはがなり立てました。「承知した」と牡牛。そして双方相手を目掛けて突進、牡牛は力一杯角で突いたり、足で蹴ったりしました。でもトロルの強さも負けず劣らずで、闘いはその日一日中続きました。そしてとうとう牡牛が勝ちを占めたのです。でもこちらも全身傷だらけ、すっかり弱って歩くのもできないくらいでした。さて牡牛と王女はどうしたってまる一日休まなければなりませんでした。すると牡牛は、トロルの腰帯に下がっている軟膏の入った角製の容れ物を取って来て、中の軟膏を自分の体に塗ってくれ、と王女に言いました。それが済むと、牡牛は元通り強く元気になり、次の日にはふたりはまた先へと進んだのです。さあてそれから何日も何日も旅を続け、とうとう大きな白銀の森の縁に辿り着きました。白銀の森っていうのはね、森の木木も木の葉っぱもそこいらへんの花花も全部白銀でできていたからなのです。この森に足を踏み入れる前に、牡牛は王女にこう申しました。「これから森に入るわけだが、後生だから気をつけなくて

はいけないよ。何ひとつ触ってはいけない、小さな葉っぱ一枚だってもぎ取らないように。さもないとそなたもわしもおしまいなのだ。この森には六つ頭のトロルが一匹棲んでいて、この森はこやつのもの。そしてこやつを相手ではわしはろくすっぽ張り合えないかも知れない」。

「ええ、触りゃしませんわ」と王女は答えました。「わたくし、ちゃんと気をつけて、どんなにちっぽけな物にも手を触れないつもりです。あなたの言う通りにね」。でもねえ、森の中に入ると、森はひどくびっしり繁っていて、突き抜けるのが難しかったのです。王女はできるったけ用心し、次から次へ枝を避けたり、両手で右や左に曲げたりしました。でも枝がしょっちゅう王女の顔にぴしゃぴしゃ当たるので、注意に注意を重ねていたのに葉っぱが一枚手についてしまいました。

「おお、大変だ、大変だ」と牡牛は叫びました。そなた、なんということをしてくれた。こうなってはわしは生死を賭けて闘わねばならん。なにしろ六つ頭のトロルはこの前のやつより倍も強いのだ。しかしその葉っぱにはよく気をつけて、しっかり持っているのだぞ」。

くだんのトロルはすぐさま駆けつけて来ました。「おれさまの森にちょっかいをだしたやつはどこのどいつだ」とトロルはがなり立てました。「この森はおまえと同様わしのものでもあるのだぞ」と牡牛は叫び返しました。「へっへえ、まずはそいつに決まりをつけよう」とトロルは叫びました。「どうしてもというなら承知した」と牡牛は応じてトロル目掛けて突進し、こやつの両の目をえぐり出し、二本の角をその胴っ腹（ぱら）の真ん中に突き通したので、はらわたが飛び出してだらりと垂れ下がるしまつ。けれどもトロルの強さも負けず劣らずで、牡牛がやっとトロルにとどめを刺すまでに三日も掛かりました。でもそのあと牡牛は力も抜けぐったりして、ろくすっぽ身動きもできず、全身傷だらけで血がどんどん流れ出しました。すると牡牛は、トロルの腰帯に下がっている軟膏（なんこう）の入った

角製の容れ物を取って来て、中の軟膏を自分の体に塗ってくれ、と王女に言いました。王女が言われた通りにすると、牡牛は元通り元気になりました。でも牡牛が旅を続けられるようになるまで、ふたりはそれからしばらくそこにいなければなりませんでした。

やっとのことでふたりはまた出発しました。とはいえ牡牛はまだ弱っていたので、初めはゆっくりゆっくりでした。王女は牡牛をいたわろうとして、こう申しました。自分は若くて、足は達者だから、ちゃんと歩いて行ける、とね。でも牡牛はどうしてもそれを許さず、王女はやっぱり牡牛の背中に乗っかっていなければなりませんでした。こんな風にしてふたりは長いこと旅をし、たくさんの国国を通り抜けて行きました。王女はどこへ向かっているのかさっぱり分かりませんでしたが、やがて黄金（こがね）の森の縁に辿り着きました。いやあ、とってもすばらしい森でしたよ。黄金がぽたぽた滴（したた）り落ちているのです。なにしろ森の木木も木の葉っぱもそこいらへんの花花も全部黄金でできているのですから。ここでも赤銅の森と白銀の森と全く同じことが起こりました。牡牛は王女にこう申しました。決して何かに触ってはいけない。ここには九つ頭のトロルが一匹棲んでいて、この森はそやつのものなので。このトロルは前の二匹よりずっと体が大きくて力が強い。自分がそやつと張り合うことができるとは思えない、とね。触らない、と王女は答えました。自分はちゃんと気をつけて、きっときっと何にも手を触れないつもりだ、と。でもねえ、森の中に入ると、この森は白銀の森よりずっとびっしり繁っていて、先へ進めば進むほど、どんどんひどくなりました。森はますますぼうぼうと繁りに繁り、あげくの果てはもうまるきり前へ行けないのではないか、と思われるほどになりました。王女は何かをもぎ取ってしまうのでは、と心配でたまらず、四方八方へ体をよじったり身をかがめたりして、数数の枝を避け、両手で右や左に押しやったりしました。でも枝が王女の顔にぴしゃぴしゃ当たるのはしょっちゅうなので、どこに手を出しているのかもさっぱり見えず、わけがわからないま

ま、気がついたら黄金の林檎(りんご)が一つ手の中に入っていました。さあもう王女は途方もなく怖くなって泣きだし、その林檎を投げ捨てようとしました。でも牡牛は、それを捨てないで持っているように、そして大事にしまっておくように、と言い、それから一所懸命王女を慰めました。けれど心の中では、ひどい闘いになるだろう、と思い、うまく切り抜けられるかどうか疑いました。

九つ頭のトロルは早くも駆けつけて来ました。こやつの姿はものすごく恐ろしかったので、王女はまともに目を向けることもできませんでした。「おれさまの森にちょっかいをだしたやつはどこのどいつだ」とトロルはがなり立てました。「この森はおまえと同様わしのものでもあるのだぞ」と牡牛は叫び返しました。「まずはそいつに決まりをつけよう」とトロルは叫びました。「承知した」と牡牛。そして双方相手を目掛けて突進し、なんともすさまじい闘いになったので、王女はもうもう危なく気を失いそうでした。牡牛はトロルの両の目をえぐり出し、二本の角をその胴っ腹に突き通したので、はらわたが飛び出してだらりと垂れ下がるしまつ。けれどもトロルの強さも負けず劣らずでした。なにしろ牡牛がこやつの頭を一つ殺しても、他の頭どもがそれに生気を吹き込むのですもの。こうして牡牛がやっとトロルにとどめを刺すまでに一週間も掛かりました。でもそのあと牡牛の方ももう身動きもできないほどまいってぐったりしてしまいました。体中数限りなく傷だらけで、トロルの腰帯に下がっている軟膏(なんこう)の入った角製の容れ物を取って来て、中の軟膏を自分の体に塗ってくれ、と王女に言うことさえもうできなかったのです。けれども王女は気を利かせて自分からそうしたので、牡牛は元通り元気になりました。とはいえ、またまた出掛けられるようになるまで、ふたりはそれからまる三週間休まなければなりませんでした。

やっとのことでふたりは再びゆっくり出発しました。牡牛が、自分たちはまだいくらか先に進まなければならない、と告げたので。そして木の生い繁った森がいくつもいくつもある大きな山また山をたくさん越えて行きまし

た。それからしばらくすると、ふたりはとある巌のところにやって来ました。「そなた、何か見えるかな」と牡牛が訊ねました。「いいえ、わたくし、空といくつもの巌のほかは何も見えません」と王女。でもそこからもっと高く登ると、山山がいくらか平らになり、見晴らしが良くなりました。「さあ、今度は何か見えるかな」と牡牛が訊ねました。「ええ、見えます。今度はちいちゃなお城が見えますわ。ずうっと遠くの遠くにね」と姫君が答えました。「あれはそんなに小さくはないのだがな」と牡牛は言いました。とうとうふたりはとある大きな山の断崖絶壁に着きました。「何か見えるかな、今度は」と牡牛が訊ねました。「ええ、あのお城がもうとっても近くに見えます。前よりずうっと、ずうっと大きくね」と王女の答え。「そなたを連れて行くのはあそこなのだ」と牡牛。「城のすぐ下に豚小屋がひとつある。そなたが小屋に入ると、木のスカート[51]が見つかる。そなたはこれを履いて、その恰好で城に行き、あたくしは木のスカートのカーリと申します、ご奉公させてくださいまし、と言わなくてはいけない。だが、今はな、そなたが携えているちっぽけな小刀を出して、わしの首を切り落としなさい。それからわしの皮を剥いで、それを丸めて、この崖の下に埋めること。もっとも皮の中にはそなたがしまっておいたあの赤銅の葉っぱと白銀の葉っぱと黄金の林檎を入れておくのだよ。この山の根の崖の外側に杖が一本立っている。何でもわしから欲しい物があったら、その杖で崖を叩くだけでいい」。姫君は初めそんなことをやってのける気には到底なれませんでした。けれど牡牛が、これこそ自分が王女のために尽くした全ての親切のお礼として王女にしてもらいたいたったひとつのことなのだ[52]、と言い張りましたので、とどのつまりはそうするほかはありませんでした。そりゃあ心底辛かったのですが、それでも王女は持っていた小刀を取り出して切り始め、やっとこさっとこ大きな動物の首を切り落とし、皮も剥ぎ取り、それから崖の根元にそれを埋めました。中にはあの赤銅の葉っぱと白銀の葉っぱと黄金の林檎を入れてね。

それを終えてしまうと、豚小屋目指して歩いて行ったのですが、ひどいこと泣きました。そうしてしょんぼり沈み込みました。それから木のスカートを履いて、そんな身なりで王様のお城へと向かいました。そうして厨房に廻ると、ご奉公させてくださいまし、と頼み、名前は木のスカートのカーリと申します、と言いました。いいともさ、と料理番は答えました。奉公口はある、皿洗い仕事をやる気があればな。なにせこれまでその係だった女がちょっと前に逃げ出したばかりなんだ、と。「でもなあ、おまえもしばらくここにいたら、やっぱりうんざりしちまって、おらっちのところから逃げ出すこったろうよ」と料理番。いいえ、きっとさようなことにはなりません、とこちら。

手水を運ぶカーリ
テオドール・キッテルセン Theodor Kittelsen
（1857-1914）描く

いやもうせっせせっせと皿洗いをしましたよ。日曜日には王宮でお客様があることになっていました。するとカーリは、王子様にお手水〔＝手や顔を洗う水〕を持って行ってもよろしい、とお許しください、って頼んだものです。他の衆はカーリのことをげらげら笑い飛ばして、「おまえ、どだいなんのつもりなんだ。王子様がおまえな

んぞと関わりになりたがるとでも考えてるのか。おまえったらそんなにみっともないのによ」と叫びました。でもカーリがいつまでも頼み続けたので、とうとう許してもらいました。さてカーリが階段を駈け昇りましたら、木のスカートがガッタガッタゴットゴットとえらい音を立てたので、王子が部屋から出て来て、「いったいおまえは何者だ」と声を掛けました。――「お手水をお持ちしようと存じまして」とカーリ。「おまえが持って来た水なんかわたしが欲しがるとでも思うのか」と王子はどなりつけて、その水をカーリの頭にぶちまけました。そこでカーリはしかたなく引き下がりましたが、今度は、教会に行くことをお許しください、って頼みました。これも許してもらえました。だって教会はすぐ近くにあったのですから。けれどもカーリはその前にまずあの崖のところに行き、牡牛に言われた通り、例の杖で崖を叩きました。するとすぐさま一人の男が中から出て来て、何が入り用か、と訊ねました。王女は申しました。教会に出掛けてお説教を聴聞（ちょうもん）してもよい、と許してもらいましたが、着て行く衣装がありません、と。すると男は衣装を一着くれました。これは赤銅の森みたいにぴかぴか輝いていました。それから馬を一頭とそれに付ける鞍[33]もね。王女が教会にやって来ると、なんとも麗しかったので、だれもが、あの方はいったいどこのどなただろう、といぶかり、お説教に耳を傾けている者なんて一人もいはしませんでした。なにしろ皆王女を見つめていましたから。王子さえこの女の人が大層気に入って、目を逸（そ）らすことができませんでした。

カーリが教会から外へ出ると、王子は跡をついて行き、カーリのうしろで教会の扉を引いて閉めました。するとカーリの手袋が片方、王子の手に残りました。カーリが馬に乗ると、王子はやっぱりそこに来て、どこのお方でいらっしゃる、と訊ねました。「オチョウズの国の者ですの」とカーリは返辞し、王子が手袋を取り出して、それを渡そうとしている間に、こう唱えごとをしました。

「わたしの前には光明を、わたしの後ろに暗闇を、
わたしがどこへ行くのかを、王子が見届けないように」。

これまでこんなに綺麗な手袋を見たことのなかった王子は、遠くまで旅をして回り、手袋を片方置き去りにして行ったあの貴婦人の故郷の国を探しました。でも「オチョウズの国」がどこにあるのか、王子に教えてやれる者はありませんでした。

次の日曜日、だれか上の王子様のお部屋に行って、手拭いをさしあげるように、ということになりました。「あたくしがまいってはいけませんでしょうか」とカーリが訊きました。「いやもう要らんこった」と厨房の他の衆。「この前おまえ、どんな目に遭わされたか身に沁みているだろうに」。でもカーリがいつまでも頼み続けたので、とうとう許してもらい、階段を駈け昇りましたら、木のスカートがガッタガッタゴットゴットとえらい音を立てました。すぐさま部屋の扉から頭を突き出した王子は、カーリだと看て取ると、その手から手拭いを引ったくり、それをカーリの頭に投げつけました。「さっさと行ってしまえ、このガンガラガンめ」と王子はどなりました。「おまえが穢わしい指で摑んだ手拭いなんかわたしが欲しがるとでも思うのか」。

そのあと王子は教会に出掛けました。カーリも、教会に行かせてくださいまし、と頼みました。他の衆は、いったいおまえは教会で何をしようというのか、真っ黒けなみっともない木のスカートしか着る物がないくせに、と言いました。けれどもカーリは、牧師様のお説教がなんともいえないほどお上手なので、聴聞したくてたまらないのです、と申しました。結局これも許してもらえました。カーリが例の崖のところに行って、とんとん叩きますと、中からあの男が出て来て、衣装を一着くれました。これは前のよりずっとみごとでした。べた一面白銀の糸で刺繍

がしてあって、白銀の森のように輝いていました。それから、白銀の縫い取りを施した馬衣(ばい)を掛けられ(54)、白銀の馬勒(ばろく)(55)をつけられたすばらしい馬も一頭もらいましたよ。王女が教会にやって来ると、人人はまだ教会の扉の外に立っていて、だれもが不思議がって、あの方はどこのどなただろう、とお互いに訊ね合いました。王子はすぐに走り寄って、この女の人が下りる間、馬を抑えていようとしました。でも女の人は独りでさっと飛び降りて、どうかおかまいなく、この馬はとてもしつけがよいので、そう言えばじっと静かにしておりますし、呼べばこちらへまいりますので、と申しました。さてそれから一同は教会の中に入りました。けれどお説教に耳を傾ける者なぞろくすっぽおりはしません。なにしろ皆カーリの方を眺めていたのです。そして王子はこの前よりももっとずうっとこの女の人に惚れ込んでしまいました。お説教が終わって、王女が教会から外へ出て、馬に乗ろうとした時、王子はまたまたやって来て、どこのお方でいらっしゃる、と訊ねました。「オテヌグイの国の者ですの」とカーリは返辞し、鞭を落としました。王子がそれを拾い上げようと身を屈めた隙に、カーリはこう唱えごとをしました。

「わたしの前には光明を、わたしの後ろに暗闇を、
わたしがどこへ行くのかを、王子が見届けないように」。

女の人はいなくなってしまい、王子は女の人がどこへ行ったものか、とんと分かりませんでした。王子は世間を遙か遠くまで経巡り歩き、女の人の故郷の国を探しました。でも「オテヌグイの国」がどこにあるのか、だれも王子に教えることはできず、結局王子は泣く泣く諦めなければなりませんでした。次の日曜日、だれか上の王子様のお部屋に行って、櫛(くし)をさしあげるように、ということになりました。カーリは、自分を行かせていただきたい、と

頼みましたが、他の衆は、このあいだどんな仕打ちを受けたか思い出させ、そんなにみっともなくて真っ黒けで、しかも木のスカートなんか履いている癖に、王子様の前にしゃしゃり出たがる、と言って叱りました。でもカーリがいつまでも頼み続けたので、とうとう櫛を持って行かせることになりました。またまたカーリが階段をガッタガッタゴットゴットと昇って来たので、王子は部屋の扉から頭を突き出し、カーリの手から櫛を引ったくり、とっとと消えてなくなれ、とどなりつけました。それから王子は教会に出掛け、カーリも、行きたい、と申しました。他の衆は、またしても訊きました。おまえみたいにみっともなくて真っ黒けなのが、いったい教会に何の用があるというのか。人中に出られるような衣装さえ持っていないではないか。おまえの姿は王子や他のだれかの目につきやすいし、そうしたらおまえも他の人たちもいやな気分になるだろう、と。けれどカーリは、皆さんはさだめしあたくしなんぞより別のものをごらんになることでしょう、と言いました。そこでとうとう行かせてもらえました。

さてさて今度もこれまで二回と全く同じことになりました。あの断崖に出掛けて、杖で叩くと、例の男が出て来て、衣装を一着くれました。これは前の二回よりずっとずっとみごとでした。まじりけのない黄金とダイヤモンドでできていたのです。それから黄金の縫い取りを施した馬衣を掛けられたみごとな馬を一頭と、黄金の馬勒ももらいましたよ。

王女が教会にやって来ると、牧師も会衆もまだ教会の扉の外に立っていて、あの女の人の到着を待ちかねていました。王子はすぐに走り寄って、女の人のために馬を抑えようとしました。でも、あちらはさっと飛び降りて、「いいえ、けっこうでございます。どうかおかまいなく。わたくしの馬は大層従順で、わたくしがそう申せば、じっとしております」と言いました。こうして一同は教会の中に入り、牧師は説教壇に上りました。でもお説教に耳を傾ける人なんてだれもおりません。なにしろ皆が皆姫君の方に目を注ぎ、あれはどこのどなただろう、といぶ

かり合っていましたから。そして王子は前の二回よりもずっとずっと女の人に惚れ込んでしまい、なにもかも忘れて女の人ばかりを見つめていました。お説教が終わって、王女が教会から外へ出る時のことです。王子はあらかじめ教会堂の表玄関に生タール(56)を流させておいたのです。自分が王女を抱いてそこを渡らせてあげられるようにね。けれども王女はそんなことは気にしないで、生タールの真ん中に足を踏み込み、向こう側へぴょんと跳び越えました。そしたら黄金の靴が片っぽ脱げてそこに残ってしまいました。王女が馬に乗ってから、王子が教会から走り出て来て、どこのお方でいらっしゃる、と訊ねました。「オクシの国の者ですの」と相手は返辞しました。でも王子が黄金の靴を手渡そうとしますと、カーリはこう唱えごとをしました。

「わたしの前には光明を、わたしの後ろに暗闇を、
わたしがどこへ行くのかを、王子が見届けないように」。

こうして王子はまたしても女の人がどこへ行ったのやらとんと分からなくなり、長いこと世間を経巡り歩いて、オクシの国とやらを探しました。でもそれがどこにあるか教えてくれる者はおりませんでしたので、王子はこんなお触れを出しました。自分はかの黄金の靴がぴったり足に合う女性と結婚する、とね。そういうしだいでべっぴんさんもへちゃむくれも、世界中至るところから駆けつけて来ましたよ。でもねえ、あの黄金の靴が合うようなちいちゃな足の持ち主は一人だっていやしませんでした。あげくの果て、カーリの性悪の継母も自分の娘を引き連れてやって来ました。ところでね、この娘の足が靴に嵌まったのです。けれどこの娘というのは不器量でなんとも感心しない見掛けでしょう。だもんで、王子は約束を守るなんてほとほといやでした。それでもまあご婚礼の準備が

ととのいましてね、娘は花嫁衣装に身を飾ったのです。だけれど王子と娘が馬に乗って教会へ行く途中、一羽の小鳥が木に止まり、こんな具合に唱いました。

「踵（かかと）を少（すこう）し、
爪先少（つまさきすこ）し、
木のスカートのカーリのお靴、
血で溢れてる、おお、痛い」

そこで皆が調べてみますと、鳥の言葉は本当でした。だって片方の靴から血がぽたぽたぽたぽた出てるんですもの。さあてそれからです。お城にいる下女たちも侍女たちもだれもかれも靴を履いて試さなくちゃいけない、ということになりました。でもね、あの靴はだれの足にも嵌まろうとしません。「ところで、木のスカートのカーリはどこにいる」と王子が訊きました。だって王子は前に鳥の歌の意味が分かったのですし、その唄を忘れないでいたのですからね。「ああ、あれでございますか」と他の衆は申しました。「あんなのを来させましてもどうしようもありません。あれは荷物運びの馬みたいな足をしております」。――「かも知れぬ」と王子は言いました。「だが、他の者は皆靴を試した。あれにも履かせてみなければ。おおい、カーリ」と王子は部屋の扉から外に声を掛けました。するとカーリはガッタガッタゴットゴットと階段を昇って来ました。いやもう龍騎兵[57]がまるまる一個連隊襲来したみたいなおっそろしい音を立ててね。「さあさあ、おまえ、この黄金の靴を試しに履いて、姫君様になるがいいぞ」。いあわせた連中はそう囃（はや）し立て、カーリをからかいの種にしました。カーリは靴を受け取ると、何の雑作（ぞうさ）

もなくするりと片足を入れ、木のスカートをさっと脱ぎ捨て、きらきらすこぶる輝かしい黄金の衣装姿で立ち現れました。もう片方の足には同じ黄金の靴を履いていました。王子はすぐさまカーリがあの女の人だと分かり、とても喜んで、駆け寄ると、カーリを腕に抱いて接吻（くちづけ）しました。そこでカーリは、自分は王女なのだ、と王子に打ち明けましたので、王子はいよいよ嬉しくてたまらなくなりました。そうしてふたりは結婚いたしました。

チョキチョキ、チョキチョキ、チョッキンな、
これで、お話、おしまいよ。

＊この民話は本当に上手に語られている。

ただし、優れた画家の筆によるものではあるが、「木のスカート」なる簑しの道具（アイテム）を掲載した挿絵の通りに受け入れる必要はない。テオドール・キッテルセンは木片を綴り合わせた衣装をみごとに描いている。が、この民話の、昔むかしの語り手たちが脳裡に浮かべた衣装がこれだったかどうか、それはだれにも分かるまい。まず、木片ではなく樹皮だったかも知れない。しかもそれを綴り合わせたのではなく、細く裂いて編んだものかも知れない。なにしろ、それなら現実に存在した衣料だ、と思われることだし。シナノキ属である洋種菩提樹（リンデ）Linde の樹皮で作った日用品はボヘミア（現チェコ）君主国の建国伝説にも登場する。ボヘミアの初代女王と伝えられるリブシェ Libuše（ドイツ語「リブッサ」Libussa）の夫となった若者、すなわち農夫プシェミスル Přemysr は、耕作に従事していた折履いていた木靴を大切に保存するよう臣下に命じ、自分の後継者たちが、取得する高貴な地位を鼻に掛けることなく、その起源を心に銘記するよう、プシェミスル朝王位継承の際それを提示するよう計らった[58]、という

が、この品を、木靴ではなく、洋種菩提樹の皮で編んだ雑嚢である、とする口碑もある。かつてヨーロッパにおいては強靱な洋種菩提樹の樹皮でいろいろなものが作られたらしい。それも宜なること。注「ここでは「姥皮」が窶しに用いられる」で紹介したように科の木の皮（菩提樹皮）で編んだ衣料は日本にも存在するのだから。

〔九〕デンマーク民話「木っ端頭巾のメッテ」Mette Holzkäppchen（「メテ・トレヘテ」Mette Træhætte）

ラウリツ・ベトカー編／アナ・ケアゴー訳『デンマークの民話』（「世界の民話」シリーズ）[59]による。

［粗筋］

発端はＫＨＭ一三〇「一つ眼、二つ眼、三つ眼」KHM130 Einäuglein, Zweiäuglein und Dreiäuglein と類似。女主人公メテは継母とその二人の娘（一人は普通に眼が二つだが、もう一人は首筋に三つ目の眼がある）に苛められている。最初の援助者は亡母。メテが教会へ行くと、墓の中から出て来る。この援助を自分の娘の三つ眼の告げ口で知った継母は継子のメテを家に閉じ込めてしまう。

継母が家を留守にした折、メテは父親に頼んで、家から出してもらう。教会墓地に行くと、亡母が出て来て、おまえはもう家にいることはできない、と言う。そして木で作られた小さな頭巾をくれる。更に亡母は、教会墓地から出ると赤い仔牛が見つかるから、これに乗ってどんどん行くように、その旅路ではこれこれのことがある、

とメテに教える。メテはその通りにする。

最初は白銀の森で白銀の木の葉を一枚取る。この木の葉はすばらしい白銀の衣装に変わる。次には黄金の森で黄金の木の葉を一枚取る。この木の葉はすばらしい黄金の衣装に変わる。最後はダイアモンドの森でここでもダイアモンドの木の葉を一枚取る。この木の葉はすばらしいダイアモンドの衣装に変わる。いずれの場合も、葉を取ったとたん、兇暴な獣たちと人間たちに襲い掛かられるが、赤い仔牛が疾走して助かる。三つの森を通り過ぎると、大きな黄金の城に着く。

メテは仔牛を乗り捨てて〔ノルウェーの類話「木のスカートのカーリ」のように「皮を剥ぐ」云云のモティーフはない〕、城に上がって行き、奉公をさせて欲しい、と懇願する。頼みは聞き入れられるが、なれたのは鶏番の娘っこという役回りに過ぎない。メテは毎日木の頭巾を被って東奔西走、他の人たちのために掃除をしなければならず、犬のようにこき使われ、「木っ端頭巾のメテ」と綽名される。

日曜日の朝、料理番に言い付けられて、王の許に水を持って行かされる。王は水の入った鉢を摑んで、水をメテの頭からぶちまける。メテは、留守中食事の仕度をしておけ、と命じて料理番が教会に出掛けた留守に、胸に提げた小箱を叩き、出て来た黒い小犬に願い事をする。白銀の衣装と四頭の白馬が牽く馬車が欲しい、と。そして衣装を纏い、馬車に乗り込むと、自分がだれにも見えないように呪文を唱えて教会に行く。その間黒い小犬が食事の仕度をする。教会で王はこのすばらしい貴婦人から目を逸らすことができない。ミサが終わらないうちにメテは外に出て馬車に乗ろうとする。王の命令で従者が近寄り、どこからいらっしゃいましたか、と訊くと、メテは「オミズの国の者ですの」と答えて、いなくなる。料理番が厨房に帰ると、食事がこれまでになく上上のできで準備されているので、メテを大いに褒める。城の人人もメテをかわいそうに思い始める。

次の日曜日王はメテに、彼女が料理番に言い付けられて持って来た長靴をその背中に投げつける。メテが黒い小犬に願うのは、黄金の衣装と四頭の白馬が牽く馬車。教会から立ち去る際、王の従者の問いに対して「オナガグツの国の者ですの」と答える。

次の日曜日王はメテに、彼女が料理番に言い付けられて持って来た手拭いでその背中に叩く。メテが黒い小犬に願うのは、ダイアモンドの衣装と四頭の白馬が牽く馬車。教会から立ち去る際、王の従者に「オテヌグイの国の者ですの」と答える。ただし今回王は馬車の前にタールを塗らせておく。この見知らぬ貴婦人が引き揚げるのをいくらかでも遅らせよう、と考えて。それでもメテはうまく逃げ出すが、靴の片方をタールの中に残す。

王は手にした小さな靴を世界中に廻し、あの美しい貴婦人がだれだか、知ろうとする。しかしそれが合う女性は一人もいない。メテを除いて全ての人が履いてみたのだが。そこで城の人たちは、メテにも履かせて欲しい、と王に頼み、王も仕方なく承諾する。こうしてメテの足にその小さな靴がぴったり合うことが分かり、王もこの乙女があの美しい貴婦人であることを認め、婚礼が行われる。

〔十〕トルコ民話「毛皮娘」

オットー・シュピース編訳『トルコの民話』（「世界の民話」シリーズ）[60]による。

［全訳］

昔むかしあるところに大王(パディシャー)[61]がおりました。お妃は一人ありましたが、二人の間に子は生まれませんでした。ある日大王(パディシャー)と王妃(スルタナ)[62]が散策に出かけた時、一人の托鉢僧(デルヴィーシュ)[63]に出逢いました。この僧に二人が、子どもができない、という悩みを訴えますと、托鉢僧(デルヴィーシュ)はこう申しました。「姫宮様をお授かりになられまするよ。したが、両陛下におかせられましてはこのお子を『毛皮娘』とお呼びなさる仕儀になりましょうぞ」。

大王(パディシャー)は一向合点が行かず、こう応じたものです。「かように長い歳月が経ってようやく女の子が授かるというのに、なぜ余はその子を『毛皮娘』などと呼ばねばならぬのだ」。托鉢僧(デルヴィーシュ)はこれには何も答えず、大王(パディシャー)に林檎(りんご)[64]を一つ差し出して、こう告げました。「この林檎を二つに割って、王妃(スルタナ)様とご一緒に召し上がれば、お子を授かりましょう」。

大王(パディシャー)は林檎を受け取り、晩になるとそれを王妃(スルタナ)と一緒に食べました。その後しばらくして王妃(スルタナ)は一人の女の子を産んだのですが、赤児を一目見る暇(いとま)[65]も無く病気になり、何日かすると目を閉じてこの世に別れを告げました。いまわのきわに王妃(スルタナ)は最後の願いとして、自分が腕から外した腕環(うでわ)が合う腕の女性と結婚するように、と大王(パディシャー)に言い残しました。

そのうち乙女はすくすく育ち、とうとう十七歳になりました。大王(パディシャー)は腕環が合う女性と結婚することに決めました。触れ役がこのことを触れ回り、どこどこ太鼓が叩かれたもの。でも国中で探させたのに、腕環はだれにも合わなかったのです。

とうとう大王(パディシャー)はある日のこと、試しに腕環を自分自身の息女の腕に嵌めてみました。すると息女の腕にぴった

り合ったので、大王（パディシャー）は実の娘と結婚することに決めました。

うら若い王女はこんな結婚をとうてい承知できませんでしたが、父王に何を言っても聴いてもらえません。そこで思案を廻らし始め、逃げ道を思いつきました。

父王の牧人たちの中に一人の羊飼いがあり、これを王女は父のように慕っておりました。そこで王女はこの男に助けてもらうことにしました。王女は、前からとっくり考え抜いておいた通りにし、羊飼いのところに行くと、事情をすっかり打ち明けて、殺された羊の皮が欲しい、と言いました。父王には二、三日の猶予を願っておいたので、急ぐ必要はなかったんです。仔羊の皮を受け取ると、それにくるまり、地べたを這って〔これでみると、どうやら羊に化けたのである〕城から遠のきました。途中たくさんの森を通り、狼などの野獣に出遭い、とても怖い思いをしなければなりませんでした。こんな具合で道道随分と時間が掛かりましたが、やっとのことである都に着きました。ちょうどこの都の大王（パディシャー）の牧人たちがまっすぐお城に向かっているところでした。王女はこの畜群に紛れ込み、そうやって城門までまいりました。家畜小屋に入れようとされると、王女は、中へは入りたくない、と申しました。びっくりした下僕たちは大王（パディシャー）のところへ行き、一頭の羊が人間みたいにしゃべりまする、と告げました。そこで大王（パディシャー）は、その羊を御前へ連れて来るよう言い付けました。

皆はその綺麗な乙女を(66)大王（パディシャー）の前に連れて来ました。名前を訊かれると、乙女は、毛皮娘と申します、と答えました。さて、話を簡単にいたしますとね、乙女はお城の中に部屋を一つあてがわれたのですよ〔羊の皮を纏い、二本足で立ち、下女として奉公したのだろうが、下女としての奉公については明記されていない〕。

ところでその都の大王（パディシャー）には子息が一人ありました。あらゆる町という町のうら若い乙女たちが大王（パディシャー）が催した祝宴に招かれました。王子にこの祝宴でお気に召した乙女がいれば、これに黄金（きん）の毬（まり）を投げてその乙女と結婚す

る[67]、ということで。祝宴の日になると召使いの女たちは毛皮娘にも、祝宴に行くよう声を掛けました。毛皮娘は行きませんでした。でも、お城にだあれもいなくなったことが分かると、毛皮娘は羊の皮衣を脱ぎ捨て、黄色い衣装を身に纏い、祝宴が行われている庭園へ出かけたもの。隅っこに引っ込んで、そこに坐っていたのですが、とても綺麗だったので、若い王子の目を惹き付けました。そこですぐさま王子は黄金の毬を乙女に投げたのです。

乙女は姿を見られたのに気づくと、逃げ出して、お城に戻り、そこでまた羊の皮衣を被りました。祝宴から帰って来た召使いの女たちは毛皮娘に、祝宴にとても綺麗な娘がやって来て、王子様が例の毬を投げつけたけれど、娘は逃げちゃった、と語って聞かせました。毛皮娘は一言も口を挟まずじっとこの話に耳を傾けていましたが、「こんな毛皮を着てないなら、あたしも行ってたでしょうけど」と申しました。

大王（パディシャー）は、祝宴は十日続ける、と公（おおやけ）にお触れを出しました。祝宴の二日目、もうだあれもお城にいなくなると、毛皮娘は今度は緑の衣装を纏い、祝宴に出かけました。乙女の姿を目にすると、王子はすぐさま黄金の毬を投げました。とっても大変だったのですが、乙女はまたまた逃げ出して、お城に辿（たど）り着きました。

帰って来ると召使いの女たちは、あの娘がまたしてもやって来たが、逃げちゃった、三度目に来ても、娘が捉まらなかったら、王子様は旅に出るおつもりだって、と告げました。

三日目になると、宴会場は警吏たちに取り巻かれました。だあれもお城にいなくなると、毛皮娘は今度は白い衣装に身を包んで、宴会場に姿を現しました。王子はまた毬を投げました。けれども、乙女は毬を摑（つか）むと、どうにかして警吏たちの手から逃げ去りました。

そこで王子は旅に出ようと決心しました。お城ではいろいろな準備が始まり、だれもが王子に贈り物をしました。毛皮娘は大きな捏（こ）ね粉菓子をこしらえ、その中にあの黄金の毬を入れ、これを王子にお餞別（せんべつ）として献上しまし

た。王子は捏ね粉菓子を見て大笑いし、思い出の種にこれを鞍袋の隅に押し込みました。そうして旅行隊（カラヴァーン）は出発しました。

旅行隊（カラヴァーン）は夥しい国国を廻りましたが、あの乙女は皆目見当たりませんでした。とはいえ、旅を続けるほかしかたありません。そのうち一行は強盗団の襲撃に遭いました。王子は金も部下も失くして独り取り残されました。鞍嚢に目を向けた王子は例の捏ね粉菓子を見つけました。お腹が空いていたので、すぐさま食べ始めたのですが、二度目にかぶりついた時、例の毬が口に入りました。そこであの綺麗な乙女が実は自分自身のお城にいることが分かったわけなのです。で、王子は領国に戻ろうと心を決めました。けれどもこの企ては簡単ではありません。たくさんの冒険を乗り越えて、ようやく王子は故国に帰還いたしました。

皆は乙女をくるんでいる毛皮をうんとこさ骨折って[68]切り開きました。ほかのだれよりもずっとずっと綺麗な姫君がありったけの美しさで立ち現れました。王子と美しい姫君のご婚礼は四十日四十夜続きましたよ。

＊この物語には、注で指摘したように、少なくとも二箇所おかしな点があるが、こうしたことは民話ではさほど珍しくない。『千夜一夜物語』に収録されている話にも自己撞着が散見される。編者バートンは、中近東ではよくあること、と注記しているが、この地域に限ったことではない。

＊　＊　＊　＊　＊

以下〔十一〕〔十二〕〔十三〕〔十四〕〔十五〕〔十六〕は文人が民話を素材として仕上げた物語の例である。ただ

し〔十五〕〔十六〕にはそれぞれ相当する民話の粗筋も添えておいた。

〔十一〕ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著『ドイツ人の民話』[69]所収「泉の水の精」Die Nymphe des Brunnens

〔粗筋〕

ドイツ南部シュヴァーベンの強盗騎士[70]ヴァッカーマン・ウールフィンガーの心優しい妻マティルデは城山の麓の泉の水の精と仲良しになる。水の精は彼女の三女の代母[71]になり、マティルデが死んで、ヴァッカーマンが後妻を娶ってからは、この子（亡き母と同じくやはりマティルデという名）が泉に遊びに来るたびに、ひそかにこの子にさまざまな有用な教育を授ける〔水の精の援助〕。〔継母は全く世話をしない。またマティルデ同様自分にとって腹違いの娘たちであるマティルデの姉二人も近在の都市の修道院へ預けてしまう。この姉たちはその後物語には全く登場しない〕。

（後妻の濫費のため）ヴァッカーマンの劫掠（きょうりゃく）所業があまりにも激しさを増したので、シュヴァーベン都市同盟は遂に軍勢を糾合、ヴァッカーマンの山塞を攻囲してこれを撃破、彼を殺し、城を燃やしてしまう。少女マティルデは水の精がくれた林檎の形をした木製の香盒（こうごう）（掛けた願いを三度まで叶えてくれる）を持ち、水の精が教えてくれた呪文で姿を見えなくして、城を占拠した攻囲軍から無事落ち延びる。途中農婦と衣装を交換。

シュヴァーベン地方東端の有力都市アウクスブルクでシュヴァーベック伯コンラートの別邸に奉公。ただし、

疔瘻病で背中が曲がっているように見せ掛け、美しい金髪は頭巾で覆い隠し、顔と手には煤を塗りつけて、漂泊の民のように身を窶して。しかし骨身を惜しまず働くので、極めて気難しい女中頭のゲルトルート夫人に気に入られる。やがてご主人コンラートがこの別邸に来るが、殿様はもちろんこのむさ苦しい厨房の下働き風情には目もくれない。

やがてアウクスブルクでは神聖ローマ帝国皇帝の皇子誕生を祝って一大祝祭が行われる。市庁舎で舞踏会。マティルデは体を洗い清め、林檎の香盒に一度目の願いをし、豪奢な衣装と付属品一切をそこから取り出し、装いを凝らして市庁舎へ赴く。邸の者たちは呪文で眠らせる。コンラートはこの美女に一目惚れし、一緒に踊り続ける。美女は素性を打ち明けぬまま、会場を去って邸に戻る。

翌晩も同じ。マティルデは二度目の願いをし、衣装その他を得る。コンラートの愛の告白。素性を聞かされないまま、彼女が卑賤な身分の出でも、清浄無垢な乙女ならきっと妻にする、と約束、ダイヤモンドの指環を渡す。そして邸で三日間宴会を開くので、来て欲しい、と頼む。マティルデは姿を消す。

宴会に美女は現れない。コンラートは恋に窶れ衰え、瀕死の病に陥る。ゲルトルート夫人から、ご主人が亡くなるのも間近、と聞いたマティルデは仰天。必ずお元気になるスープを作る、と返答。スープの中に例のダイヤモンドの指環を入れて置く。コンラートは指環を発見、英気を取り戻し、スープをこしらえた者を呼べ、と命じる。初めは下女の醜く汚らしい姿にびっくりするが、その聡明な応答ぶりに感服、あの美しい容姿に戻るなら、誓って約束は履行する、と言う。

マティルデは自室に引き取り、体を洗い清め、装いを凝らして現れる。もちろん伯爵は大喜びで彼女と結婚。領地の一つへ行く。ここはヴァッカーマンの城の廃墟に近いので、マティルデは代母に逢えないか、と例の泉に行く

が、水の精は姿を現さない。

そこで幸せに暮らすうち、夫婦の間に可愛い男の子が生まれ、乳母が雇われる。けれども誕生直後この子は行方不明になる。しばらくしてまた男の子に恵まれるが、この子も同じくいなくなる。激怒した伯爵は乳母を殺そうとする。乳母は、奥様は魔法使いで、自分の美しさと夫の自分への愛を保つため、実の子たちを殺して媚薬の材料にした、と言う。

伯爵は懊悩のあげく、自分の留守中に夫人を蒸し風呂に閉じ込めて殺せ、と使用人に言いつけてアウクスブルクへ去る。使用人たちは慈悲深いマティルデ夫人が大好きだったが、止むを得ず命令に従う。浴室で高熱のため死にそうになった伯爵夫人は、林檎の香盒に最後の、すなわち三度目の願いを掛け、命を助け、無実の罪からお救い下さい、と言う。水の精が出現、浴室を冷やし、連れている二人の愛らしい男の子を示し、真相を打ち明ける。伯爵の高慢な母親[72]が全ての不幸の原因。息子が卑賤な台所女中と結婚した、と思い込んだ母親は、マティルデを亡き者にしよう、と計画、例の乳母になった女を使い、破滅させようとしたわけ。乳母は攫った子どもを水の精の泉に投げ込んだが、水の精はこれを抱き止めて大切に養育したのである。アウクスブルクから帰って来た伯爵は、一切を妻から聞き、息子たちを抱き締め、邪悪な乳母を浴室で蒸し殺させた。〔マティルデ夫人の姑こそ元兇なのだが、これに対する懲罰はない。伯爵の実母であってみれば、それも致し方ないことか〕。

＊この物語の場合、女主人公の窶しには何ら魔法は関係ない。

〔十二〕シャルル・ペロー作『過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓』またの名『鵞鳥おばさんのお伽

話』[73]所収の韻文「驢馬皮（ボー・ダーヌ）」Peau d'Asne。[74]

［粗筋］

豊かで権勢ある王が、王妃の死に際の言葉「私より美しく賢い女性となら再婚しても良い」を必ず守る、と誓う。ところが成長した王女だけが亡くなった王妃より更に優しい魅力を備えている。これに気づいた父親から妻になるよう要求された王女は、自分の代母である妖精（フェ）[65]の忠告〔妖精（フェ）の援助〕で、空の色〔紺青（こんじょう）色〕の衣装、月の色〔白銀（しろがね）色〕の衣装、太陽の色〔黄金（こがね）色〕の衣装を父王に頼む。しかし、この難題は全て叶えられてしまう。

そこで、父王がとても大事にしている黄金を糞としてひる驢馬を殺して、その生皮が欲しい、と言う。ところがこれも実現してしまうので、王女は宮廷から逃げ出す決心をする。妖精（フェ）の指示で三通りの素晴らしい衣装・装身具は櫃に納める。これは地面の底を通って王女に随いて来る。そして妖精（フェ）からもらった杖で地面に触れば、すぐさま目前に出現するのである。

驢馬の皮を頭からすっぽり被って〔見苦しい姿に身を窶し〕、ある王国の大きな小作農家（王所有）で下女奉公をする。「驢馬皮（ボー・ダーヌ）」と綽名されて、だれからも蔑（さげす）まれる。

この国の王子はしばしば狩りの帰りにこの農家に立ち寄って休息するのだった。農園の奥まった小屋に住む王女が、日曜日にいつもするように、驢馬の皮を脱いで絶世の美女に戻り、美しい衣装を着ているのを鍵穴から覗き見し、一目惚れする。思わず小屋に押し入ろうとするが、女性に対する敬意〔＝王侯貴族の慇懃さ（ギャラントリー）〕からそれができないまま帰城。

恋に窶れた王子は病気になる。そして驢馬皮（ポー・ダーヌ）の作った菓子が食べたい、と母后に頼む。

王女は菓子の中に自分の指環を入れて焼く。王子はその指環を見て、それに指が嵌まる娘と結婚する、と言う。王国中の未婚の女性が試すが、どの女性もうまく行かない〔太い指の持ち主が指を入れることができないのは当然だが、幼い少女が細い指を差し込むと、今度はゆるゆるでぴったり嵌まらないのは、指環が魔力を持っているからである〕。どんじりにだれもが問題にしていなかったみっともない驢馬皮（ポー・ダーヌ）が試みる。指環がぴったりその指に嵌まるばかりか、彼女が驢馬の皮を脱ぐと、世にもみごとな衣装を纏った絶世の美女が現れる。幸せな結婚。父王も時が経つにつれて、「罪深い欲望」を心から追い出していたので、この結婚を祝福する。

〔十三〕ジャンバッティスタ（＝ジョヴァン・バッティスタ）・バジーレ作『お話の中のお話（五日物語）（ロ・クント・デ・リ・クンティ イル・ペンタメローネ）』(76)所収「牝熊（ロルサ）」L'orza（第二日第六話）

〔粗筋〕

ロッカ・アスプラ〔「険しい巌」くらいの意〕の王が、亡くなった妃と同じように美しくなった自分の実の娘プレツィオーサ(77)と結婚しようとする。

王女は彼女が時時施し物を与えていた老婆〔老女の援助〕から、口にくわえると熊に変身するちっちゃな木の枝(78)をもらう。結婚初夜はこれで父親を脅かして追い払い、それから王宮を抜け出して森に入り、動物たちと楽しく暮らす。

狩に来たアッカ・コッレンテ〔「急流」くらいの意〕の王子に逢う。王子は最初怖がっていたが、牝熊が愛らしくじゃれつく〔王子は男前なのだろう〕ので安心し、熊をあやしながら王宮に連れ帰り、庭園で放し飼いにする。

ある日独りきりでいた王子が館の階上からふと下の庭を見ると、姿を目撃されているとも知らず、ちっちゃな木の枝を口から離し、金髪を梳かしているプレッィオーサの姿が目に入る。駆けつけるが美女の姿はなく、熊がいるだけ。そこで恋煩いに陥り、重態になる。

母后は王子が「ぼくの熊ちゃん、ぼくの熊ちゃん」とうわごとを言い続けるので、熊のせいで病気になったのだ、と考え、家臣たちに、熊を殺すように、と命じる。しかし家臣のだれもがこの牝熊を愛しているので、殺さず、森に放す。

それを耳にした王子は仰天して熊を連れ戻させ、熊に向かって、毛皮の下にある美しい体を見せておくれ、とかきくどく。母后は瀕死の息子の要求を聴き入れ、熊に看護と料理をさせる。熊はどちらも見事にやってのけ、王子は快方に向かう。そしてある日王子は、熊に接吻させて欲しい、と母后に頼む。母后は「接吻してあげて、接吻してあげて、綺麗な獣さん、さもなきゃわたしのかわいそうな息子は死んでしまう」と熊に言う。そこで熊がそうすると〔当然のことだが〕熊の口からちっちゃな木の枝が落ち、熊は元の美女プレッィオーサに戻る。事の顛末を聞いた母后は感心して、彼女を息子と結婚させる。

＊牝熊に変身した女主人公は、苦役に従事するどころか（理の当然で、そういう姿であってみれば、厨房の下働きなどとんでもない）、王子を始め王宮中の者たちからかわいがられる。このことは、動物への変身と過酷な労働生活とは結びつきにくいことを示唆しよう。

「ちっちゃな木の枝」（小さな木片、小さい木の棒）を変身の道具（アイテム）としたのは、バジーレの創案か、それとも素材とした民話ですでにそうだったのか、いずれにせよ単純素朴かつ秀逸なモティーフである。

〔十四〕ジョヴァンニ・フランチェスコ（＝ジャンフランチェスコ）・ストラパローラ作（79）『楽しき夜夜（レ・ピアチェヴォーリ・ノッティ）（80）』（第一夜第四話）「ドラリーチェ」Doralice

物語の女主人公が身を潜める「巧みな細工が施された、世にもすばらしい衣装櫃（アルマディオ）（81）」un bellissimo armadio, finemente lavorato は「木製」とは明記されていないが、金属製の衣装櫃（アルマディオ）は現実にはありそうもないことから、一応木製と判断しておく。さて論者は、この「木製の箱」を窶しの道具（アイテム）である、と強いて附会するつもりはない。ないが、窶しの「木の外被」がここまで変形した一例だ、とは断じたい。

なおATUではATと異なり、この話はATU五一〇＊「櫃の中の姫君」（82）として項目が別に立てられている。この「櫃」が黄金で作られている〔現実にはあり得ない〕設定の類話もあるので、整理上別に分類したのはもっともではあるが、小論ではここで紹介しておく。

［粗筋］（83）

〔南イタリアの小国〕サレルノの大公テバルド Tebaldo, principe di Salerno は相思相愛だった奥方の死後、自分

の一人娘ドラリーチェを妻にしようとする。奥方は臨終の際、再婚するなら自分が嵌(は)めている指環がぴたりと嵌まる指の持ち主とだけにして欲しい、と夫に懇願したのだが、ドラリーチェがたまたま亡き母の指環が自分の指にするりと嵌まることを発見、それを父親に語ったからである。

父親の邪な意図に惑乱した清らかな乙女は信頼する年老いた乳母と相談〔乳母＝老女の援助〕、豪奢な衣装の数数と貴重な宝石類を入れた壮麗な衣装櫃に身を潜める。匙一杯か一杯足らずを服用するだけで他に何も食べずとも長いこと生きていられる効能のある水薬(リクウォーレ)[84]もたっぷり携えて。テバルド大公は櫃が置かれた部屋に来て、中が覗けないのを知り、運び出して売り払うよう、召使いたちに命じる。召使いたちは櫃を肩に担いで市場へと持ち去る。これは富裕なジェノア人貿易商に購われ、その船に乗せられ、ブリタニアの島に運ばれる。最近王に即位したばかりで未婚のブリタニア王ジェネーゼ Genese がこのすばらしい衣装櫃が大層気に入ってこれを買い取り[85]、自室に置く。ドラリーチェはジェネーゼが部屋を留守にすると櫃から出て、掃除をし、王の臥所(ふしど)を調え、部屋をみごとに飾る。やがてドラリーチェの存在を知ったジェネーゼは母后の賛同を得て彼女と結婚し、娘二人を儲ける。

しかし娘に対する執念に燃えるテバルドはこのことを知り、商人に化けてブリタニアに来着、娘に正体を見破られずに接近、手を回して娘の携えている短剣でこの子たちを殺害して逃げ帰る。ドラリーチェは短剣の血痕を証拠として子ども殺しの嫌疑を掛けられ、夫から死刑を宣告される。事の顛末をテバルドから聞かされたドラリーチェの忠実な乳母は夜に日を継いでブリタニア王の許に参上し、全てを明らかにする。ブリタニア王ジェネーゼは妻ドラリーチェを囚われの身から解放、大軍を率いてサレルノを攻め、テバルドを捕虜にして連れ帰り、四つ裂きの刑に処する。

王ジェネーゼと王妃ドラリーチェはその後ずっと幸せに暮らし、死後はその子どもたちが位に就いた。

＊最初にジェネーゼとドラリーチェの間に生まれた子どもたちがその実の祖父に短剣で殺されて、そのままである（＝生き返らない）ことは、なんとも陰惨で、決して民話的ではないことを附記しておく。

〔十五〕御伽草子[86]の「鉢かづき」[87]

この物語も「木の外被」型に属すると考えられる。日本でいつ成立したのか興味深い。仮に室町時代の丁度半ばの成立、と想定すると一四八〇年頃となり、ヨーロッパでどうやら初めて皮衣に身を窶す姫君を主人公としたと思われるイスパニアの民謡調物語詩（ロマンツェ）が成立した十六世紀より早い。ただし両者とも（おそらく）その素材となった民話はより古くから語り伝えられていたわけである。

〔粗筋〕

河内の国の備中守（びっちゅうのかみ）さねたかの一人娘〔父の名は住国ともに記されているのに、姫君の名は無い。昔話では固有名詞は問題にされない。もっとも文人の手によって本になった物語ではまことしやかに記されることが多い〕。父母寵愛。長谷寺（はせでら）の観世音菩薩に常に姫の幸せを祈願。

母は姫が十三歳の折重病になる。臨終の際、姫を呼び寄せ、「側（そば）なる手箱を取りいだし、中には何をか入れられけん、世に重げなるを姫君の御ぐしにいただかせ」〔＝傍らの手箱を取り出し、何が中に入っているのか非常に重そうなのを姫の髪の上に載せ〕、その上に肩が隠れるほどの〔木製の〕鉢[88]を被らせる。

この鉢はどうして取れない。やがて父親は後妻を娶る。後妻は姫の異様な姿を嫌い、自分の子が生まれてからは相続の問題もあって、ひどく苛め、姫の父である夫に姫のことをいろいろ讒言する。姫は父親に家を追い出される。

辛い旅。人人にばかにされる。入水(じゅすい)しても鉢のために水に沈まず、助かる〔木の鉢が軽いから、といって、それを被っている人間の顔全体が水に沈まないのはまことにおかしい〕。

中将殿なる大貴族の邸で水仕女(みずしめ)[89]として奉公。「鉢かづき」〔＝鉢を頭からすっぽり被っている者〕と綽名される。

中将殿には四人の若君がいて、上の三人は既に妻帯。独身の末の若君「宰相殿」は大層美男。夜風呂に入る。鉢かづきが湯を供える。その声が優しいのを聞き、手足の美しさが並大抵ではないのを見て、宰相殿は「御湯殿してまゐらせよ」（＝背中を洗い流しなさい）と命じる。鉢かづきは仕方なくそうする。そして二人は契る〔鉢が取れないのにどうやって情が交わせるのか、これまた奇妙なのだが……。「顔(かほ)の愛敬(あひきやう)のいつくしく」と記されているところを見ると、宰相殿は鉢かづきの顔を下から覗いたのであろうか。しかし、顔を見るのは結び近くが初めてのはず〕。

やがてこのことが聞こえて、あのような変化(へんげ)〔＝化け物〕はかわいい息子を死なせてしまうのでは、と心配した中将殿の奥方の思案で、嫁合わせ〔＝嫁較べ〕をせよ、ということになる。異様な姿の鉢かづきは居たたまれずにどこかへ行ってしまうだろう、と考えて。深く愛し合っている二人は明け方に駆け落ちしようとする。その時鉢が落ちる。宰相殿は初めて姫の全貌を見る。[90]顔が極めて美しいことの描写。それから鉢を拾い上げると、中に数数の財宝と見事な衣装が入っている〔観世音菩薩と亡き母の援助〕。

改めて嫁合わせの座敷へ。上の兄君たち三人の嫁御寮はいずれも美しいが、鉢かづきは彼女らより遥かに優って

いる。かくして鉢かづきは宰相殿と添い遂げて三人の子に恵まれて幸せに暮らす。

＊これに相当する日本民話は「鉢かつぎ」[91]〔「かつぎ」（＝担ぎ）は「かづき」の転訛〕である。ただし、こうした民話がかつて文人によって採録され、文人がそれを素材として物語に仕上げた、というより、御伽草子が本の形で民間に流布し、それが更に口承化された、と考えられる。文人が素材とした民話原型については不明。そうしたものがあったのだろう、最初から文人の創作だったのではあるまい、と論者が思っているだけのこと。

［粗筋］

金持ちの娘。母は臨終の際たくさんの衣類を鉢の中に入れ、「私が死んだら鉢をかぶれ」と言う。母が死ぬ。父は後妻をもらう。後妻は気立てが悪く、娘を追い出さなければ自分はここにはいられない、と言う。娘は追い出されて、大きな家の風呂焚きに雇われる。「鉢かぶり」と綽名される。

ある夜仕事が済んでから、借りた古三味線を弾いて唄を歌っていると、その家の若息子が壁の破れ目から覗いて一目惚れする〔鉢が取れない、つまり女性の顔が見えないのに青年が恋をする点、「鉢かづき」の矛盾を解決していない〕。恋患い。

村中の若い娘が若息子に茶を飲ませることになる。だれの茶も飲まない。最後に鉢かぶりの番になる。若息子は飲む。

娘たちは皆嘲笑する。鉢かぶりは風呂に入るよう勧められ、自分のような者がこうした大家の嫁になるなんて

もったいない、と泣く〔自発性無し〕と、鉢が落ちて、中から絹の見事な衣装が出て来る〔亡き母の援助〕。それを着て立派な嫁となる。――徳島県三好郡――

〔十六〕御伽草子の「花世の姫」(92)

ここでは「姥皮（うばかわ）」が簑しに用いられる。(93)その点、ＫＨＭ一七九「泉の傍の鵞鳥番の女」と同様である。

［粗筋］

駿河の国の栄えある長者和田豊後守（ぶんごのかみ）盛高夫妻には子がなかった。二人とも観世音菩薩を深く信仰。やがて北の方は観世音の御前から梅の花が一輪膝に飛んで来た夢を見る。懐妊し女児を出産。夫婦は「花世の姫」（珍しく固有名詞）と名付け、深く寵愛する。姫九歳の折母親は病死する。姫十三歳の折、父盛高は和田氏一門から強く勧められていやいやながら再婚。しかし、亡くなった妻とその間にできた姫のことばかり考え、新しい北の方を愛することはない。いよいよ美しく生い育った姫十四歳の折、盛高は、そろそろ娘の結婚相手を心懸けねば、と思い立ち、姫の母方の祖母に相談するため、家を留守にする。乳母や侍女、乳姉妹（乳母の娘）など姫を大切に思う女性たちに後を託して。

新しい北の方、すなわち姫の継母は、このままにしておいては殿がいよいよ自分を疎むだろう、今のうちに姫を始末しよう、と思い立ち、自分の乳母に相談する。北の方の乳母は、従弟に武士がいるので、これに頼んで姫君を

どこかに捨てさせればよい、と進言。北の方はまず姫君とその忠実な女性たちを、寂しいだろうからこちらへお遊びに、と自らのところへ招く。翌日、姫を守る三人の女性たちに向かい、姫君の身に不慮のことが起こるという夢を見たので、神仏詣でに行くよう、と出発させ、姫から遠ざける。そのあと、姫にこう言う。父上が祖母君の許に出掛けたというのは嘘で、最近通っている女をここへ連れて来て、あなたをよそへやってしまうことになっている。そのよその家へあなたを連れて行く案内の者がもう来ている、と。姫は、乳母たちに逢ってから、と拒むが、継母は、迎えの者が責め立てている、と応え、むりやり裏口へ。姫が携えることができたのは、観音経の経巻、数珠、櫛など僅かな品のみ。屋形の裏口には継母の乳母の従弟が待ち構えていて、姫を背負って、自分の家へ走り着く。そして粗末な衣装に着替えさせ、山の奥へ連れて行き、後戻りするな、と命じて去る。

姫はひたすら観世音菩薩に祈り、焚き火の光を見つけてそちらに行く。そこは人家ではなく岩屋〔＝岩窟を住居としたもの〕で、中にいたのは恐ろしい姿の山姥だった。しかし、山姥は心優しく迎え入れ、姫が自分の頼みを聞いて髪に潜むおぞましい虫どもを嫌がらずに始末してくれたのも恩に着て、夫となるひとが定まったら開けるように、と小袋を一つくれ、さらに、三粒食べると二十日は物を食べなくても力が落ちない、という「富士大菩薩の花米（はなよね）」なるものを食べさせる。別れにおよんで山姥は更に、自分が夏の暑さに脱ぎ捨てたという「姥衣（うばぎぬ）」を姫に纏わせ、途中まで送って、人里へ出る方法を教えてくれる〔魔力を持つ老女の援助〕。

無事に人里へ出ると、そこには中納言殿なる貴人の立派な邸がある。老婆姿でその門口に立っていると、親切な女が出て来て、寄る辺なさそうな老婆に同情し、ここで火焚き女になるよう勧める。姫は湯を沸かす手水釜（ちょうず）の傍らに寝て、朝は暗いうちから起きて釜の火を焚く暮らしとなる。

中納言殿には子息が三人あり、上の二人は既に結婚しており、未婚の末子は宰相殿という。宰相殿が正月の宴会

のあと春の夜の風情を愛でて邸内でそぞろ歩きをしていると、仄かな火影に、高貴な様子のなんとも麗しい乙女が長い髪を蒔絵の櫛で梳いているのを見掛ける。一旦はそこを引き揚げて寝所に入るが、乙女の面影が忘れられない。その明くる日の夜、同じ場所に行って眺めると、乙女は紺紙金泥（こんしこんでい）の経に水晶の数珠を差し添えて観音経を読誦（どくじゅ）している。宰相殿は近づいて、恋の告白をする。姫は最初のうち警戒し、かつ恥じらうが、気品と美貌を兼ね備えた貴公子が身分を明かし、想いを叶えて欲しい、と懇願するので、遂に共に契る。

宰相殿は数日通うが、邸内のここではそのうち人に怪しまれるだろう、と思案して、自分の乳母の家へ姫を連れて行く。乳母もその娘も姫の美しさに心打たれて喜ぶ。こうして宰相殿と姫君と忍び逢いは宰相殿の乳母の家で続けられる。

やがて宰相殿の母君が、末子もそろそろ年頃、よい姫君を、と言い出す。宰相殿の乳母は驚き、宰相殿には近頃通う女性がいる、と母君に漏らす。母君が驚き迷っていると、母君付きの老巧な侍女が、嫁較べをなさったらいかが、と助言する。

嫁較べの当日、姫は山姥にもらった小袋を開く。すると五色の玉が出て来て、この玉が金銀、綾錦、その他侍女の装束から男のための太刀、諸道具に至るまでさまざまの必要品に変化する。

こうして姫は天下晴れて宰相殿の素晴らしい嫁君として中納言殿一家に大切にされ、幸せな新婚生活に入る。

（このあとしばらくして、姫が夫に親許を明かし、更にこれまでの一部始終を語る。かくして継母とその乳母、乳母の従弟の武士の悪事が姫の父盛高にも知れ、悪人はそれぞれの末路を迎え、両家と姫に真心を尽くした人人は繁栄する）。

＊これに相当する日本民話は「姥皮(ばばかわ)」[94]である。ただし、こうした民話がかつて文人によって採録され、文人がそれを素材として物語に仕上げた、というより、御伽草子が本の形で民間に流布し、それが更に口承化された、と考えられる。文人が素材とした民話原型については不明。そうしたものがあったのだろう、最初から文人の創作だったのではあるまい、と論者が思っているだけのこと。

［粗筋］

金持ちの美しい娘。母が死に、父は後妻をもらう。子どもがたくさんできる。継母は娘を憎み、娘の乳母に、娘を家から出すよう言いつける。乳母は娘の父親に頼んで千両の金を付けて家を出すことにし、「ばばっ皮」というものもくれる。娘がこれを被ると、婆様の姿になる。〔乳母＝老女の援助〕。

ある町の大家に水仕女(みずしおんな)として雇われる。いつもばばっ皮を被って働き、風呂に入る時だけ脱ぐ。しかし最後に入るのでだれにも本当の姿は見られない。

ある夜ばばっ皮を脱いで風呂に入っているところを若旦那に見つけられる〔矛盾点の解決〕[95]。若旦那の恋患い。心配した旦那は占い師に占ってもらう。占い師は、この家に気に入った女がいるのだから、それと添わせれば、病気は治る、と占う。

上女子(かみおなご)[96]から水仕女まで一人づつ若旦那の部屋に行き、「薬でもお湯でもあがったらどうだいの」と言うことになる。若旦那はだれが来てもちょっと頭を上げるだけ。最後に水仕女の婆様の番。強制されて部屋へ〔自発性無し〕。若旦那はすぐ見破る。ばばっ皮を取ると、美しい娘になったので、嫁となり、幸せに暮らす。――新潟県見附市

＊日本民話の類話(97)では、援助者が女主人公に動物の皮――「びっき」（蝦蟇）の皮など――を与えることもあるが、女主人公の蛙などへの変身は山中で行き遭う鬼などの恐ろしい存在を回避するための一回限りで、人里に出て奉公する長者の家ではこれが姥皮として役立つのが普通。一つの道具が動物と老婆になるのに用いられるわけ。ただし、二つの道具、すなわち、被ると老婆に見える「どんざ着物」〔＝古綿や襤褸を入れて作った防寒用の刺し子着物〕と猫に変身する「猫の皮」の双方を女主人公がもらう例もあるが。

＊　＊　＊　＊　＊

締め括りとして〔十七〕〔十八〕〔十九〕でモティーフを考えてみる。

〔十七〕導入部

A. 女主人公は、実の父親から結婚を迫られて、父の許から逃亡する。

KHM三一「手無し娘」KHM31 Das Mädchen ohne Hände の類話で、女主人公が家からさまよい出る原因の一つがこれ。

「手無し娘」は一八一一年にハッセンプフルーク家の長女マリーエ（愛称ミー）から聴き取ったもの（初版の「手無し娘」の基）を、一八一三年カッセル南郊ニーダー・ツヴェーレン Niederzwehren 在住のカタリーナ・ドロテーア Katarina Dorothea（カッセルに野菜を売りに来ていた。仕立て屋フィーマン Viehmann という人物のおかみさんなので、「フィーメニン Viehmännin」とグリム兄弟にメモされている。多数の話を提供）の物語った話によって形を改め、一八一九年の第二版で発表した方が現在行われている。しかし、発端はマリーエの語り出しが残され、フィーメニンの提供した方は採用されなかった。後者は左のごとし。庶民であるフィーメニンの語りではあるが、どうも伝説的で、民話的ではないように思える。いかがなものか。

ある男が、実の娘を妻にしたい、と思い、娘がこれを拒むと、両手と両の乳房を切断し、白い下着一枚を纏わせたなり、世間へ追い出してしまう。

『五日物語（イル・ペンタメローネ）』第三日第二話「手を切り取られたペンタ」La Penta manomozza。

これは父娘相姦の変形である。ある王が妻に死なれると、美しい妹ペンタに欲情を燃やし、結婚を迫る。ペンタは、兄が、とりわけ魅力溢れる、と讃える両手を奴隷に切り落とさせて、それを兄の許に届けさせる。兄は激怒し、木の箱にペンタを閉じ込めて海に流す。

フェロー諸島[98]の「オスラの歌」Liede von Osla では、王は亡くなった王妃の衣装がぴったり合う女性としか結婚するつもりが無く、結局こうなる。

また、最初の妻の指環を嵌めることができる、あるいは同じ色の髪の毛（金髪）を持っている女性を探すことか

らこうなる話もある。

このような父娘相姦（その変形としては兄妹相姦[99]）のモティーフを導入部とする物語は中世ヨーロッパに広く語り伝えられたが、散文・韻文を問わず、全てその題名に人名・地名の固有名詞を含んでいる。人名・地名が事実に基づこうと基づくまいと、こうしたことは伝説的性格が強いことを示している。

「おふぁ一世[100]ノ生涯」Vita Offae primi、「コンスタンティノープルの麗しのエレーヌ」La Belle Hélène de Constantinople、「アンジュウ伯爵夫人（女伯）」La Comtesse d'Anjou、「ダキア王のお姫様のお話」Novella della figla del rey di Dacia、「ハンガリア王の物語」Historia del rey de Hungaria、「実の娘を娶ろうとしたハンガリア王アレクサンドルの話」di Alexandre, roy de Hongrie, qui voulut éponser sa fille、「コンスタンティウス皇帝の姫君の物語」La istoria de la filla de l'emperador Constanti といった具合。グリム兄弟編著『ドイツ伝説集』（略称DS）四八八「小犬のクヴェードル」*Deutsche Sagen* 488 Quedl, das Hündlein にも、神聖ローマ帝国皇帝・ドイツ王ハインリヒ三世が、あまりにも優雅だった息女マティルトに惚れ込んだ、で始まる小さな話がある。

もっとも、伝説の内容が民話の形を取ったり、民話の筋書きが地名・人名を附されて伝説として語られたりすることはしばしばである[101]。

さて、マックス・リュティ[102]の説くように、昔話〔＝民話〕はありとあらゆる題材をあつかうものであり[103]、世俗的モティーフも例外なく昔話の中で「昇華[104]」され、「物も人物もその個性的特質を失い、重量の無い、透明な図形となる[105]」。そして「昔話は、殺人や暴行、強奪、裏切り、誹謗、近親相姦、あるいは王女に求婚して失敗した多くの男たちの不幸な死などを、いささかも悲劇的調子を加えずに語ってきかせる[106]」。従って父親が実の娘に執着する不倫で陰鬱な恋も、その現実的な暗さ、淫らさをほとんど抜き取られている。ところで、不倫とか、自然に反すると

かいう見地を離れると、美しさでもすばらしい黄金髪を持っているという点でも、亡くなったお妃と全く同じである姫君を、父王が是非とも妻にしようと考えるのは無理なく受け取れる。まさに死につこうとしていやがうえにも神聖になった妻の遺言の条件を完全に満たす女性――たまたま実の娘ではあったが――を知った時、王はその女性と結婚することこそ亡き妻の嘉(よみ)すること、あるいは娘こそ亡き妻の甦り、いや、妻そのもの、と思い定めたのだ、とも言えよう。

B. 女主人公は、「塩のように好き」、あるいは「塩よりも好き」と父に答えて、激怒した父によって家から追い出される。

このように愛情を塩にたとえる表現は極めて簡明直截で民話にふさわしいし、塩をそのままの形で調味料として用いる文化圏[107]では共感されるであろう。ただし、導入部Aに較べれば遙かに軽いことは否めない。女主人公の父親の愚かさが目立つ。『リア王』でもそうなのだから、いたしかたのないことか。父親が次のように我が儘かつ単純なこともある。

「猫っ皮(キャットスキン)の冒険」（注「イングランド民話『蘭草頭巾(キャップ・オ・ラッシェズ)』Cap o' Rushes」参照）では女主人公である良家の令嬢が息子を欲しがっている父親に忌避されて家を出る。一八三七年の法改訂以前は不動産の限嗣相続（不動産は長子が相続する。直系に男子がいなければ傍系でも男子が相続する。相続できる爵位――従男爵(バロネット)以上――の相続も同様）が行われてきた英国ならではの設定。

〔十八〕豪奢な衣装・装身具などの運搬手段

① ＫＨＭ六五「千びき皮」では胡桃の殻に納めて身に付ける。これは初版でも決定版でも同じ。ちっぽけな胡桃の殻なんぞに入るかよ、という常識的反応は野暮の骨頂であって、このみごとな運搬手段を考案した、いつの時代、いずれの場所かの語り手に素直に脱帽、感服すればよろしかろう。余計な解釈は不要と思う。参考までに、そうした、無くてもがなの――あるいは、言ってもよいがなにもここまで、と微苦笑を禁じ得ない類の――解釈を一つ挙げておこう。

フリーデル・レンツ[108]は、例の三重ねの衣装を「宇宙の力を素材として織り成された、魂の三通りの外被」と断じ、次に胡桃の殻と人間の頭蓋とを結び付けた上で、「頭の中、思考する大脳の中に能力――かの三重ねの衣装――が封じ込められている。これらはいつの日か時至れば花開く定めなのである」と述べている[109]。どうにも大仰な pathetisch（パテーティシュ）表現である。ただし、それを割り引けば受け入れられないことはない。結局レンツは、衣装や黄金の諸品を運んで行くのは人間の脳だ、と主張しているのだから。さよう、論者も、まことにごもっとも、その通り、と思う。

② ペローの「驢馬皮（ボー・ダーヌ）」では大きな櫃に納める。この櫃は地の底を通って女主人公に随（つ）いて来る。そして妖精から女主人公がもらった杖を振ると、櫃が出現する。これは民話より一歩進んだ「合理的」解決法である。

③ ムゼーウスの「泉の水の精」では水の精がくれた林檎の形をした木製の香盒（こうごう）から願った通りの衣装・装身具が

出る。御伽草子の「鉢かづき」では頭に載せた〔木製の〕鉢（ただし、描写通りであれば、その中から落ちた手箱）から出る。双方とも出て来る品は膨大な量であって、香盒や鉢（あるいは手箱）の容積からは考えられないが、香盒も鉢（あるいは手箱）もこの世と異世界を繋ぐ一種の「門」なのである。こうした「門」を通じて必要な品品が馬車とそれを牽く駿馬たちといった巨大な物体に至るまで女主人公に支給される方法は、ノルウェー民話の「木のスカートのカーリ」でもデンマーク民話の「木っ端頭巾のメテ」でも用いられている。別に文人的発想ではないのである。なお「鉢かづき」にあっては、「世に重げなる」（＝非常に重そうな）手箱が姫の髪の上に置かれ、更に鉢が被せられるのだが、これではかわいそうに姫は行住坐臥、頭上の重みに苦しんだはず。作者の工夫が足りないのである。[10] ただし、作者はその後手箱の重さについても鉢の重さについても終始一貫言及することなくお茶を濁している。同じ御伽草子でも「花世の姫」では小箱から出た五色の玉が嫁較べに必要な膨大な品に変化する。これはみごとな設定である。

④　この点に工夫がほとんど無く、「蘭草頭巾（キャップ・オー・ラッシェズ）」のように女主人公が家を出た時に纏っていた美しい衣装のみ、というのもある。その上に蘭草頭巾をすっぽり被って見えないようにし、いざという時には外被を取ればよい、との設定である。これは「現実的」と申せぬこともないが、却って、洗濯はどうするの、といった卑俗な「現実的」視点に引き戻されかねない懼（おそ）れがある。こうした単純な設定は別にイングランドとは限らない。ＢＰによれば、

少女は苔やらなにやら森の中で見つかるものを縫い込んだ、あるとあらゆる種類の動物の皮でこしらえた外套を、きらきら輝く衣装の上にはおると、森の中へ逃げ込みました。

といった「千びき皮（アラライラオ）」の類話がある、とのこと。

豪奢な衣装・装身具については全く考えていない民話となると、いちいち挙げるまでもあるまい。

〔十九〕宴しの道具（アイテム）、あるいは……

女主人公は、その身につけた衣装、または変装用具に因んで綽名され、それがそのまま物語の題名にもなっていることがほとんど。

① 動物の皮

動物の皮を纏う場合、トルコの昔話では羊、ギリシアでは山羊、南マケドニアでは梟、大ロシアでは豚、ウクライナやリトアニアではおそろしく巨大な虱[11]、デンマークでは鳥、ドイツ北部のバルト海沿岸地方メックレンブルクでは鴉。つまり最後の二つの物語では羽衣[12]が用いられている。日本では蛙（「びっき」すなわち「蟇蛙（ひきがえる）」）が普通。しかし、老婆または醜い娘の皮を被るとそうした姿に見える、という話から類推すれば、動物の皮を纏うということは本来、中身はともかく少なくとも外見はその動物そっくりに変身する、ということだったのではあるまいか[13]。

オーベナウアー[14]は「この獣の外套というのは、大層ぴったり体に合う皮衣であるばかりでなく、獣に変える魔法の外套なのであり、千ぴき皮（アラライラオ）はつつましい灰かぶりの二代目というばかりではなく、実は獣なのである。いや、魔法使いとさえ言えるかも知れない[15]」と述べている。こうした解釈は往古の民間信仰に沿っており、本論で挙げた物語では具体的例証が示せないが、あるいは然らん。

変身は多分このように容易かつ直接的なものだったのであって、魔力に対する信仰の純粋さ強さが薄れ弱ってくるにつれて、だんだん難しくかつ回りくどくなって行く。技術的に洗練されて行く、とも表現できようか。二世紀ローマ帝政下に生きた北アフリカはマダウロスの人ルキウス・アプレイウス Lucius Apuleius（一二五―一八〇）の伝奇小説『変身譚』*Metamorphoses*、又の名『黄金の驢馬の話』De Asino Aureo には数多くの民間伝承が採り入れられているが、冒頭近く、主人公ルキウスおよびその寄寓先の邸の奥方（実は魔女）とがそれぞれ驢馬と梟に化けるためには、全身くまなく、[116]特殊な膏油（こうゆ）というか秘薬というか、そういうものを塗らねばならない。後者の場合には同時に呪文をも唱える。[117]

フォン・デア・ライエンはその著『ドイツの昔話』の中で二ページほどに亘って「千びき皮（アラライラオ）」に言及し、「すでにバビロニアのギルガメシュで証明されている、[118]動物の皮はその動物の力を皮の外套をまとう者に移し与える、という信仰と密接な関係がある」と示唆し、「それゆえこの『千びき皮（アラライラオ）』なる昔話のより古い幾つかのテキストにおいては、さまざまの魔力が〔この外套に〕賦与されていた、と思われる[119]」と記している。ただし、民話や民話を素材にした物語においていかなる魔力を発揮したのかについては、具体的に述べていない。本論で挙げた数数の話でも動物の皮は単に窶しに用いられただけで、フォン・デア・ライエンが指摘したような魔力の効果は見られない。民話の語り手や聴き手、民話を素材にした物語の作者もそうした効果を意識していたとは思えない。

② 毛皮の外套その他

ともあれ、〔十三〕の「牝熊（ロルサ）」で述べておいたように、女主人公がある種の動物になってしまうと、苦役に従事するというモティーフは成立し難い。

動物の皮を被っても動物にならないなら、つまり、そうした未開社会、あるいは太古の強力な民間信仰が薄れてしまうと、女主人公は単に、奇妙な動物の皮の外套を纏ったむさくるしい存在に身を窶すことになり、かくして人に侮られ、嫌われながら、最下級の労働にいたわしくも追い使われる、という筋書きができあがる。このモティーフが入ると、「牝熊（ロルサ）」型よりずっと話がおもしろくなる。汚い皮衣を脱ぎ捨てれば、輝かしい美女に戻れるのだから、苦役はさほど辛くなくなる（、と聴き手は考える）。野蛮な行為で虐待する主人の王、こき使う上役の料理番、こういった連中は、言わず語らずのうちに民話の聴き手、物語の読者から軽視され、実際にも主人の王は民話の語りの中で女主人公から揶揄される。――けだし、民話の聴き手、物語の読者にとって痛快この上ないことである。こうなると、窶しの道具（アイテム）はなにも動物の皮でなくてもよいわけで、老女の皮、ないし老女姿に見せる衣、蘭草の頭巾付き外套（フード・コート）、木片を綴り合わせた（あるいは、裂いた樹皮で編んだ）服、といった具合に、民話の語り手はさまざまな工夫を凝らし始める。

③　櫃その他（これは窶しの道具（アイテム）ではない）

木片を綴り合わせた（あるいは、裂いた樹皮で編んだ）服から、いっそ大きな木製の櫃の中に女主人公を隠してみたら、との着想が湧くと、この場合は窶しではないから、女主人公を幸せにするには別の解決策が考案される。木の櫃ではお姫様の運搬用具としてどうもちと粗末かな、と考えただれかが（不自然ながら）黄金でできた櫃にしてみたり、更には女主人公がすっぽり入れる巨大な銀の燭台とか黄金の角燈（ランタン）とかといったこれまた奇矯な思いつきに走ったりする。そうした人人の中のまただれかが、女主人公が動物の皮を被る話と女主人公が何かの中に入れられて運ばれる話とをくっつけて、「王女と黄金の牛」とでも題することのできる特異な物語をこしらえる。この物

語はイングランドで採録されている。[120] 王女は、自分と結婚しようとする父の許から、あらかじめ作らせておいた黄金の牛の中に入って逃げる。この牛は彼女が愛している王子のところへはるばる海を越えて送られるのである。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

以上で彷徨（さすら）いの姫君を主題とした民話と、そうした民話を基に文人たちがそれなりの感性と表現力を駆使して紡ぎ出した物語についての論者の考察を終わる。なお、ご面倒ではあろうが、注にもざっとお目を通して戴ければ幸いである。所論の典拠ばかりではなく、本文に記すにはあまりにもこちたき嫌いがあるが、さりとてむざむざ捨てるには惜しいことどもをそうした形で収録しているので。

注

(1) 『小公女』　フランシス・イライザ・ホジソン・バーネット作『小公女』Frances Eliza Hodgson Burnett: *A Little Princess*（1905）。

(2) 『家なき娘』　エクトル・アンリ・マロ作『家なき娘』Hector Henri Malot: *En famille*（1890）。原題は『家にて』（『家族の中で』）。日本では表題で通っている。

(3) 『オリヴァー・トゥイスト』　チャールズ・ディケンズ作『オリヴァー・トゥイスト』Charles Dickens: *Oliver Twist*（1838）。

(4) 『家なき子』　エクトル・アンリ・マロ作『家なき子』Hector Henri Malot: *Sans famille*（1878）。原題は『家なくして』（『家族がなくて』）。日本では表題で通っている。

(5) イングランドで「蔦草頭巾（キャプ・オ・ラッシェズ）（いぐさずきん）」Cap o'Rushes　スコットランド低地（ロウランド）では「蔦草外套（ラッシィコート）」Ruchiecoat などの類話がある。

(6) 洋の東西で人口に膾炙（かいしゃ）している　とは申すものの、東洋の最も東に位する日本にはあるのに、今のところ中国・朝鮮に類話が見当たらない。そんなわけはないのだが……。こんなおもしろいモティーフは少なくとも中国の文人によって「三言二拍」のごとき

稗史小説の種とされていてしかるべきなのだ。識者のご高教を俟つ。

ただし、次のような話型なら中国にも朝鮮にも存在する。

物乞いの夫婦が娘を三人持ち、やがて裕福な身分になる（最初から「裕福な役人」といった設定の場合もある）。父親が三人の娘に、今日あるのはお父様のお蔭、と言わせようとする。しかし、三女は、自分がこうした境涯なのは、自分に福徳が備わっているからだ、と言う。そこで、父親は三女を追い出す。三女は辛い暮らしをするが、やがて物心共に恵まれた身の上になる。一方、娘の両親は落ちぶれる。巡り会い。両親、特に父親の納得。

右が類話と言えようか。

(7)「シンデレラ」これについては論者の小論「シンデレラ物語論攷」（「人文学会雑誌」第四三巻第二号、平成二三・十一月）を参照のこと。

(8) アンティ・アールネ　Antti Aarne.　一八六七―一九二五年。ユーリウス及びカールレ・クローン Julius/Kaarle Krohn 父子の弟子。歴史学的及び地理学的な手法による比較民話学の継承者。民話話型索引の成立に多大な貢献をした。

(9) ＡＴＵでは「塩のように好き」Love Like Salt がプレヒストリイである流浪の姫君譚は九二三として五一〇Ｂとは全く別項目に立てられている　本格的「シンデレラ」研究の嚆矢というべき英国のマリアン・ロウルフ・コックスの著書『シンデレラ。シンデレラ、猫っ皮、蘭草頭巾の三五〇の類話』Marian Roalfe Cox: *Cinderella: Three Hundred and Forty-five Variants of Cinderella, Catskin and Cap o'Rushes, Abstracted and Tabulated.* David Nutt for the Folk-lore Society. London, 1893.（初出「民俗学会雑誌」三十一巻〈一八九二〉Publications of The Folk-lore Society ヘvol. XXXIヘ, 1892。本邦未訳）では、ＡＴ五一〇Ｂが二つの型に分けられている。すなわち、娘が父親の求愛を拒み、身を窶して家を出る方を「猫っ皮」型、父に対する愛を塩にたとえたため、家を追われる方を「蘭草頭巾」型としている。これも一つの遣り方であろう。

(10) 黄金の髪を持つ男　Goldener.　男性版シンデレラともいうべき民話の主人公。すばらしい黄金髪を隠して（皮を被って禿頭に見せ掛けたりする）そこここで下働きに甘んじているが、馬上槍試合など晴れの場で勇猛な美丈夫として活躍、王女と結婚する。もちろん黒髪の民族の民話の場合は髪の色が強調されはしない。トルコ民話「エメラルドの不死鳥（フェニックス）の物語」（小沢俊夫編／鈴木滿訳『世界の民話　中近東』、ぎょうせい、昭和五十二、所収）など参照。

(11) ハウプトマンのハンネレ　ゲールハルト・ハウプトマン（一八六二―一九四六）の戯曲『ハンネレの昇天』Gerhart Hauptmann: *Hannele Himmelfahrt.*（1893）の女主人公。

(12) テゲトフ　Tegethoff.　エルンスト・テゲトフ Ernst Tegethoff（一八九〇―?）。ドイツの口承文芸研究者。『アモールとプシケの

メルヒェン類型論攷』*Studien Zum Märchentyphus von Amor und Psyche*、『メルヒェン、笑い話および寓話』*Märchen, Schwänke und Fabeln* などの研究書、『フランスのメルヒェン』（「世界の民話」シリーズ）*Französische Märchen*（Die Märchen der Weltliteratur）の翻訳と序文など。

(13) 右の所論　ルツ・マッケンゼン編『ドイツ昔話辞典』Lutz Mackensen: *Handwörterbuch des deutschen Märchens*. 2Bde. Walter de Gruyter. 1920/33. 第一巻四八ページ。

(14)(15) 初版　初版第一部（一八一二）、第二部（一八一五）。邦訳。吉原高志・素子訳『初版　グリム童話集』全四巻、白水社、一九九七。「エーレンベルク手稿」Ölenberger Handschrift.「一八一〇年版」ともいうことがあるが、元来は刊本ではない。肉筆原稿四九話（ヤーコプの筆跡のもの二七話。ヴィルヘルムの筆跡のもの一四話。その他の筆跡のもの八話）から成る、メモ程度のメルヒェン収集ノート。やはり口承文芸収集に従事していたロマン派の作家クレメンス・ブレンターノ Clemens Brentano（一七七八―一八四二）が一八一〇年十月兄弟から借り受け、返却しないでいたのが、一八九三年ドイツ帝国エルザス州のエーレンベルク修道院から発見された。兄弟は別に筆写したものを手元に留めておいたので、ＫＨＭ初版出版に支障は生じなかった。

(16) 刊本。ヨーゼフ・レフツ編『グリム兄弟のメルヒェン　エルザスなるエーレンベルク修道院の手稿原典に拠る初稿』Herausgegeben von Joseph Lefftz: *Märchen der Brüder Grimm. Urfassung nach der Originalhandschrift der Abtei Ölenberg im Elsaß*. Carl Winters Universitätsbuchhandlung. Heidelberg 1927.

(17) ［構成］　第Ⅰ部：ヴィルヘルム・グリム筆／第Ⅱ部：ヤーコプ・グリム筆／第Ⅲ部：複数の情報提供者筆。いずれも通し番号無し。

(18) 邦訳。小澤俊夫訳「メルヒェン集―エーレンベルク稿―」、前川道介責任編集『ドイツロマン派全集　第十五巻　グリム兄弟』、国書刊行会、一九八九。

お姫様は毎晩王様の長靴を脱がせなくちゃなりません　乗馬をする者は、脚部内側が擦(こす)れて傷つくのを防ぐため、長靴で保護しなければならないが、一日長靴を履いていると、足が膨れるので、脱ぐのに苦労する。泥濘で汚れた主人の長靴を脱がせるのは通常下男のやる賤しい力仕事だった。

ドロテーア（愛称ドルトヒェン）・ヴィルト　Dorothea (Dortchen) Wild.　現ヘッセン州北部の大都市で、かつてヘッセン選帝侯国の首都だったカッセル Kassel の中心部の薬局「太陽薬舗（ツア・ゾンネ）」Zur Sonne の娘。後ヴィルヘルム・グリムの愛妻。優れたゲルマニストだったヘルマン・グリム他の母。

婚約者からもらった贈り物　die Geschenke, die sie von ihrem Bräutigam hatte.　結納の贈り物。「ブロイティガム」Bräutigam は古英語の「ブリードグマ」brydguma と同語源だが、これから派生した英語「ブライドグルーム」bridegroom には「花婿」「新郎」

の意しかない。しかし、ドイツ語 Bräutigam にはこの他に「男の婚約者」「男の許婚（いいなずけ）」の意もある。すなわち、女主人公は、父王に結婚を迫られる前に、どこかの（多分隣国の）王と婚約していたのである。二人が会ったのはほんの数回程度だったことであろう。しかし、女主人公は王に再会すると、愛しい自分の婚約者であることがすぐに分かり、一方相手の方は身を窶している姫を、汚らしい小娘だ、と思ったに過ぎず、美女に戻った姫を見ても、自分の花嫁になる女性だ、とはただちに確信できない。女主人公は相手に気づかせるために、彼からの贈り物を段階的に渡す。こうすることで、王の関心と物語の緊張はクレッシェンドで高まり、大団円へと盛り上がる。

(19) 黄金の指環、黄金の小さな糸車、黄金の小さな糸巻き枠　ein goldener Ring, ein golden〔es〕Spinnrädchen und ein goldenes Häspelchen.　指環は後掲注「結婚指環」で記したように婚礼に用いるための品だが、後の二つ、「糸車」Spinnrad と「糸巻き枠」Haspel は女性の象徴である。これらは糸車式糸紡ぎに用いられるが、より原始的な手紡ぎ用の「紡錘（つむ）」Spindel や「糸巻き棹」Spinnrocken, Kunkel でもかまわないところ。いや、むしろ女性の象徴としては「紡錘」「糸巻き棹」の方が一般的であろう。

(20) 例の三重ねの衣装はというと胡桃（くるみ）の殻にしまい込み　die drei Kleider aber tat sie in eine Nuß.　三着もの豪奢な衣装〔＝ドレス〕を小さい胡桃の殻に入れて携える、というのはいかにも昔話（メルヒェン）らしくて楽しい。

(21) 王様はいつもそれを娘っこの頭に投げつけるのでした　warf er ihn allemal ihm an den Kopf.　こうした王の粗野な行動は本来後の筋における何かの伏線でないとおかしいが。しかし、王に詰問された女主人公が皮肉の種にするくらいで終わる。初版第Ⅰ部七一「鼠っ皮の王女様」でもほぼ同様である。どちらでも語り手がモティーフを理解していないわけ。後掲注「王は粗野。なぜそうした設定か、これでは不明」参照のこと。

(22) パン入りスープ　Brotsuppe.　ドイツの各地方によりさまざまなレシピがある。基本的には焼いてから時間が経って固くなったパンを活用した素朴な雑炊。中近世、特に四旬節（精進期間）の折食べられた、とか。以下に作り方を、最も簡単なものとまずまず一般的なものと、二種挙げておく。いずれにせよ庶民にお馴染みの食べ物なのである。

① 〔分量の指示なし〕　ミッシュブロート Mischbrot〔ライ麦粉と小麦粉の混合パン〕を皮付きのまま刻み、水から煮る。焦げ付かないように掻き回して、どろりとした粥状にする。塩少量を加える。供する時にミルクかクリームを掛ける。〔論者としてはどうもぞっとしないが、このレシピの筆者は、小さい時お祖母ちゃんが作ってくれたこれが自分も弟も大好きだった、と附記している〕。

② 〔四人分〕　大きな玉葱一個と大蒜（にんにく）一房の皮を剥いて微塵切りにする。焼いてから時間が経って固くなったロッゲン・ミッシュブロート Roggenmischbrot〔ライ麦粉の混合量が五割より多く約八割を上限とするミッシュブロート〕一二五グラムを約一セ

ンチ角に刻む。大匙一杯のバターをフライパンに溶かし、刻んだ玉葱と大蒜を入れて透明になるまで炒める。火から下ろす。大匙二杯のバターを口の広い深鍋に溶かし、刻んだパンを入れ、満遍なくこんがりと炒める。次いで炒めておいた玉葱と大蒜を加える。一リットルの肉あるいは野菜の煮出汁（ブイヨン）を熱し、注意深く注ぐ。適宜塩胡椒し、ほんのちょっとだけ蒸らす。スープ皿に盛り分け、小口切りにした小葱を一束〔薬味兼彩りとして〕振り掛ける。

今日ではベーコンやソーセージなど加工肉がスープの身として用いられるのも普通。とりわけ、かつて豚を飼育している農家で晩秋に行われた豚の解体祭（シュラハトフェスト）Schlachtfest の際には、そうした時にだけ作られ、かつ日保（ひも）ちしない血入り腸詰め（ブルートヴルスト）や肝臓腸詰め（レーバーヴルスト）がこのスープに入れられた由。

(23) 結婚指環　Treuring. Trauring, Ehering のこと。婚約者が結納として女主人公に贈った品で、結婚式を挙げる際、結婚指環として用いるつもりだったのである。

(24) ボルテ／ポリーフカ著『ＫＨＭ注釈』Johannes Bolte/Georg Polívka: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm.* 略称ＢＰ（ベーペー）。ヨハンネス・ボルテとゲオルク・ポリーフカの共著によるＫＨＭの大部な注釈書。本邦未訳。

(25) ヨハンナ（愛称ジャネット）・ハッセンプフルーク（カッセル）Johanna (Jeanette) Hassenpflug (Kassel). カッセルはグリム兄弟が少年時代から約二五年に亘って住んだ（兄弟がマールブルク大学で学んだ期間は除く）ドイツ北西部ヘッセン選帝侯国の首都だった（注「ドロテーア（愛称ドルトヒェン）・ヴィルト」をも参照）。兄弟の妹（グリム家の長女）シャルロッテ・アマーリエ Charlotte Amalie（愛称ロッテ Lotte。後ハッセンプフルーク家の長男ルートヴィヒ Ludwig の妻となる）がハッセンプフルーク家の長女マリーエ Marie（愛称ミー Mie）と友だちだった縁で、同家の夫人およびその娘たちは兄弟に話を提供。

(26) 鼠の皮で作った衣装　ein Kleid von Mausehaut. こうした特殊な衣装を王女が突然要求し、家来がすぐに持参するのはどうしてか分からない。筋の欠落があろう。

(27) 王は粗野。なぜそうした設定か、これだけでは不明　類話である下オーストリア Niederösterreich の民話「箒投げ（ベーゼンヴルフ）、ブラシ投げ（ビュルステンヴルフ）、櫛投げ（カムヴルフ）」(Vernaleken Nr. 33 Besenwurf, Bürstenwurf, Kammwurf) からこの話の欠落部分が類推し得るので、以下にその粗筋を示す。

父親に結婚を迫られた娘アーデルハイトは、父親の許から逃れて下女としてある領主の許で奉公する。領主は粗野で、機嫌が悪い時、彼女に箒や、ブラシや、櫛を投げつける。舞踏会。美しい衣装を纏って本来の美女に戻ったアーデルハイトは、それとは分からないでいる主人の領主と踊る。名を訊かれる。一晩目：ベーゼンヴルフ出身のアーデルハイト Adelheid aus Besenwurf と申し

ます。二晩目：ビュルステンヴルフ出身のアーデルハイト Adelheid aus Bürstenwurf と申します。三晩目：カムヴルフ出身のアーデルハイト Adelheid aus Kammwurf と申します。領主は謎の美女に恋して病気になる。アーデルハイトは食べ物に、領主にもらった指環を忍ばせる。下女姿で呼び出され、指環の出所を訊かれ、美女に戻る。結婚。

こきつかわれ、乱暴な仕打ちを受けている女主人公が、晴れの場所で当の主人をおちょくるのだから、聴き手は胸がすく思いで、さぞかし笑ったことであろう。

(28) 本論〔七〕〔八〕〔九〕の三話をも参照のこと。

それから王様は優しくなりました　いわばたしなめられた形の「王様」が自分の粗野な行為を後悔した、というわけ。しかし、これでは現代の幼児教育には相応しいが、民話としては不適切である。前掲注「王は粗野。なぜそうした設定か、これだけでは不明」で説明したように、王の粗野な行動はちゃんと「落とし前」が付けられ、それが話の盛り上がりでもあるのだから。

(29) 指環の出所の説明はない　女主人公がこの王と舞踏をした折受け取った、とか、以前この王から婚約の徴として受け取った、とかの説明があってしかるべきなのだが……。

(30) 決定版＝第七版（一八五七）　ヤーコプとヴィルヘルムがともに生存していた最後の版。ヴィルヘルムが一八五九年に没すると以後改版はされなかった。この決定版の物語番号を「KHM番号」と言う。KHM65. Allerleirauh の邦訳。金田鬼一訳『完訳グリム童話集』（岩波書店、岩波文庫）七一番「千びき皮」。野村泫（ひろし）訳『完訳グリム童話集』（筑摩書房、ちくま文庫）六五番「千枚皮」など。

(31) 魔力を持っている、しかし極めて親切な老女　KHMにしばしば出るこのタイプの女性は「賢い女」weise Frau とはっきり呼ばれることが多い。古代ゲルマン人の巫女的存在が受け継がれたものと思われる。もっとも、文人の再話とおぼしきこの物語では夥しい言葉を費やして、そのくせことさら曖昧に描かれている。民話的にはっきり記せば、女主人公の誕生祝いに名付け親としてやって来た「賢い女」なのだが。

(32) 最上のお料理……お塩のように愛しております。　die beste Speise schmeckt mir nicht ohne Salz, darum habe ich den Vater so lieb wie Salz.

(33) それに私の愛は何とも較べられませぬ　und kann meine Liebe mit nichts vergleichen.『リア王』では最初コーディリアは、リア王に、孝心のほどを語ってみよ、と言われて Nothing, my lord.（「何も申し上げることはございません」）と答える。

(34) おまえはほんとに綺麗な子だね　Du bist ja schönes Kind.　BP第二巻。五二ページ。

(35) ちょいと虱（しらみ）を取っておくれ　力ある存在のこうした依頼を厭な顔をせずに果たすことによって、良い報酬を与えられる、という民

話にはしばしば登場するモティーフが、あまり適切ではないが、ふいと語られたのかも知れない。後述〔十三〕の「花世の姫」における姫と山姥の髪の虫のことも参照。

(36) イングランド民話「繭草頭巾（キャップ・オー・ラッシェズ）」Cap o' Rushes　ここでは、イーヴリン・カミラ・ガードン『州の民間伝承』二番「サフォーク」Eveline Camilla Gurdon. *County Folk-Lore*, printed extracts no. 2. *Suffolk* (Ipswich: Published for he Folk-Lore Society by D. Nutt, 1893)．ガードンの英語原典（http://www.pitt.edu/~dash/saltthtml#rushes）によった。A・W・T「サフォーク　覚え書きと疑問」A. W. T.. "Suffolk Notes and Queries"—「イプスウィッチ・ジャーナル」*Ipswich Journal*（1877）掲載記事—である。寄稿者A・W・Tによれば、その幼年時代老いた召使いが語ってくれた由。

サフォークはイングランド東部の州（州都イプスウィッチ）。北海に面しており、平坦な低地がほとんどのため、沼沢地（フェン）fen が多い。

(37) この類話は「サフォークのリア王」The Suffolk King Lear と呼ばれる。発端がウィリアム・シェイクスピアの悲劇『リア王』William Shakespeare: *King Lear*（一六〇五？-〇六？）と似ているからである。ただし、この種の物語の重要なキー・ワードである「塩のように好き」（英語 LOVE LIKE SALT）は『リア王』では使われていない。リア王の末娘コーディリアは、姉たちのように父におもねるのを恥じ、「娘としてそうあるべきようにちょうどきっかり（=それ以上でもなく以下でもなく）愛している」love exactly as a daughter should、という旨の返答をして相続権を奪われる（第一幕第一場）。リア王はジェフリイ・オブ・モンマス『英国王列伝』Galfridus Monemutensis: *Historia Regum Britanniae*（=Geoffrey of Monmouth: *History of the English Kings*）（一一三六頃には執筆終了か）に記されているブリテン王国時代の伝説的王である。この伝説に依拠して十六世紀末に、ジョン・ヒギンズ『王侯の鑑』John Higgins: *A Mirror for Magistraites*（1574）、エドマンド・スペンサーの詩『仙女王』Edmund Spenser: The Faerie Queene（1590）などが書かれ、作者未詳の劇『レイア王とその三人娘、ゴネリル、レーガン、コーデラの実録年代記』*History of King Leir and his three daughters, Goneril, Regan, Cordela* が上演された（出版一六〇五）。

ジョゼフ・ジェイコブズ編著『イングランド昔話集』Joseph Jacobs: *English Fairy Tales*.　ジョゼフ・ジェイコブズ（一八五四—一九一六）の生まれは英国領オーストラリアだが、最終的にはケンブリッジ大学で学んだ。民俗学に関心深く、イングランド民俗学会の会員となり、数人の先駆者の研究を基にイングランドの民話を集め、これを再話して、一八九〇年『イングランド昔話集』*English Fairy Tales* を、一八九四年『続イングランド民話集』*More English Fairy Tales* を出版した。「ジャックと豆の蔓（つる）」Jack and the Beanstalk、「三匹の子豚の物語」The Story of the Three Little Pigs、「ウィッティントンと猫」Whittington and His Cat など、今日日本でも知られているイングランドの昔話の大部分は、この二巻本に収められた八七編による。その大方が手軽に読め

る邦訳は以下の通り。河野一郎編訳『イギリス民話集』、岩波文庫、岩波書店、一九九一。

(38) サフォーク方言　darters (=daughters), he were (=was), they says (=say), they was (=were) など。

(39) イングランドにも動物の皮を纏う類話がある　イングランドにも「鼠っ皮(モゼハウド)」型、「千びき皮(アライヒキ)」型、「驢馬皮(ダンキン)」型のように動物の皮を纏う話が口承されていた。オリヴァー・ゴールドスミス著『ウェークフィールドの〔副〕牧師』(一七六六) Oliver Goldsmith: *The Vicar of Wakefield* で、穏やかな「零落した紳士バーチェル氏」がもてなしの良いプリムローズ師の炉辺で〔副〕牧師の子どもたちに語って聞かせる幾つかの物語の中に「猫っ皮(キャットスキン)の冒険」*The Adventure of Catskin* がある。これは古い譚詩(バラッド)「さすらいのうら若き令嬢あるいは猫っ皮(キャットスキン)」*The Wandering young Gentlewoman or Catskin*、あるいは「猫っ皮の譽(ほま)れ」*Catskin's Garland* なる外題のものと同じく、息子を欲しがっている父親に忌避された大地主(スクワイア)の令嬢が、すばらしい衣装などを携えて家を出、猫の皮でこしらえた長衣(ローブ)を纏い、辿り着いた町のある騎士の館で下働きになり、そして……というもの。アイルランドにも類話「猫っ皮を着たお姫様」The Princess in Cat-skins があるが、この物語で女主人公が家を出る動機は亡き母の後夫である義理の父親に結婚を迫られたため（出典。パトリック・ケネディ『アイルランドの炉辺物語』Patrick Kennedy: *The Fireside Stories of Ireland*. Dublin: M'Glashan and Gill. 1870)。

(40) キャサリン・ブリッグズ／ルート・ミヒャエリス＝イエナ編『イングランドの民話』(「世界の民話」シリーズ)　Herausgegeben von Katharine Briggs und Ruth Michaelis — Jena: *Englische Volksmärchen*. 2. Binsenkappe. Die Märchen der Weltliteratur. Eugen Diederichs Verlag. Düsseldorf- Köln.

(41) 嬢(じょう)ちゃん　darters. daughters のサフォーク方言。前掲注「サフォーク方言」参照。

(42) わたし、新しいお肉がお塩を好きなくらい、それくらいお父様が好き　I love you as fresh meat loves salt.「フレッシュ・ミート」は「(加熱調理されていない) 生の肉」ではなく「(塩漬けにされていない、従って) 新鮮な肉」のこと。肉の保存には塩を用いる他ほとんど手段のなかった時代、新鮮な肉は家畜を解体してから僅かの期間しか口にできなかったが、古くなると異様な臭気を放ち、長いこと茹でてもしばしば噛み切れないほど固いことのあった、という塩漬け肉に較べどんなにか旨かったことだろう。しかしながら塩を全く入れずに料理されたとしたら、そりゃあ……。

(43) 藺草(いぐさ)　rushes.「灯心草」ともいう。湖沼、河川の水辺の湿地や浅い水中に自生（日本では栽培も)。極めてありふれた植物。一メートルほどに伸び、茎から採れる繊維は編んで筵(むしろ)状に利用できる（日本では花筵、畳表に加工)。またそのまま床に敷き詰めたりもした。白色の髄は羊などの獣脂から採った油を満たした灯明皿に入れて最も安価な灯心として用いられた。

(44) 頭巾(フード)の付いた外套みたいなもん　a cloak kind o', with a hood.　さよう、「藺草の頭巾(いぐさのずきん)」cap of rushes とはいうものの、頭から足

まで全身がほぼすっぽり隠れる外套状なのである。

(45) 薄粥（グルーアル） gruel.「グルーアル」または「グルール」とは病人や老人用の流動食である穀物粥、特に、薄く仕立てた「燕麦粥（オートミール）」（「オートミール」）oatmeal のこと。「燕麦粥（オートミール）」、または「ポリッジ」porridge はブリテン諸島では昔からありふれていて、現代では特に朝食に供される食品。基本的には（蒸し、潰し、乾燥させ、フレーク状にした）燕麦（オウツ）を嵩（かさ）にして四倍ほどの水（これくらいの比率だとどろりと濃い粥になる。一人分の目安は燕麦（オウツ）二五―三〇グラム）と混ぜて加熱、沸騰したら弱火にして、焦げつかないよう掻き回しながら数分煮るだけでできる。味付けは塩少少。食材が豊かな環境であれば、水の代わりにミルクを用いたり、バターを若干加えたり、食べる際に砂糖を掛けることもある。豊沃な耕牧地が多いイングランド（ハイランド）に較べ貧寒なスコットランドの、それも高地地方ではかつて常食だった。

(46)『イータロ・カルヴィーノによって記録され、再話されたイタリア昔話』 *Fiabe Italiane recolte e transcrite da Italo Calvino* (1956). 邦訳。イータロ・カルヴィーノ編著／河島英昭編訳『イタリア民話集』（岩波文庫、岩波書店、一九八五）上「塩みたいに好き」、下「木造りのマリーア」。イータロ・カルヴィーノ（一九二三―八五）はイタリアの国民的作家。グリム兄弟を指針として意図的にイタリアの昔話集を編み、自らの文体で再話した。

(47) クララ・シュトレーベ／ライダル・クリスチャンセン編訳『ノルウェーの民話』（「世界の民話」シリーズ） Herausgegeben und übertragen von Klara Stroebe und Reidar Th. Christiansen: *Norwegische Volksmärchen.* 27. Kari Holzrock. Die Märchen der Weltliteratur. ただしノルウェー語原典 Asbjørnsen og Moe: *Norske Folkeeventyr.* 19. Kari Trestakk. (http://runeberg.org/folkeven/106.html) をも参照した。

既邦訳としては小沢俊夫編／櫛田照男訳『世界の民話　北欧』（ぎょうせい、昭和五十一）収録「カーリ・ホルツロック」がある。アスビョルンセン／モー著／米原まり子訳『ノルウェーの民話』（青土社、一九九九）には三六編が収められているが、この話は無い。またこれは英訳からの重訳。ペーター・クリステン・アスビョルンセン／ヨーレン・モーによって集められ、再話された『ノルウェーの民話』（一八五二） *Norske Folkeeventyr,* samlede og fortalte af Peter Christen Asbjørnsen og Jørgen Moe. は有名。同書は一八四二―四四年に二巻の形で出版されたが、不完全な版で、二巻目はノートに過ぎなかった。なお、アスビョルンセン（一八一二―八五）およびモー（一八一三―八二）はノルウェー民話研究の優れた先覚者である。

(48) 体の大きな青い牡牛　ein großer blauer Stier.　ノルウェー語では 'en stor blå stut'。もとより自然界の牛の毛色に今日の意味での「青（あお）」があろうはずはない。異界に属することを仄めかしているのであろうか。それとも、古語で 'blå' は別の色合い（たとえば「漆黒（しっこく）」）を指していたのだろうか。デンマーク王ハーラル一世（在位九四〇―八五？）は Harald Blåtand とも呼ばれる。この異名

「ブラタン」は通常「青い歯」（英語なら Harald "Bluetooth"、すなわち「ハーラル青歯王」）と訳される。虫歯で歯が黒かったから、あるいは「ブルーベリー」を好んだから、との両説があるが、「浅黒い肌」の意が古語ではあった、との解釈も。日本でも、「あをうま」は上代では青みがかった淡灰色の毛の馬のことを、「あをくも」は淡い灰色の雲のことをいったように、「あを」の意味は現今とは異なっていた。後述のデンマーク民話「赤い仔牛」でも色について疑義がないわけではない。ただし、英国やフランスに「赤狐」「赤い黄金」などの用例はあり、日本の「赤」とずれるか。

(49) 蜂蜜酒　Met.　ノルウェー語では mjød。葡萄を収穫できない北欧では当然ワインは醸造されず、大麦・小麦を原料とするビールの他には蜂蜜酒が好んで醸造された。基本的には蜂蜜に二―三倍量の水を加え、蜂蜜に含まれている天然酵母ないし放置しているうちに偶然入った酵母の働きで醱酵させた。風土・季節にもよるが、数日あるいは一週間程度放置すると、アルコール分一二―一七％程度の酒ができるとか。

(50) トロル　Troll.　ノルウェー語では trollet。北欧の妖魔。神神と同等、あるいは場合によっては神神より強く賢明なこともあった太古の巨人が、キリスト教の普及とともに衰え、矮小化して、妖精や小人と同類視されるようにもなった、と思われ、その体は巨大なのから小さいのまでさまざまだし、容姿も定まらない。醜いことは確かである。

(51) 木のスカート　Holzrock.　ノルウェー語では「トレスタック」Trestakk。「スタック」stakk はジャンパー・スカートのような形状の婦人用民族衣装。もっとも上半身が全部覆われるわけではなく（挿絵画家によっては胸と肩も木片で隠しているのもある）、顔はもちろん剥き出しではあるが。挿絵のように木片を綴り合わせたものなら、木製の服でも動き易かろう。カーリは顔に煤でも塗り、ネッカチーフのような布で頭と顔の大部分を覆ったのであろうか。

(52) これこそ自分が王女のために尽くした全ての親切のお礼として王女にしてもらいたいたったひとつのことなのだ　多分この「青い」牡牛はもともとどこかの王か王子で、魔法に掛けられてそうした姿になっていたのであって、首を切り落として、皮を剥いでもらうことが、その魔法を解く唯一の方法だったのであろう。

(53) 鞍　Sattel.　ただ「鞍」としか記されていないが、これは婦人用の「横鞍」である。

(54) 白銀の縫い取りを施した馬衣を掛けられ　mit einer silbergestrickten Decke.　馬の全身を覆う豪奢な装飾外衣はヨーロッパ中世の富裕な貴人や騎士の乗用馬に用いられた。

(55) 馬勒　Zaum.　馬の頭部につけられる馬具である轡、面繋（額革・項革・喉革・頬革・鼻革から成る）、手綱などの総称。

(56) 生タール　Teer.　ノルウェー語では rätjære、すなわち独訳すれば Rohteer（「生タール」）とあるので、原典に従っておく。「タール」は、木材や石炭を乾留すると抽出される黒あるいは黒褐色の粘稠な液体。木炭は石炭の使用が一般的になる遙か前からヨーロッ

パでも特に都市住民の燃料とされていたが、「タール」は木炭製造の際の副産物として容易に得られた。そして防水・防腐剤として有用なので、中・近世ヨーロッパでは特に帆走木造船舶の船体や夥しい索具に塗布するため多量に使われ、きわめてありふれていた。KHM二一「灰かぶり」Aschenputtel で、舞踏会に来る謎の美女を逃がすまい、と王子が王宮の階段に塗らせ、やはり黄金の靴が片方それにくっついてしまう物質は「ペッヒ」Pech とあり、これがタール（ピッチ・瀝青（チャン））なのか、それとも樹脂なのか決しかねるが、この物語の「タール」は参考になろう。なお、「灰かぶり」の「ペッヒ」について詳しくは論者の小論「シンデレラ物語論攷」（「人文学会雑誌」第四三巻第二号）の注「樹脂　Pech.」を参照のこと。

(57) 龍騎兵　Dragoner.　本来は乗馬歩兵で、胸甲を着け、剣と騎銃（歩兵銃より銃身がずっと短い）が武器。戦闘部署に就くと普通下馬した。のちには他の騎兵と同様に用いられ、ドイツでは剣、騎銃の他に槍も装備した。一般に龍騎兵といえば、小粋で優美な軽騎兵などと較べると、無骨でがさつで乱暴な印象を受けるようだ。

(58) ……プシェミスル朝王位継承の際それを提示するよう計らった　詳しくはJ・K・A・ムゼーウス著／鈴木滿訳『沈黙の恋　ドイツ人の民話』（国書刊行会、平成十九）所収「リブッサ」を読まれたい。

(59) ラウリツ・ベトカー編／アナ・ケアゴー訳『デンマークの民話』（「世界の民話」シリーズ）　Herausgegeben von Laurits Bødker und übertragen von Anna Kjærgaard: *Dänische Volksmärchen*. 18. Mette Holzkäppchen. Die Märchen der Weltliteratur.

(60) オットー・シュピース編訳『トルコの民話』（「世界の民話」シリーズ）　Herausgegeben und übertragen von Otto Spies: *Türkische Volksmärchen*. 24. Das Fellmädchen. Die Märchen der Weltliteratur.

(61) 大王　Padischah.　イスラム教国の元首。ペルシア語・トルコ語。ここではどうやら「王様」くらいか。

(62) 王妃　Sultanin.　「スルタン」はイスラム教国の皇帝（特にオスマン・トルコ皇帝）・王。オスマン・トルコ皇帝がイスラム教の最高位教主を兼ねるまでは、名目上教主からスルタンに任命してもらった。Sultanin は「スルタン」Sultan のドイツ語女性形。トルコ語なら「スルタナ」。だから「皇后」「皇妃」に当たるのだが、ここではどうやら「王妃様」くらいか。

(63) 托鉢僧　Derwisch.　イスラム教の熱狂派修道僧。托鉢僧。ペルシア語のダルヴィーシュ（物乞い）から。継ぎはぎだらけの衣を纏う。神秘主義から出発し、十二世紀頃から神と神秘的に結び付く宗教上の指導者の下に一団の修行僧が集まり、神を念じつつ恍惚状態に入り、信徒たちを惹き付けた。深遠な知識を体得している、と庶民に容易に信じられたことであろう。

(64) 林檎　Apfel.　薔薇科林檎属の落葉喬木。およびその擬果（花の萼（うてな）の管状部が膨らんだもの）である「果実」。極めてありふれているが、それだけに人類との結びつきは強く、かつ広い。さまざまな民族の神話に登場。アラビアの民話では林檎は万病の薬とされる。しかし、媚薬として用いられた物語があるかどうかは、寡聞にして未詳。

(65) 病気になり　wurde krank.　産褥熱のため、出産後間もなく息を引き取る産婦はかつて少なくなかった。

(66) その綺麗な乙女　das schöne Mädchen.　原文のままだが、これはおかしい。

(67) お気に召した乙女がいればこれに黄金の毬を投げてその乙女と結婚する　dem Mädchen, das ihm gefiele, einen goldenen Ball zuwerfen und es heiraten.　こうした嫁選び、婿選びが現実にトルコにあったかどうかは未詳。ただし、『西遊記』第九回では陳光蕊（後の三蔵法師の父）が宰相殷開山の息女温嬌に綉毬（縫い取りをした毬）を投げられてその婿君になり、第九十三回では、玄奘三蔵自身が天竺国の姫君（実は月の玉兎が化けたもの）に見初められてやはり毬を投げ当てられる。唐代にはこうした習俗が存在した、と同書邦訳の一つの訳注（鳥居久靖・太田辰夫訳『西遊記』上下、平凡社、昭和三十五）にある。

(68) うんとこさ骨折って　Mit viel Mühe.　先に乙女が祝宴に出かけた折には簡単に脱げたようだが、はて。しかしながら物語におけるこのような撞着は『バートン版千夜一夜物語』でもそこここに見出され、バートンも注で指摘している。前出注「その綺麗な乙女」も同様。

(69) ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著『ドイツ人の民話』Johann Karl August Musäus: *Volksmärchen der Deutschen.*　ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス（一七三五―八七）は、ドイツ中部テューリンゲンの都市イエナに生まれ、同じくテューリンゲンの群小公国の一つザクセン＝ヴァイマル公国の首都ヴァイマルで古典語中高等学校教授として終わった文芸批評家・作家。『ドイツ人の民話』はドイツ語圏の民間に伝承された宗教伝説、伝説、昔話を素材とし、恣に諧謔を弄し、しばしば脱線し、十八世紀ヨーロッパのさまざまな事例を引き合いに出している大人向きの全十四話から成る軽妙な物語集。当時一挙に彼の名を高からしめ、その後も長くドイツの文壇に影響を及ぼした。十九世紀と二十世紀にはこれを基に無数の改作が誕生している。「泉の水の精」収録本は一七八二年から八六年に掛けて五分冊として出版されたうちの第二分冊（一七八三）。邦訳。鈴木滿訳『リューベツァールの物語　―ドイツ人の民話』（国書刊行会、平成十五）所収「泉の水の精」。なお『ドイツ人の民話』の鈴木滿訳は、『沈黙の恋　―ドイツ人の民話』（国書刊行会、平成十九）・『メレクザーラ　―ドイツ人の民話』（国書刊行会、平成十九）全三巻で完結。

(70) 強盗騎士　Raubritter.　「盗賊騎士」とも邦訳する。中世、特にドイツで、堅固な山城や河に臨む断崖上の砦に拠って、あらくれ男どもを率い、ここから出撃して、車馬の通る街道筋や舟運可能の河川での通商を妨げ、高額の通行料を要求したり、貨物を略奪したり、旅人のうち富裕な者がいれば、これを捕虜とし、身代金の支払いをその家族に強請したりした貴族たち。火砲が未発達だった時代には、彼らの城塞を攻略するのは難しかった。

(71) 代母　Pate.　女性の名付け親。キリスト教の幼児洗礼の際立ち会って、この児をキリスト教徒にする、という証人になる女性。母

親代わりになる権利と義務がある重要な存在。洗礼の贈り物をするのが一般。

(72) 伯爵の高慢な母親　物語が女主人公の幸せな結婚で終わらず、邪な姑が介在して更に波瀾が起こるのは、ＫＨＭ一一三「王様の子ども二人」、『ペンタメローネ［五日物語］』所収「日と月とターリア」（第五日第五話）のモティーフでもある。

(73) シャルル・ペロー作『過ぎし昔の物語あるいはお伽話、ならびに教訓』またの名『鵞鳥おばさんのお伽話』Charles Perrault: *Les Histoires ou Contes du temps passé. Avec Moralitez* (= *Moralités*) / *Contes de ma mère l' Oye* (= *l'Oie*). 韻文三編、散文八編が収められている教訓付き物語集。中・上流家庭の令嬢向け。一六九七年出版。邦訳。新倉朗子訳『完訳ペロー童話集』、岩波文庫、岩波書店、一九八四。後書きが資料としても優れている。他には、巌谷國士訳『完訳ペロー昔話集』、ちくま文庫、筑摩書房、二〇〇二。

(74) 「驢馬皮（ボー・ダース）」Peau d'Asne　ペローは、「巻き毛のリケ（リケ・ア・ラ・ウプ）」Riquet à la houppe を除き、当時フランス国内で口承されていた昔話を素材として、そのみごとな文体で再話したのである。「驢馬皮（ボー・ダース）」（新倉訳、巌谷訳「ろばの皮」）もペローのずっと以前からフランスで最も人気のあったお伽話の一つだった。このことは一五四七年以来さまざまな言及によって証拠立てられる。たとえばフランスの文人ボナヴァンテュール・デ・ペリエ（一五〇一？―四四）作『新しき気晴らしと楽しき雑談』Bonaventure des Périers: *Nouvelles récréations et joyeaux devis* に収録されているある物語は、いろいろなモティーフを恣に絡み合わせている。

ペルネット Pernette は「驢馬皮（ボー・ダース）」Peau d'Asne という綽名を付けられている。父親が、彼女を求婚者に嫌わせよう〔娘に対し近親相姦的欲望を抱いているからなのだろうか〕、と、いつも驢馬の皮を被っているよう命じたからである。母親〔継母なのか〕は一シェッフェル（三〇―三〇〇リットル）の大麦をぶちまけ、一粒一粒舌で選り分けるよう言いつける〔ＫＨＭ二一「灰かぶり」Aschenputtel の継母の難題に似ている〕。親切な蟻が彼女の代わりにその難題をやり遂げてくれる。

(75) 以上ＢＰ（第二巻五〇―五一ページ）による。

(76) 妖精（フェ） fée.　フランス語圏の昔話に出る女性の超自然的存在。ローマ神話の運命（ファートゥム） Fatum の三女神パルカエ Parcae（ギリシア神話のモイライ Moῖραι に相応）に由来する、と考えられる。妖精は、おおむね美しくて〔外見が〕若く、善良な人間に対しては親切。しかし、やはりペローの「眠れる森の美女」La belle au bois dormant の（招待されなかった）八人目の妖精（フェ）のように、ひがんで臍を曲げると意地悪にもなる。この妖精はまた〔外見が〕老いてもいる。

ジャンバッティスタ（＝ジョヴァン・バッティスタ）・バジーレ作『お話の中のお話（ペンタメローネ）（五日物語）』 Giambattista Basile: *Lo cunto de*

li cunti (*Il Pentamerone*)。一六三四―三六年出版。その八十有余年前に出版されたヴェネチア人ジョヴァンニ・フランチェスコ・ストラパローラ作『楽しき夜夜』（後掲注『楽しき夜夜』参照）とともに民話伝承の歴史にとってヨーロッパで最も重要な役割を果たしたイタリアの二つの説話（ノヴェラ Novella）集の一つ。純粋の口承民話や、元は書かれたもの（記載民話）でもすでに当時のイタリアの民間伝承になっていたのを、ナポリの文人バジーレ（一五七三?―一六三二）が書物とした。バジーレは多年ヴェネツィア共和国に軍人として勤務、共和国の海軍基地のあるクレタ、コルフー、モレアなどを転転としているから、これらの地でも多くの物語を耳嚢に蓄えたことであろう。後、生地ナポリに帰ってから行政に携わる一方、文筆生活でも名声を贏ちえた。その彼が失われ行くナポリ方言を惜しみ、ナポリ方言を用いて、Gian Alesio Abbattutis なる文字謎の筆名で、ナポリにおいて出版した『お話の中のお話〔＝物語の白眉〕、あるいはお子ども衆のお慰み』*Lo cunto de li cunti, ouero Lo trattenemiento de' peccerille* がこれ。枠物語形式で五日間に五十の物語が語られるので、『五日物語』*Il Pentamerone* がやがて通称となった。ちなみにこうした構成は彼の時代から更に三世紀を遡る、フィレンツェで人と成ったジョヴァンニ・ボッカッチョ Giovanni Boccaccio（一三一三―七五）が編んだ短編創作集『十日物語』Decamerone を範としたものであろう。

邦訳。杉山洋子・三宅忠明訳『ペンタメローネ［五日物語］』、大修館書店、一九九五。底本が明記されていないが、多分同書「まえがき」に記されている二種の英訳本のうち、巻末参考文献に挙げられている Norman M. Penzer, *The Pentamerone of Giambattista Basile*, 2 vols. From the Italian of Benedetto Croce of 1925, 1932; rpt: Westport, Connecticut, Greenwood Press, 1979 であろう。ノーマン・ペンザーが英訳の底本とした現代イタリア語の訳書は、ベネデット・クローチェ訳『五日物語、あるいはお話の中のお話』*Il Pentamerone ossia La fiaba delle fiabe*. Tradotta dall'antico dialetto napoletano e corredata di introduzione e note storiche di Benedetto Croce, Editori Laterza 1974, である。イータロ・カルヴィーノの序文付き。

プレッィオーサ　Preziosa　昔話の主人公は一般に固有名詞を持たない。この物語の類話では女主人公は綽名で呼ばれている。もっとも『お話の中のお話（五日物語）』所収の物語の主人公には全て名があるので、ここでプレッィオーサ（「プレッィオーソ」prezioso =「貴重な」「尊い」から）という固有名詞が出ても不思議はない。しかしながら、この名が「乙女」の意であるイタリア語の雅語プルチェラ pulcella と「牝熊」の意のオルサ orza の合成語 Puleciorsa に源があるのではないか、と考えると興味深い。つまり、熊の皮を纏った王女が、「熊娘」Puleciorsa と綽名されて、他国の王宮で辛い仕事をさせられる、といった昔話がもともとあったのではあるまいか。なにしろ、「牝熊」の女主人公プレッィオーサが王宮で王子を始め人人に愛され、苦役をしないでいるのは、熊であってみれば当然至極ではあるが、他の類話にはないことなのである。本来こうした女主人公は最も辛い卑役をあてがわれ、後に結婚することになる王ないし王子はもちろん、他の召使いからも綽名で呼ばれて賤しまれるという設定。だからこそ昔話

の聴き手から大いに同情され、結末で晴れて元の何不足ない身分に戻ると喜ばれるのだが。

なお前掲注「ジャンバッティスタ（＝ジョヴァン・バッティスタ）・バジーレ作『お話の中のお話（五日物語）』」で言及した邦訳の「牝熊」末尾の訳者の注には「父親が娘との結婚をせまるという話は古くからあって、『千夜一夜』、グリムなど枚挙にいとまない。（後略）」とある。しかしながら、底本を英訳とする大場正史訳『バートン版千夜一夜物語』（ちくま文庫、筑摩書房）には該当する話を発見できない。底本を仏訳とするマルドリュス版の邦訳『完訳千一夜物語』（岩波文庫、岩波書店）でも成果がない。しかるべき識者のご高教によれば、「父親が娘との結婚を迫る」といったモティーフは、エジプトで刊行されたアラビア語原典（謂わば「正典」）の収録話のインデクスであるハサン・エッ＝シャーミー編『千一夜物語モチーフ索引』Hasan M. El-Shami: *A Motif Index of the Thousand and One Nights*, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 2006 にも登録されていないし、バートン版、マルドリュス版など、「正典」に含まれない物語まで視野に収めているマルツォルフ／ファン・レーヴェン編『アラビアン・ナイト百科事典』Ulrich Marzolph & Richard van Leeuwen: *The Arabian Nights Encyclopedia*, 2vols, Santa Barbara: ABC-Clio, 2004 の附録「〔アールネ／トムプソン〕『民話の話型』対応国際的話型」International Tale-Types Corresponding to the System of *The Types of the Folktale* にも該当するような項目は見出せない由。

なお、双方重重承知の上で実の兄妹が相姦する話は、『バートン版千夜一夜物語』では「バクダッドの軽子と三人の女」の支話「最初の托鉢僧（カランダル）の話」（第十一夜～第十二夜）に、それと知らずに兄が妹（ただし腹違いではあるが）を娶る話は同書「オマル王とふたりの息子の物語」（第四十五夜～第百四十五夜）の本話部分（第六十八夜）にある。どちらもイスラーム教徒にとって忌まわしいことなのは言うまでもない。

(78) ちっちゃな木の枝　spruoccolo. 現代の標準イタリア語なら 'sprocco' を更に縮小形にするところ。「小さな木片」「小さい木の棒」とも訳せよう。

(79) ジョヴァンニ・フランチェスコ（＝ジャンフランチェスコ）・ストラパローラ　Giovanni Francesco（＝Gianfrancesco）Straparola. 一四八〇頃―一五五七年頃。カラヴァッジョ生まれ。ヴェネツィア共和国の文人。「ストラパローラ」（「しゃべくり屋」くらいの意）は作家としての綽名らしい。

(80) 『楽しき夜夜（レッピアチェヴォーリ・ノッティ）』 *Le piacevoli notti.* 一五五〇―五四年出版。この物語集はヴェネツイア近くのムラノ島に悪疫を逃れて避難した男女が十三夜に亘って七十五の物語をする枠物語の形態を採っており、その八十有余年後に出版されたナポリ人ジャンバッティスタ・バジーレ作『お話の中のお話（五日物語）』とともに民話伝承の歴史にとってヨーロッパで最も重要な役割を果たしたイタリアの二つの説話（ノヴェラ Novella）集の一つ。邦訳は無い。

(81) 衣装櫃（アルマディオ） armadio. 現代イタリア語であれば「衣装箪笥」、あるいは造りつけの「衣装戸棚」。ここでは移動できる大型の箱。本来は「武器」arma を収納した家具であるラテン語「アルマーリウム」armarium から。英訳（注［粗筋］に挙げた書名参照）では cassone, or clotheschest となっているので、「衣装櫃」とした。中世ヨーロッパでは王侯貴族であっても衣装を収納するためには、大型で蓋付きの、錠が下りる箱を使用した（日本では「唐櫃（からびつ）」）。「木製」とは明記されていないが、移動の便、通気性などを考えれば、木製が一般である（日本の唐櫃は多く檜の白木造り）ので、本論中で「木製の箱」とした。もとより箱の角角、蓋の周囲、開口部の縁は補強のため真鍮、青銅などの金属が貼られていたであろうが。

(82) ＡＴＵ五一〇＊「櫃の中の姫君」 ATU510* The Princess in the Chest. ［粗筋］ 鰥夫（やもめ）となった王が実の娘と結婚しようとする。彼女は魔法の黄金の櫃（〔あるいは〕黄金の〔巨大な〕角燈（ランタン））を自分に与えるよう父に要求。結婚式の当日、彼女はその櫃〔あるいは角燈〕の中に身を隠す。父王はその櫃をある王子に売る（〔あるいは〕櫃は海に投げ込まれ、ある王子が海でそれを見つけ、家に持ち帰る）。姫はこっそり櫃の外に出て、王子の食べ物を食べる。その際王子は姫を発見、恋に陥る。

　王子の婚約者（フィアンセ）が姫を発見、追い出す。王子は恋患いになる。〔身を窶した〕姫は彼に食べ物を運ぶが、この中に王子がくれた指環を隠しておく。王子は〔その食べ物をこしらえた者を呼べ、と命じて〕姫を発見、彼女と結婚する。

(83) ［粗筋］ ここでは *The Facetious Nights of Straparola*, translated by W. G. Waters (London: privately printed for members of the Society of Bibliophiles, 1901) (http://www.pitt.edu/~dash/straparola01.4html) によった。ただし、イタリア語原典 Doralice (Notte Prima, Favola IV) — Strapalora : *Le piacevoli notti*, 1550 (http://www.paroledautore.net/fiabe/classiche/strapalora/doralice.htm) をも参照した。

(84) 匙一杯か一杯足らずを服用するだけで他に何も食べずとも長いこと生きていられる効能を持つある種の水薬（リクウォーレ） un certo liquore di tanta virtù, che chiunque ne prendeva un cucchiaio, anche piccolo, poteva sopravvivere molto tempo senza mangiare. 御伽草子「花世の姫」でも、山姥が姫に、三粒食べるだけで二十日は物を食べなくてもよい、という「富士大菩薩の花米（はなよね）」なる物をくれる。

(85) このすばらしい衣装櫃が大層気に入ってこれを買い取り　錠が下りていて中に何が入っているか分からないままの購入である。こうした奇妙な売り買いのモティーフは『バートン版千夜一夜物語』の「バグダッドの漁師ハリファー」（第八三一夜～第八四五夜）にも出て来る。主人公はすっかんぴんの漁師なのに、たまたまもらったディナール金貨百一枚で競り売りされている大きな箱を買い取る。

(86) 御伽草子　狭義には享保（一七一六―三六）頃大坂の書肆渋川清右衛門の刊行した「文正（ぶんしやう）さうし」、「鉢かづき」以下二三編を言う。広義には室町時代（一三九二―一五七三）を中心にして行われた短編小説の総称。多くは作者未詳。時代思想と世相を如実に反映

した空想的・教訓的物語。

(87)「鉢かづき」「日本古典文学大系」三八『御伽草子』、岩波書店、昭和四十三。

(88)〔木製の〕鉢　蕎麦や饂飩を捏ねる大きな（たとえば「尺八」―口径一尺八寸―の）木鉢を考えればよいだろう。

(89)水仕女（みずしめ）　水を汲んだり、沸かしたりする下級の女性の召使い。

(90)宰相殿は初めて姫の全貌を見る　「宰相殿驚き給ひて、姫君の御顔をつくつくと見給へば、十五夜の月の雲間を出づるにことならず。髪のかかり、姿形何にたとへんかたもなし。若君うれしく思し召し（後略）」。

(91)「鉢かつぎ」　関敬吾編著『日本昔話大成』（角川書店、昭和五十三）第五巻二一〇「鉢かつぎ」。

(92)「花世の姫」　島津久基編／市古貞次校訂『お伽草子』正続、岩波文庫、岩波書店、一九三六、および、http://suwa3.web.fc2.com/enkan/minwa/cinderella/10_1.html の和訳文による。

(93)ここでは「姥皮（うばかわ）」が窶しに用いられる　奈良絵本として残っている御伽草子の「うばかは」でも同じ。ただし、この物語では参籠した女主人公が観世音菩薩から授かる「姥皮」は「木の皮」のごときものと記されている。老女に変身させる道具（アイテム）が木の皮みたいな代物なのである。ＫＨＭでは実際に人間の皮で、日本でも「ばばっ皮」「おっぱの皮」「んばか」と同様に「皮」である。それでも〔麻や亜麻で製した粗末な〕着物（「姥衣（うばぎぬ）」「おんばのきん」〔これは「おんばの絹」と訛伝されているようだが、「おんばの衣（きぬ）」に違いない〕であることも少なくない。そしてここでは更に植物その物に近く、木の外被の類似品となり、北欧の類話の道具（アイテム）と接近しているのはおもしろい。

以下に原文の一部（横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』、第二巻、角川書店、昭和四十九、五五一ページ）を示す。

三夜こもりし、あかつき、かとに、こんしきの、ひかりをはなち、かたしけなくも、くわんせをんほさつ、ひめのまくらかみに、
たたせ給ひ
なんちかはゝ、つねにあゆみをはこひて、ひめか身のゆくすゑを、いのりしに、かやうに、まよふことの、ふひんさよ、なんちかすかた、世にたくゐなくうつくしけれは、いつくにてか、人のうはいとるへし、これをきよとて、木のかわ（ママ）の、やうなるものを、
あたへ給ふ
これは、うはかはと、いふものなり、これをきて、わかをしゆるところへ、ゆくへし、あふみのくに、さゝきのみんふ、たかきよ、もんせんに、たつへし、とをしへたまひて、かきけすやうに、うせ給ふ
〔三夜籠りし暁、門に金色の光を放ち、忝なくも観世音菩薩、姫の枕上に立たせ給ひ、「汝が母、常に歩みを運びて、姫が身の行く

末を祈りしに、かやうに迷ふことの不憫さよ。汝が姿、世に類なく美しければ、いづくにてか、人の奪ひ取るべし。これを着よ」とて、木の皮のやうなる物を与え給ふ。「これは姥皮といふ物なり。これを着て、我が教ゆる所へ行くべし。近江国、佐々木民部高清門前に立つべし」と教へ給ひて、掻き消すやうに失せ給ふ。

日本民話の類話にはこんなものもある。

(95)(94) 「姥皮」　関敬吾編著『日本昔話大成』第五巻二〇九「姥皮」。

矛盾点の解決　民話を口承した語り手が（おそらく聴き手も参加して）、話の欠落、訛伝、矛盾に気づき、これを訂正することはあり得る。ヴァルター・アンダーゾーンのいわゆる「民話の自己訂正の法則」Walter Anderson: das Gesetz der Selbstberichtigung des Volksmärchens.

(99)(98)(97)(96) 上女子　上女中。主人およびその家族の身の回りの世話をする、容姿も好く、一通りの作法も心得ている女性の召使い。

日本民話の類話　関『日本昔話大成』第五巻一七四―一八七ページ。

フェロー諸島　ノルウェー海に浮かぶデンマーク領の島。

その変形としては兄妹相姦　ロシア民話「地下の国へ行った皇女様」(*Russische Volksmärchen.* 9. Die Zarentochter im unterirdischen Reich. Die Märchen der Weltliteratur.) が挙げられよう。かねて自分たち両親が死んだら妹を妃にするように、と父であるロシア皇帝に命じられていた皇子が、やがてこの遺言を遵守しようとするので、皇女が地下の国へ逃げ込むのが発端。

ただしこのモティーフはあるいは古代には稀ではなかった兄妹（姉弟）婚という習俗の残滓とも思われる。兄妹（姉弟）婚は日本の伝承（「土佐国の妹兄（いもせ）、知らざる島に行きて住む語（ものがたり）」――『今昔物語集』本朝世俗部巻二十六第十）にも痕跡を残しているばかりでなく、大洪水後兄妹（姉弟）ただ二人しか生存できなかった時、その後の人間繁殖の解決策として取られていることもある。古代エジプト王家にあってはむしろ伝統だった。神聖な王（ファラオ）の純正な血統を保つためと言われる。マケドニア系ギリシア人で、エジプト人ではないプトレマイオス朝でも（形式的だった、と思われるが）王家の兄妹・姉弟同士の結婚が踏襲された。このような二親等、または三親等（伯父・叔父―姪、伯母・叔母―甥）間の通婚はかつて日本の皇室においても奈良時代前後多く行なわれた。近年になっても諸地方、特に東北地方では叔父姪添いが見られたそうである（「日本の皇室」以下は、柳田國男監修『民俗学辞典』第三三版、東京堂出版、昭和四二、一六八ページによる）。ヨーロッパでも王侯間の政略的見地――特に所領相続の問題――から、三親等程度の近親婚が企画されたことが再再あり、その場合は教皇の特別免許によって適法とされた。近世イスパニア王国におけるハプスブルク朝の近親結婚は有名。

(100) おふぁ一世　オファ一世はシュレスヴィヒ地方を占有していた古アンゲル族の英雄王。

(101) 伝説の内容が民話の形を取ったり、民話の筋書きが地名・人名を附されて伝説として語られたりする　そのどちらに該当するのか論者には決め手が見つからないが、一例としてDS四八六「皇帝ハインリヒ三世の伝説」DS486 Sage von Kaiser Heinrich III. とKHM二九「黄金の毛が三本生えている悪魔」KHM29 Der Teufel mit den drei goldenen Haaren の相関関係が挙げられよう。

(102) マックス・リュティ　Max Lüthi.　一九〇一―九一年。スイスの文芸学者。二十世紀半ば以降口承文芸（民話と伝説）の基礎的研究といえる業績を発表。これらは研究者の間でいまだに評価が高い。チューリヒ大学は一九六八年彼のために「ヨーロッパ民間伝承文芸」Europäische Volksliteratur なる講座を開設、教授として迎えた。一九七六年退任するまで彼はこの地位に留まった。

(103) 昔話はありとあらゆる題材をあつかう　含世界性 Welthaltigkeit 。Max Lüthi: *Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen.* 3. Auflage. Francke Verlag. 1968. 六三ページ。

(104) 昇華　Sublimation.　夾雑物を削ぎ落とされて清らかに高められること。

(105) 物も人物……図形となる　マックス・リュティ著／小澤俊夫訳『ヨーロッパの昔話―その形式と本質―』（岩崎美術社、一九六九）一二〇ページ。

(106) 昔話は……きかせる　前掲書一二九―一三〇ページ。

(107) 塩をそのままの形で調味料として用いる文化圏　「ヨーロッパでは塩味はすべて食塩そのものの裸の塩味である。日本の塩味は穀醤（みそ、醤油）、ナッツ〔塩辛と鮓との中間的存在。秋田地方の用語。低食塩濃度の乳酸食文化の所産〕、漬物、塩干物などに見るよ

うな馴れた塩味―。（中略）穀醤を主体とする馴れた食塩の文化を共有するのは、中国大陸から朝鮮半島、日本列島に至る地域である。また東南アジアの一角、つまりベトナムからビルマの山間部にかけてはニョクマム（ベトナム）のような魚醤文化圏を形成しているが、これも馴れた食塩の文化圏に含めてよい。（中略）カレー文化圏、ココナツミルク文化圏は、食塩文化的にみれば、裸の食塩文化圏に属する」（近藤弘著『日本人の味覚』、中公新書、中央公論社、昭和五十二、九五ページ）。古代ローマの食生活では「ガルム」のごとき魚醤が重要な役割を務めたし、現代のヨーロッパでは醤油の使用も稀ではないが、中近世ヨーロッパの場合まずこの所説は妥当であろう。

(108) フリーデル・レンツ　Friedel Lenz.　一九〇一―七〇年。人間学的なメルヒェンの語り手にしてメルヒェン研究者。キリスト教共住団牧師にして著述家エドゥアルト・レンツ Eduard Lenz（一九〇一―四五）の妻。

(109) ……と述べている　Fridel Lenz. *Bildsprache der Märchen.* 2. Auflage. Verlag Urachhaus, 1972. 一八一ページ。

(110) ……お茶を濁している「鉢かづき」の筋の運びの不自然さについては〔十四〕で幾つか指摘しておいたが、これもその一つだし、論者があえて触れなかった事項はまだまだある。

(111) おそろしく巨大な虱　ＫＨＭの断片の一つ、ＫＨＭ二一二「虱」Die Laus（金田訳二三五「しらみ」）では、王女の髪の毛に発見された虱が、そうした清潔な場所にいたのはまことに珍しい、との理由で、大切に飼われているうち、仔牛のように巨大になる。これが死ぬと、皮が剥がされ鞣（な）めされて王女の衣服になる。そしてそれが何の皮か当てた者が王女の婿君になれるのだが、さて……。同一のモティーフは『お話の中のお話（ロー・クントゥ・ディリ・クンティ）（五日物語（イル・ペンタメローネ））』第一日第五話「蚤（のみ）」La pulce にも使われている。

(112) 羽衣　北欧神話の大神オーディン（ドイツ語ヴォーダン Wodan）の侍女たちであるヴァルキュリエ（ドイツ語ヴァルキューレ Walküre）は白鳥の衣を纏って飛翔する。また、オーディンの妃フリッグの鷹の羽衣は纏う者を鷹に変える。女神フライアも羽衣を持っている。巨人チアシも「鷲の衣」なるものの所有者である。

(113) 動物の皮を纏うということは本来、中身はともかく少なくとも外見はその動物そっくりに変身する、ということ　民間伝承でも伝説的色彩が濃い場合は、動物の皮を纏うと中身もその動物になってしまう。類例は数挙げられよう。ただし、これは纏った者にとって甚だ不便である。人性を保有したまま外形だけ動物になるのでないとさまざまの障害があるはず。

中国の場合。たとえば宋の李昉（りほう）等編『太平廣記』（全十冊、中華書局、第七次印刷、二〇〇三）第四百二十六「峡口道士」。天に君臨する上帝〔＝玉帝〕に罪を得て人界に流謫（るたく）された者が千人の人間を喰えば天に帰れる〔上帝からそういう命を受けたのである〕、とあって道士〔道教の修行者〕の姿で横行、しかるべき時に虎の皮を被り、たちまち虎に変わって人間を喰う。しかし虎に変わらないと、人間は喰えない。それゆえ、この皮を取られて困惑する話。また同書第四百三十「王居貞」。長安における科挙の最終試験

に落ちた官吏候補生王居貞は故郷に帰る途次、一人の道士〔これは本来虎なのだが〕と道連れになり、同宿した際一時その皮衣を奪う。そして、それを纏えば夜の間に五百里〔二〇〇キロほどか。ただしほんの目安〕馳駆することができる、と聞き、百余里〔四〇キロ余か。ただしほんの目安〕離れた自分の家にちょっと帰ってみたい、と思い、皮衣を纏う。家に着くと夜更けのこととて門が閉じられている。しかし、門の外に豚が一頭いる。これを捕らえて喰い、再び道士の許に戻り、皮を返す。後日〔寄り道をしていたのだろうか。二日もあれば普通の男の足で楽に到着できただろうが……〕王が帰宅すると、家人から、次男が夜更けに家の外に出て、虎に喰われた、と告げられる。時日を計ってみると、自分が虎の皮を着て、我が家の門前で豚を喰った、その夜のことだった。

もとより中国には、虎の姿になっても幽かに人性を留めている話〔中島敦「山月記」の素材他〕があるが、それはここではお預かりとする。

北欧でも同様か。たとえばサガの一つ「ヴォルスンガ・サガ」〔＝ヴォルスング家の物語〕ではかくのごとし。シグムントは実の妹シグニイとの間にもうけた息子シンフィヨトリと森の中を歩いていて、一軒の家を見つける。中には二人の男が眠っており、壁には二枚の狼の毛皮が吊されている。この二人は魔法を掛けられた者たちで、九夜の間は人狼（ドイツ語でいう「ヴェーアヴォルフ」Werwolf）でおらねばならず、十日目の夜だけ人間に戻れるのだった。シグムントとシンフィヨトリが何も知らずにこの毛皮を纏うと、彼らはたちまち狼となり、二人の男を喰い殺したばかりでなく、多くの人間に危害を加え、遂にはお互いに噛み合いさえした。やがて〔十日目に、であろう〕狼の皮が脱げ落ちると、彼らはそれを火に投じて燃やしてしまう（V・グレンベック著／山室静訳『北欧神話と伝説』、新潮社、昭和四十六、二五四ページ。V・G・ネッケル／H・クーン／A・ホルツマルク／J・ヘルガソン／谷口幸男訳『エッダ――古代北欧歌謡集』、新潮社、昭和四十八、一〇九ページ）。

(114) オーベナウアー　カール・ユストゥス・オーベナウアー Karl Justus Obenauer（一八八八―一九七三）。ドイツのゲルマン学者。ボン大学教授。国家社会主義ドイツ労働者党（NSDAP。ナチス）に早くから参加。

(115) ……言えるかも知れない　『メルヒェン―創作と解釈』*Das Märchen. Dichtung und Deutung*. Vittorio Klostermann. 1959. 二六〇ページ以降。

(116) 後者の場合には同時に呪文をも唱える　泉鏡花の短編「湯女の魂」（鏡花全集第五巻、岩波書店、第二刷、昭和四十九）で妖しい女が大蝙蝠になる方法がこれと全く同じである。こうした一致についてはどう考えたらよいものか。

(117) フォン・デア・ライエン　フリードリヒ・フォン・デア・ライエン Friedrich von der Leyen（一八七三―一九六八）。ドイツの中世ゲルマン史家。民俗学者。メルヒェン研究家。「世界の民話シリーズ」Die Märchen der Weltliteratur の創始者の一人にして編

者。

(118) バビロニアのギルガメシュで証明されている　もとよりその成立が紀元前二六〇〇年頃に遡るという古代メソポタミアの叙事詩「ギルガメシュ」を指しているのだが、具体的にはそのどんな内容を示唆しているのか、論者には分からない。ギルガメシュの莫逆の友となる野人エンキドゥに纏わる何かか。識者のご高教を乞う。

(119) ……と思われる　フリードリヒ・フォン・デア・ライエン『ドイツの昔話』Friedrich von der Leyen: *Das deutsche Märchen.* Eugen Diederichs Verlag. 1964. 一一三ページ。

(120) この物語はイングランドで採録されている　キャサリン・M・ブリッグズ『英語によるブリテン諸島の民話の事典』Katharina M. Briggs: *A Dictionary of British Folk-tales in the English Language.* 4 Vols. Routledge & Kegan Paul. 1970.

結びに一言。

本論は三十年以上も前に、「人文学会雑誌」第九巻第四号に書いた「『千びき皮』管見」を多少下敷きにした。もっとも旧小論は、なるほど口承文芸論の立場からではあるにしても、ＫＨＭ六五「千びき皮」の文芸学的な鑑賞に傾斜していたが、今回はそうした点には触れなかったし、新たな資料、新たな解釈を加えての大幅な書き直しである。

注「プレツィオーサ」で記した、「父が娘に結婚を迫る」というモティーフが『千夜一夜物語』には見出し得ないのでないか、との言及については、東京大学大学院総合文化研究科杉田英明教授に両度に亘り書面で資料とともにご高教をたまわった。まことに忝ない学恩である。

ノルウェー民話「木のスカートのカーリ」（カーリ・トレスタック）について、東海大学文学部北欧学科福井信子教授から数回に亘りご懇篤なご示教を戴いた。お蔭様でノルウェー語原典にも接することができたし、女主人公

の窶しの衣装（木片を綴り合わせた物）にも納得が行き、こんなに嬉しいことはない。またデンマーク民話「木っ端頭巾のメテ」（メテ・トレヘテ）についても同じくすこぶるお世話になった。福井先生、この場を藉り、改めて深く御礼申し上げます。

イタリア昔話の研究者にして数数のご翻訳のある剣持弘子先生から、（小論「シンデレラ物語論攷」に再再記された）「竈猫」Cenerentola の片仮名表記の不適切な長音符号についてありがたいご教示（アクセントは re にある）を拝受した。「チェネレントラ」と訂正、関連注記も改める。

また、同論攷の末尾で、女主人公が「暖を取るために灰だらけになる」ことと「暑い気候が生んだであろうサンダル型履き物」と結び付けにくいのではないか、と筆を滑らせたが、おさんどんであってみれば煮炊きの場合寒暑に関わらず灰だらけになるのは当然、というご趣旨のまことにごもっともなご指摘を龍谷大学名誉教授中山淳子先生から頂戴した。ここに附記して前言を撤回する。